

271-168



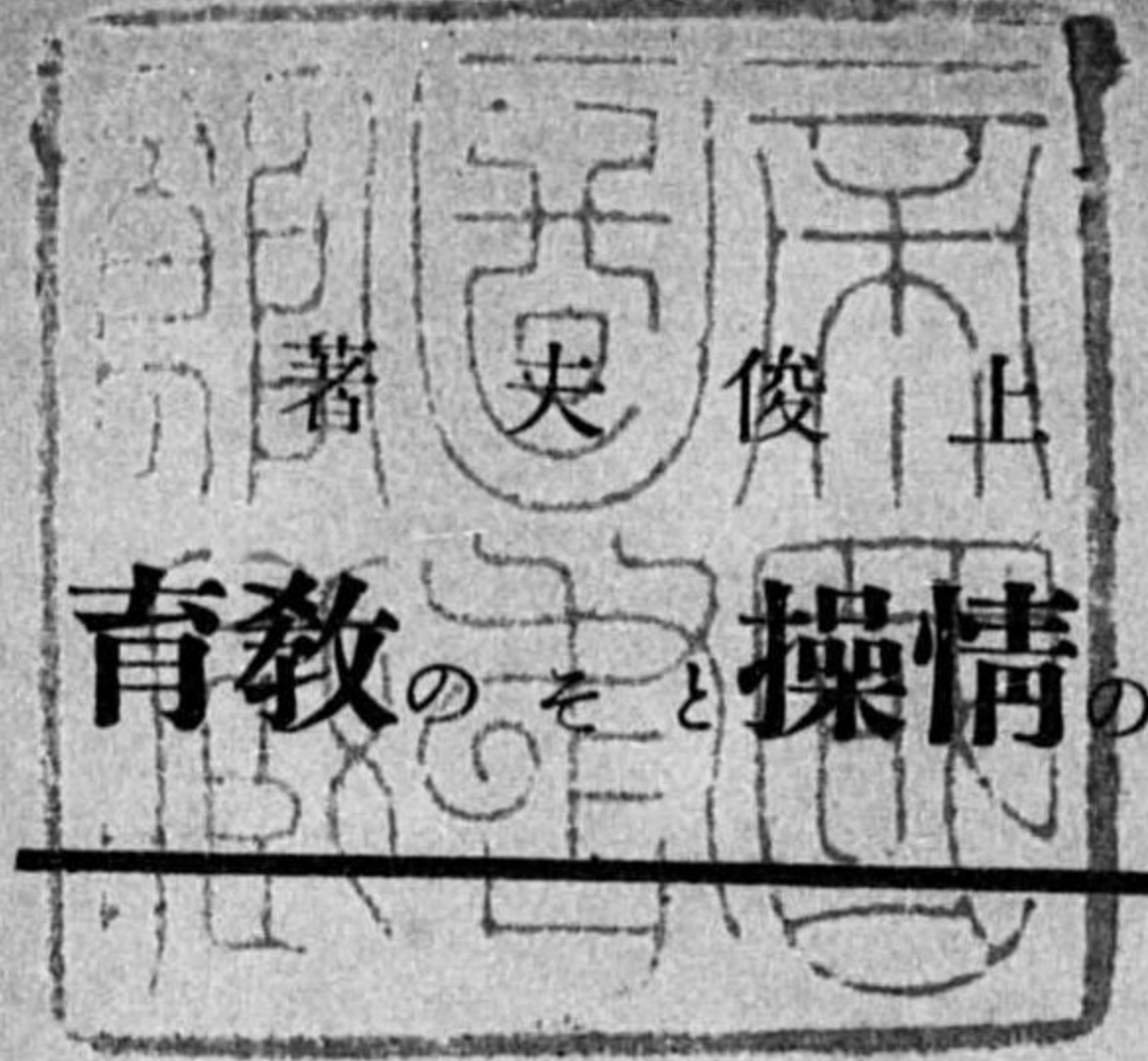
1200501356616



始



104



野上俊夫著

兒童情操の教育

叢文閣版



271-168

目次

第一章 情操教育とは何か……………一

 第一節 情操教育と品性の陶冶……………一

 第二節 情操の意義……………四

第二章 文化の發達と感情生活……………八

 第一節 文化の進歩と感情の類廢……………八

 文化と人間生活の本能脫化——文化の自己中毒——性的類廢……………八

 第二節 感情統制の不十分……………一九

 鍛鍊の没却——感情の感覺的耽溺——感情の統制……………一九

 第三節 文化と精神病的性格……………二八

 樂痛的傾向——社會的協調の缺如——抑壓された欲求の内訌——神經質的傾向……………二八

第三章 本能と感情……………三三

 第一節 本能と感情との關係……………三三

 感情の定義——本能——本能に伴ふ感情……………三三

 第二節 個體保存の本能と感情……………三六

目次……………一

食慾——逃避本能——鬭爭本能……………四六

第三節 種屬維持の本能と感情……………五五

性慾——養育……………五五

第四節 その他の本能……………五六

集團本能——適應本能……………五六

第五節 本能とその制御……………五六

第四章 感情と身體的條件……………七〇

第一節 感情と身體との關係……………七〇

第二節 感情と自律神經系……………七三

第三節 呼吸の變化……………七六

第四節 血行の變化……………七九

第五節 筋肉の變化及び感情表出の抑壓……………七八

第六節 消化器への影響……………八六

第七節 副腎への影響……………八九

第八節 健康狀態と氣分……………九一

第五章 精神の發達と兒童の感情……………九四

第一節 兒童に於ける感情の發達の分化……………九四

不分化する一般的興奮——快、不快の分化——恐、怒、喜の分化——親和の感情——以後の分化——自我感……………一〇四

第二節 感情的傾向の固定……………一〇四

模倣——條件づけ——賞罰褒貶——自制——人爲的變化……………一〇四

第六章 子供の生活と感情の教育……………一二六

第一節 生活環境……………一二六

第二節 家庭生活……………一二〇

母子の關係——他の家族との關係——兄弟——生活條件……………一二〇

第三節 子供の感情と自然界……………一二三

都會の子供と田舎の子供との比較——性格と自然界——自然を友とせよ……………一二三

第四節 友人關係と子供の感情……………一二〇

子供の集團本能——兒童集團の秩序——子供の喧嘩……………一二九

第五節 青春期と感情生活の變化……………一二九

青春期の感情的特質——同性愛——反抗——憧憬……………一二九

第七章 子供の道德的感情……………一三七

第一節 道德と本能……………一三七

道德の發生——子供の道德教育の主眼……………一三七

第二節 子供の道徳……………一七六

子供の善悪観——親に對する絶對感——子供の虚言……………一八二

第八章 子供の宗教的感情……………一九三

第一節 惑と迷……………一九三

宗教的感情の本能的基礎——現代生活と宗教心……………二〇〇

第二節 子供と宗教心……………二〇〇

子供の宗教教育の意義——子供の宗教的感情涵養の機會……………二〇六

第九章 子供の藝術的感情……………二〇六

第一節 藝術的な楽しみ……………二〇六

藝術の心理的起原——藝術の價值——娛樂と藝術……………二一六

第二節 子供と藝術……………二一六

兒童藝術——兒童の生活感と藝術——大人の藝術品と子供——自然と子供の藝術感——近代文化と子供の藝術感……………二二九

第十章 結 び……………三一九

第一章 情操教育とは何か

情操教育と品性の陶冶



情操教育といふ言葉は、明治の中頃から盛んに流行して來たものであるが、その意味する所は極めて漠然としてゐる。併し大體に於いて、兒童の感情生活を豊富にし、且之を陶冶洗練して、粗野に流れしめず、高尚なる品性の所有者たらしめんとするにあるやうに思はれる。随つて情操教育とは大體に於いて感情の教育といふのと同意義に見なして差支へない。

人間は感情の動物であるときへいはれて居る。今我等自身についてその日常の行動生活を仔細に検査すれば、其の大部分は理知よりもむしろ感情や本能に支配されてゐることを容易く見出すことが出来る。勿論人の智慧の進むに従ひ、其の時々、其の時に當面する事態を理解して適當なる處置を取

り、一時の感情に走ることを避けて、將來の永遠の利益になるやうに行動する習慣を得るが爲めに、感情的な行動は次第に比較的目立たないやうになることは事實であるが、又一方に於いてはそこに形成されて行く感情的な背景は、品性や人柄といはれるものゝ重要な成分となつて、行動に個性的な色彩を與へる素地となる。のみならず、統制せられ洗練せられた感情は、道德、宗教、藝術の如き我々の高級な精神生活の経緯となつて、人生美化の源泉となるが故に、感情の陶冶は人生に極めて重要な意味をもつものといはねばならぬ。

如何なる教育でも人格の陶冶と何等かの關係をもたぬものはないが、技術を練り知識を磨くを主眼とする所の所謂知的教育では、動もすると人間の品性全體の琢磨に遺憾あるを免れない。勿論知的教育を行つても、同時に自から感情の統制や陶冶も出來て行くことは事實であるが、餘りに知的方面が偏重せられると、人は往々にして知識のみを主として生活を統制しようとし、その結果感情的な欲求は十分に満足させられなくなり、随つて不自然な捌口を求めやうになり、其の人の性格が歪められ、精神上的の畸形兒ともいふべきものになることも少くない。故に知的教育に伴うて必ず適當なる感情教育を行ひ、感情を統制醇化する方法を講ぜなければならぬ。

知は人間のみ之を有して、他の動物には無いものといつても差支へない。知は科學を産み、之によつて人間は自然を克服し、自然を支配するまでに至つた。併しながら所詮人智には限りがある。人間は結局自然の支配の下に働かねばならぬ。人智の照し出すのは自然の極めて微小なる一部分であつて、彼方には人間の理智を以てしては到底理解し得ざる無限の暗黒が横はつて居る。而してその無限の暗黒世界こそ、我々の感情を動かし、之によつて我々の全精神を高め、之を新にし深くする所のものであり、又人間をして自然を尊敬し、自然を讚美する心を生ぜしめる原因なのである。人が餘りにその知に驕るやうになると、人智を超越したこの自然の偉大さ崇高さを忘れ、従つて感情生活が非常に淺薄なものとなる恐れがある。

我々は理智の示す所に従つて感情的衝動を抑制し、其の時々の事態に善處する事が出来る。併しながら、かくして知識を與へ物の道理を理解せしめさへすれば、それで直ちに感情的生活の醇化が出来ると思ふならばそれは大きな誤りである。殊に原始的な感情の激しい兒童に於いては、たゞこれに道理を説き聞かせるだけでは決して之を完全に指導することが出来ない。或る學者が犯罪者の一群に道德的知識に關する種々の質問を試みた所、彼等の殆んど全部が正當なる答へをなし得

たといふことである。即ち彼等は行爲の善惡を知らずして犯罪を行つたのではなく、知識としては十分辨へて居りつゝ、悪い事をしたのである。知識といふものは十分に反省の餘裕のある時には行爲を指導し得るが、咄嗟の間に判断を要するやうな場合には頗る無力なことが多い。かゝる危急の場合に人の行爲を決定するものはやはり感情である。即ち如何なる道德的若しくは美的な感情が陶冶されてゐるかといふ事が、咄嗟の場合に於ける人の行動に現はれるのである。此の如き感情の陶冶には、たゞ知識を與へるのみでは不十分で、感情生活そのものゝ教育練磨に俟たねばならぬ。

併し知的教育と感情教育とは決して相背反するものではなく、兩者並び行はれて初めて全きを
得るものである。智慧の練磨の中に感情を整へ、感情の醇化の中に智力を磨いてこそ、初めて人間品性の陶冶が出来、教育ある立派な人が養成されるのである。

第二節 情操の意義

私は情操を大體に於いて感情と同じ意味に用ひることを前に述べた。併し人によつては、殊に

心理學の術語としては、情操に特別の意味をもたせるものもある。

日常の用語としては、『操』といふ字にかなり重點が置かれてゐる。即ち豫め心に明かに定めた心懸けの如きものが意味されてゐる。それが感情的な形で發露するのを情操の現はれといふ。故に或る場合には情操といふ語によつて、人柄や品性を意味し、又或る場合には良心を意味することもある。普通に感情教育といはず情操教育といふ場合には、確かに斯ういふ道德的な意味が餘韻に響いて来る。感情の陶冶が品性に密接な關係をもつてゐる以上、それも當然であらう。

今日の多くの心理學書では情操といふ語は、英語の *Sentiment* の譯として用ひられて居る。即ち人間に起る無数の感情を分類するに當り、簡単な快とか不快とかいふやうなものを感情又は簡單感情といひ、之が複雑に結合したものを複合感情及び情緒と名づけ、その少しく和かく知的作用の加はつたやうなものを情操といふやうに分類して居るのである。併し實際の感情生活の動きを観察すれば、かゝる分類で全部を盡すことはよほど困難である。イギリスのシャンドといふ學者は、怒り、恐れ、嫌惡などの如き感情は或る對象や事態を中心として一定の關係をもつて組織化される傾向をもつと考へ、この組織化された感情的傾向の體系を情操と呼んだ。即ち、或る物

が我々の心の中にはいつて来た時、常に或る複雑な感情を経験するやうな、さういふ傾向を指すので、之は經驗的に發達したものだといふ。例へば或る人を憎いと思ふ感情は、分析して見れば怒りや、恐れや好奇心や嫌悪や種々のものが混じてゐる。併しかういふものが混じて、「彼の人は憎い」といふ感情的な傾向を作り上げてしまふ。従つて、彼の人が見に其處に居なくても憎いといふ感情的傾向は無くならない。彼の人が見の前に現はれると、憎いといふよりは、その場合によつて腹が立つたり、嫌悪の情が起つたりするのが普通である。斯ういふ組織化された傾向をシャンドは情操 (Sentiment) と呼んだのであるが、之は全く心理學上の特殊の用法であつて、所謂複雑な感情は斯かる基本的な感情の混合であり、基本的感情は系統的に組織化されるといふ、その學說に基いてのみ使用し得る言葉である。

普通心理學上情操といはれてゐるのは、フランスのリポールのいふ「複雑な感情」、即ち怒りや恐れの如き單純な感情が、知的發達や遺傳環境の影響、一般的に言つて精神發達に伴ひ、進化、發達、組成して、その結果出來上る高級な感情の意味に用ひられ、リポールの分類に従つて美的情操、道德的情操、宗教的情操、知的情操に分けられてゐる。即ち高等な精神生活に伴ふ洗練され

た感情の意味である。

このやうに情操なる言葉には一定した意味がない。それは、情操とはこんなものだと取出して見せる事も出來ず、唯精神生活の發達の中に形成されて行く感情の分化醇化を指すのであるから、私は情操に特殊の定義を與へず、寧ろこの語を避けて、感情教育と呼ぶ方がより多く適當であると考へる。

第二章 文化の發達と感情生活

第一節 文化の進歩と感情の頽廢

文化と人間生活の本能脫化 文化の未だ開けざる原始的な人間に於いては、その生活は殆んど本能的であり、又その環境も自然的で單純であつた。然るに人智が發達し、文化が進むにつれて、人々の生活は安易となり、便利となると同時に、生活の環境は次第に人爲的に複雑化して來た。

人類文化の發達は、主として其の知性の發達による。人類以外の動物でも幾分かは智識の働きの認められない事はない。即ち或る目的に向つて行動する時に、何度も失敗したり或は同じ危険に何度も遭遇したりすると、遂には其の目的を達する正しい路を發見し、其の危険を避けたりす

るやうになるのみならず、最も高等な動物即ち猿類、類人猿類などになると、簡単な事態に對しては初めから無駄な勞力を費すことなく、多少の思慮のあるやうに見える行動をするやうになる。殊に人間はこの點に於いては、遙かに他の動物より抽んで居り、失敗も餘り度重ねることなくして豫知的即ち考察的な行動をなす能力を有してゐる。人間は生活の慾求を満たすために、盲目的な行動を繰返して無駄な勞力を費す代りに、智力を働かせ、經驗に基き、事態を考察して一層有効且確實な行動をなし得る。殊に人智が次第に進んで道具といふものが利用されることが始まり、又多數が協同一致して生活するやうになると、人類の生活は次第に合理化され、少き勞苦を以て多くの効果を得るやうになつた。山野を開拓し、猛獸を征服し、食物を貯藏し、更に進んでは食物を栽培する農業が發達し、かくして人類は自然を改變して自己の生活に都合のよい新しい環境を作り出すに至つた。代を重ねるに従ひ、更に一層有効な道具や機械が工夫され、分業が盛んになり、環境の改修が益々進んで今日見るが如き盛大なる文化生活を現はすに至つたのである。生活が合理化され、欲求の満足が容易になると、人々の心に餘裕が生じて來る。初めは本能的欲求を満足せしむる爲めに求められてゐたものが、後には單に愛好する物として見らるゝに至

り、初めは恐れや怒りの対象であつたものも、知的な好奇心の対象となる。一例をあげれば食物の如きものは、初めはたゞ動物的食欲を満足せしめるだけのものであつたが、次第に料理法などが進んで来て、食事を一つの趣味として考へるやうになるが如きは前者の例であり、原始人が雷電を恐ろしいものとして考へて居たのに對して、現代人が之を研究して電氣の知識を發達せしめたなどは後者の例である。斯くの如くにして人々の満足は本能の直接的満足から次第に離脱して、趣味的、美的若しくは知的な満足を樂しむやうになる。斯くして藝術や知識が次第に發達し人々の精神生活は愈々豊富となり、文化的生活が多様な潤ひで満たさるゝに至つたのである。

かくて人間の行動が益々知的、洞察的となり、その結果一方では原始的な生活の苦悶が軽減され、他方では精神的な興味が増して行くにつれ、人々の感情生活は次第に本能から離脱し向上して行つた。人間が無智であり、環境が原始的である時は、その感情生活も亦頗る原始的で、他の動物と大差なく、天變地異に出あへば恐れて己が棲家に閉ぢ籠り、敵に出あへば猛烈に怒つて死か生かの闘争をするのであるが、人間の知性が發達し、環境が合理化されると、斯くの如き烈しい感情の起ることは次第に少くなり、人の行動は概して平靜になつて行く。例へば生後半年か一

年の赤兒は、机の向ふにある菓子をとらうとして手を差伸べても届かないと直ぐに怒つて泣くのであるが、少し大きい子になると、机を廻つて取り行けるので、そんなに度々怒らなくなるが如きである。文化が進むにつれて、人はかゝる簡単な原始的な場合に直ちに強い感情を激發させることが次第に少くなり、もつと複雑な、高い水準の出來事に對して感情を生ずるやうになる。その知識が豊富になり、判断が敏速になり、而も生活環境が微細になつてゐるので、感情の興奮も更に複雑な繊細な關係に伴ふやうになる。植物學者が路傍の雜草に強い興味をひかれ、音樂家が素人には感ぜられぬ細かい音の關係を喜ぶやうになるが如きは其の例である。之を要するに文化が發達し、生活が安泰となるに従うて、人の感情は原始的な本能から離脱して高級な精神的満足を求めるやうになる。單純な事態に際して粗野な強烈な感情を發することが尠くなり、微妙な事物の關係や、繊細な感覺に對して、洗練されたる感情を生ずるやうになるのである。

文化の自己中毒 以上は、文化の發達とそれに伴ふ人間の感情生活との關係を、極めて大まかに考へただけである。大體に於いて文化の進んだ民族や教養の豊かな上流の人々と、文化の低い未開民族や教養のない下層の人々とを比較すると、確かに前者の感情生活が深く且高尚で優

雅な所が多く、後者の感情生活は單純で粗野で幼稚である。即ち文化が進み教養が高まるにつれて、人の感情が複雑、繊細、高雅に進み行くのであるが、併しその半面に、文化の進歩と共に、人々の密集生活が益々發達するにつれ、必然的に種々な害悪が之に伴つて生じて來ることを見のがしてはならぬ。

文化の發達に伴ひ、環境の人爲化が益々著しくなり、又人々の集團生活が愈々進み行く結果、感覺的な刺戟が次第に多く且強烈になつて行く。現代の都會生活について考へれば此の事は直ちに理解せられる。汽車電車の音、自動車の警笛、現代建築の種々の機械の耳を聳するやうな音、或はラヂオ、蓄音器の音などが我々の神経を強く刺戟しいらたせざるを得ない。同様に人工的な照明が發達するにつれ、人々の休息すべき夜が明るくなつて行き、自動車のヘッドライトやネオンサインなどが我々の眼を眩まし非常な不愉快な感じを與へる。そして斯様な刺戟の中に人が生活して居ると、人は次第に此等の刺戟に馴れて了ひ、随つてかゝる人々の注意を惹くためには更に一層強い刺戟を與へなければならなくなり、警報とか合圖とか廣告とかは非常に強いか又は變つた刺戟にせられなければならぬやうになる。かくして我々の周圍に於ける刺戟は層一層と強烈になり、又

異様になつて行く。然るに刺戟が過度に強くなり異様になることは、人々の神経に不自然な緊張を強ひ、そのために種々な弊害を生ずるやうになる。その一例は今日職業病といはれる所のものである。轟々たる音響の中で働く重工業の職工には聽覺障害者が多かつたり、強烈な照明の下で仕事する電工等の中には、視覺障害や眼疾者が多いことはよく知られた事實である。此等は特に刺戟の強烈な場合であるが、左程でない場合でも、常に刺戟が幾分でも強すぎることを知らずに居る中に、長い間に此等の職業病に似た害悪をうけるやうな例は甚だ多い。例へば此の頃の新聞や雑誌で活字が益々小さくなると、今までよりも餘程強い光でないと讀みにくくなり、その爲めに細かい字を讀むことゝ、強い光で絶へず眼を刺戟して居ることゝによつて、我々の神経は二重の負擔に苦しむやうになる。斯様なことは文化生活の進むに伴つて、生活の凡ゆる方面に起ることとで、文化の發達に伴ふ必然的害悪の中の最も顯著なるものである。

感覺的刺戟の強くなると同時に、文化の進歩につれて精神的刺戟も亦次第に多くなる。讀むべき書物もなすべき仕事も解決すべき事件も次第に多く又困難複雑になり、又精神的欲求も次第に多方面になる。それによつて人々は一層刻苦勉勵するやうになるのであるが、心身未だ熱せざる

幼少の頃から、かゝる過度の精神的刺激に曝され、周圍から自己の能力以上の努力を強ひられることは、過度の感覺的刺戟に逢ふよりは一層心身の發達に有害である。のみならず、兒童は此等の感覺的及び精神的な刺戟の結果として、その身體の成熟に先だつて種々な早熟な欲求を發生せしめ、之を自然に満足せしめ得られぬ矛盾に陥り、そこから種々な害惡を生ずるやうになる。その最も顯著なものは性的早熟であるが、それ以外にも一般に子供が知的早熟に陥り易いといふのは、現今の都會生活の通弊である。早熟は其の結果として早熟となること多く、頗る恐るべきものであるが、感覺的並に精神的の刺戟の多い環境の中で兒童が成長する以上、之を避けることは極めて困難である。

次に又文化が發達すると享樂的な刺戟が多くなり、之が人類を頹廢せしめる最大の原因となる。文化の低い時代で、人々が日日の生活の爲めに苦闘してゐた頃には、食を得ることゝ眠ることが最大の慰安であつたに違ひない。然るに文化が進歩して衣食住に不安が尠くなるにつれて、人々は更に進んで積極的に娛樂を求めらるやうになつた。換言すれば、本能的な食や衣や性などの欲求が容易に満足させられる状態になると、更にそれに加ふるに感覺的な味や香や音や色などの

享樂を要求するやうになる。例へば踊りといふものは初めは恐らく豊年の際に之を喜んで自然に身體を律動的に動かし歌を歌ふやうになつた爲めに生じたものであらうが、農耕が進歩して毎年豊年が當然のことゝなつてしまふと、踊りは唯踊りや歌そのものの楽しみのために催されるやうになる如きである。かくして人類の生活には、生活の苦闘とは全然離れた純然たる享樂的刺戟が非常に多くなつて行く。本來食は腹を満たせば足り、衣は寒を凌げば足り、屋は雨露を凌げば十分なのであらう。人々の生活の最小限はそれで足りる筈である。それさへ十分に得られなかつた原始時代には、人々は生活の最小限を得んが爲めに苦闘し、之を得ること十分の満足を感じたであらう。然るに文化が發達して斯かる最小限は容易に満たされるやうになると、その上に多くの贅澤な要素が次第に附加されて行つた。食ふことに心配がなくなると食物の味や色や香や配合に贅澤をいふやうになる。裸體を蔽ふのに不自由がなくなると、衣服の模様や裝飾に意匠が凝され、家屋も次第に豪壯なものとなり、生活趣味が盛られるやうになる。かくて文化が發達する程、贅澤な甘美な隨分無用な刺戟が、人々の周圍に充滿するやうになる。之は人生を美化し、潤ひを生ぜしめるものではあるけれども、もし人々が生活に驕り、この感覺的な甘美な刺戟にのみ耽溺した

ならば、忽ち華美輕薄な風潮に流れ、遂には其の身を亡すに至るのである。

更に又注意すべきは、文化が進み、生活が容易となると共に、一方に於いては人々の仕事に分業が發達するために仕事が無味乾燥となるといふことが起り、その爲めに人々は其の生活に倦怠を覺えるやうになり易いことである。さうなると人々は感覺や感情を興奮させる刺戟を更に多く欲求するやうになる。精一杯心身を勞する者にとつては安靜が何よりも有り難いものに思はれるが、生活のために根限り精力を使ふ必要のない者には、安靜は退屈であり、單調である。何か強烈な新奇な刺戟をうけて、強い感情のかきたてられることを欲求する。食欲を増進させるための藥味、疲れた神経を無理に興奮させるための興奮劑の如く、波瀾のない安易な平凡な生活を刺戟する事件とか事變とかのあることを欲する。即ち生活が安穩になるほど、人は却つて原始時代の人類の屢々經驗したやうな恐怖とか憤怒とかいふやうな激しい感情の興奮を求めるやうになる。然るに現代人の住む文化的環境では、斯くの如き感情を興奮させるやうな自然の事件は多くない。そこで人々は人工的な刺戟によつてこの欲求を満足せしめようとする。現代の人が演劇や競技や冒險などを好むことの著しいのは、主として之によつて怒り泣き恐れ叫び、原始的な感情の興奮

に陶醉せんとする欲求から出て居るのである。然るに人間は次第に刺戟に馴れ之を感ずることの少くなるものであるから、その結果人々は益々強烈な或は新奇な刺戟へ刺戟へと走るやうになり、いはゞ藥味に耽溺し、享樂的な興奮にのみ溺れるやうになる。自然の欲求の自然の満足では満足し得なくなつて、遂に變態的或は淫蕩的頹廢的な享樂生活に溺れてしまふのである。かくして折角本能を脱却した種々の精神文化は、再び本能的欲求の直接の對象となり、卑俗な挑發的な文化が盛んになつて、遂には文化は自ら破滅に陥つてしまふのである。理性の未だ十分發達せず、感覺的欲求の強烈な青少年が、かゝる頹廢的な環境に置かれると、彼等が文化から受ける害毒は非常に強烈で恐るべきものとなる。

斯くの如く文化の發達は人類の發展に必須のものではあるけれども、それが人々の心に及ぼす種々の悪影響を考ふることなく、唯盲目的に文化の進歩に追隨する時は、却つて文化自體の中から必然的に種々の害惡を發生し、遂には人類を破滅に導くに至る。而もかゝる文化の弊害は文化の進歩に伴ひ必然的に起るものであり、且文化が急激に發達すればする程、顯著に現はれるものである。故に之を名づけて文化の自己中毒の現象と呼んでもよいであらう。

性的頹廢 文化の進歩に伴ふ害毒の中、最も顯著なるもの、一つは性的頹廢である。元來性慾は概して原始人程弱く、文明人程強い。原始人の生活は餘程動物の生活に近く、其の性慾の現はれにも亦動物の如く春とか秋とか一定の周期が存するのであるが、文化人になると其の性慾に斯かる定期性はなくなつて行き、一年中如何なる時にも現はれるやうになつた。加之文化の進歩と共に生活が安易になり、人々が懶惰になり享樂的になるにつれ、人々の周圍に充滿する強い感覺的刺戟は、性慾を挑發し易く、殊に現代都市の享樂的な生活では、必要以上に性慾を刺戟するやうな原因が非常に多い。かくて都會の子女は、性的機能が實際に發育する前に、精神方面から無用の刺戟をうけ、心身とも早熟になり、早くから勢力を濫費し、随つて早く老衰し易い。然るに一方に於いては生活が困難となり結婚期が後れるやうになつて、性慾の自然の満足が原始時代に比して著しく遅れ、その間種々の不自然な矛盾が起り、健全な性的生活を營むことが出來ず、性的感情の満足調和が得られず、感覺的末梢的な享樂に陥り易くなり、かゝる享樂が強くなると、一層強い刺戟を追うて種々な變態的な満足を求めるやうになる。

第二節 感情統制の不十分

鍛錬の没却 文化は人類が何千年の長い間に亘つて努力勉強して作り出した貴重なる生産物であるにも拘らず、之が程度を越すと種々の害悪を發生せしめて却て人類を破滅に導くといふことは、甚しい矛盾といはねばならぬ。併しこの矛盾は文化に殆んど必然的に伴ふもののやうに見える、人類文化の興亡史を振り返つて見ても、或る民族の文化が榮え、太平が続くと、其の民族は次第に當初の氣力を消耗し、質實剛健の氣風を失ひ、華美贅澤に流れ、淫蕩懦弱に陥り、遂には他の民族に征服されて亡び行く例が極めて多い。併しかういふ文化の自家中毒が起る最大なる原因は、人々が文化の恩恵に馴れ自己の心身を鍛錬することを忘れて安樂な生活を望み、修養を怠つて享樂のみを追ふ所に存する。人間の心身の發達に鍛錬の大切なことはいふまでもない。人間は或る程度の苦痛には之を堪へることは決して困難なことではなく、之を堪へ忍んでゐる中に次第に心身が練れて來て、この苦痛を苦痛と感じなくなり、それよりも大なる苦痛にも耐へ得るやうになるものである。かくして人類はその一生涯に於いて種々の苦難に遭遇して之を堪へ忍び之と闘

つてゐる中に肉體と精神との底力が養はれて來て、どんな困苦にも負けない體力心力の所有者となるのである。人類の發生以來我々の祖先は悠久なる年月の間かゝる生活の苦闘を續けつゝ次第に自然の環境を自己の生活に都合よく調節することに成功したのであつて、かゝる努力の結晶が即ち文化なのである。然るに文化が發達するにつれて、動もすれば人々は自分を鍛へることを忘れて只管に環境を調節する方のみ傾くやうになつた。例へば少しの暑さ寒さも堪へないで、ストーブや扇風機を用ひ、家の床の板敷や畳に満足せずして軟かな布團や贅澤な椅子を用ひ、種々の調味料や藥味を使つて食物を甘いが上にも甘くしようと、少しでも手足を動かすのを厭うて電車や自動車に乗り、電氣や瓦斯などの力ですべての用を達しようとする。かくして人々は心身の鍛鍊の機會を失ひ、唯々温室のやうな環境にのみ住むやうになり、かくして生活は益々奢侈贅澤に走つて止まる所がない。のみならず、心身の抵抗力が低下して僅かなる不快や勞苦にも耐へる氣力を失ひ、事毎に不平不満が起り、些細な變事に遭遇しても忽ち周章狼狽して心身の平衡を失ふに至る。かくて所謂文化人は一方には其の優秀な知力を働かし、機械を用ひて自然を征服し生産を増進し、原始人間の爲し得ざる大なる事業をなし、祖先の夢想だにもしなかつた多くの快

樂を味ふことの出来るのは實に結構なことであるが、他の一方には、その心身が次第に薄弱となり些細な事にも興奮し易く、持久性なく、落附なき輕佻浮薄な纖弱な心身をもつやうになり、遂には頽廢自滅の途をたどる外なきに至るのである。如何に文明が進歩し世の中が便利になつても、人間には人間として經なければならぬ生活の荒波がある。之に耐へるやうに心身を鍛鍊することが、人類の生存及びその向上に必要不可欠のものたることを忘れてはならぬ。

感情の感覺的耽溺

文化が進むにつれて、次第に強烈な刺戟が我々の周圍に充滿するに至

り、これが爲めに人はかゝる強い刺戟に馴れることは前に述べた通りである。その結果として一方に於いては人間の神経が細かく鋭敏に働くやうになると共に、他方に於いては神経が鈍麻して餘程強い刺戟でないと興奮しないと云ふ奇妙な矛盾が起つて來る。原始時代に於いて人類の生活が粗野であり、身體的の勞働の激しい時には常に心身の非常なる疲勞を生ずるが故に、人は何よりも安靜と休養とを欲求する。然るに文化が進んで生活が平穩になり單調になり、激しい勞働をすることが尠くなると、勢ひ人々は昔の人に比して餘計に刺戟を求め、之によつて感情を強く興奮せしめることを望むやうになる。然るに文化的環境にあつては人は前述の如く強い刺戟に馴れ

てゐるので、生活の慰安のために求める刺戟は非常に強いものとなり易い。それは、人々の慰安が感覺的耽溺に偏するからである。

苦しい刺戟に對して鍛鍊が必要であるやうに、甘美な刺戟に對しては抑制が必要である。不快を避け快を求めるのは人間のみならず一般に動物に共通な性質であるが、之が餘りに感覺的に走ると、調和を缺いて却つて心身を害するに至る。甘いものを好むからといって、過度に之を食へば腹をこはし、明るい光を喜ぶといつても、過度になると却つて眼を害するに至る。大體からいふと感覺的な快や不快は、部分的なものであつて、人間生存の大局から見ると、之を適當に統制せねばならぬものである。食慾と味との關係を例にとつて見るならば、極く大體からいへば美味な味は食慾を進め、不味い味は食慾を減退させる。故に單に食慾の一點のみから言へば美味なる物を食べるのが一番よく、若し食慾が無い場合には種々の調味料を加へて食慾を咬ることも必要となる。併し身體全體から考へると、食慾の減退したのは胃腸に故障のある場合が多いから、一時は食物を取ることを減じ或は絶食して胃腸を働かせぬ方がよい。かゝる場合に調味料などで無理に食慾を咬つて物を食ふと、遂に胃腸を害して健康を損することがある。或は之と反對に、味と

しては不味くても、身體全體の必要から言へば無理にも之を攝らねばならぬ場合がある。「良薬口に苦し」といふのはその一例である。斯くの如く感覺的な快不快は大局から見れば餘程統制を必要とする。然るに文化が發達すると、甘美な感覺的刺戟、藥味や調味料に相當する刺戟が非常に多くなり、人々はついに之に誘惑されて、生活の大局からの統制を忘れ、享樂に耽溺して心身を害することが極めて多い。

感情の統制 即ち人々の感情が頽廢するのは、之を一言にして言へば感情の統制が不十分となることに因する、本能は本來人間や其他の動物の生存にとつて必要な先天的傾向である。従つて人間の生活が原始的で、殆んど本能のみに基いて行動してゐた時には、外圍に重大な變化が起らぬ限り、却つて環境に順應した適當な生活を營んでゐたに違ひない。何となれば、本能の性質として、或る一つの本能が強くなり過ぎて却つて心身を害する程になると、他の反對の本能が強く起つて之を阻止し、或る本能が感覺的な誘惑に負けようとする、他の本能が之を制止し、かくて自然に調和を保たうとするやうになるからである。美しい色に魅せられて珍しい茸を食はうとすると、食傷して身體を害することを恐れる本能が之に反對する如きである。斯くの如き本能

の調和がとれず其の相互の間に葛藤が起つた時には、原始時代に於いてはどちらか強い方の本能が勝を制したのであらう。所が人知の進むにつれ、この本能の葛藤を理性によつて解決するやうになつた。即ちその時の種々の事情を考へて、或る本能を抑へたり諸本能の對立を調和したりするやうになつた。換言すれば經驗に基き判断によつて、本能の一方的な強化や盲目的な邁進を統制するやうになつた。文化が進むに従ひ、人々の生活は本能生活よりも遙かに上層に於いて營まれるやうになるので、益々この理性による統制は必要となり、本能のみに任せては十分に事態に適應して善處することが困難なやうになつた。然るに人々の生活の根本は本能的欲求の満足にあるので、理性による統制も畢竟それに基づいて生活の仕方を訓練し、本能的欲求の現はれ方を鍛錬するのでなければ、十分の効果を擧げることとは出来ない。之は中々一朝一夕に出来るものではなく、長い民族的歴史と、相當の期間に亘る個人的修練を必要とする。野蠻人の子供に急に多くの知識を授けても、文化人の修養を積んだ人のやうな振舞は出来ない。放埒な環境で育つた者が、急に種々な書物を讀んで知識を輸入しても、結局は附焼又に終る。

この故に、如何に文化が進んだ時代に於いても理性の力が未だ發達しない子供を育てる環境は

なるべく簡素なのがよい。勿論簡素と言つても、文化の進んだ時代に住む以上その恩恵に浴するのは當然である。現在は電燈も電車も電話もあり、或は鉛筆もゴムも本も玩具も兒童の周圍にあるものは凡て文化的時代に相應したものであつて、此等を子供の環境から除去しようとする如きは、全く不可能なことである。唯斯かる文化の恩恵を子供に與へる場合には、無用な裝飾や無駄な贅澤をなるべく避けて、實質的なることを旨とするがよい。それが寧ろ子供の本性に適ひ、子供の心身の發達を健全ならしめるのである。子供の満足はその心身の機能を十分に働かしめる所にあるので、少し歩き得るやうになつた子供が手を引かれたり抱かれたりするのを嫌ふ如く、何んでも子供は自分でやつて見、物を動かして見、工夫したり作つたりすることを欲するものである。餘りに人爲的な又便利至極な環境は子供に十分の満足を與へるものではなく、この點では、始終不足勝ちで壓迫され勝ちな、惨めな環境で育つた子供が、自分の欲求の十分な満足を得ないのと餘り變らない。餘り世話の行届いた環境よりは、子供が自ら自分を試して見る餘地の多い環境の方が、子供の爲めになるのである。同様に餘り物資が多く與へられると、子供は一つのもを何度も繰返して楽しむ暇がなく、次から次へと新しいものを追ひ、表面的な興味にのみ驅られ、深

く事物を味はうて其の真相を理解することが出来なくなつてしまふ。

大人にとつて必要な文化も、子供には必要でないものも多い。大人にとつても無駄なものは、子供には餘計無用なものである。大人の低俗な趣味に迎合するやうな刺戟は、子供にとつては全然用のないものであるのみならず、却つて心身の發達に有害である。子供の環境からは成るべく斯様なものを遠ざけるのが好ましい。何故なれば子供は何でもすぐ大人のすることを眞似、それによつて要らぬ享樂を早くから覚え、無用な刺戟に耽溺し、必要な修練を怠るからである。

人間が文化的な生活を營む以上、或る程度までは精神的早熟も免れないであらうし、又感情の尖鋭化も止むを得ないかも知れぬ。たゞ條件の複雑な文化的環境に順應するためには、理知を發達せしめて之により感情を統制しなければならぬ。文化の進歩にも拘らず徒らに原始生活を回顧して之を嘆美し理性を蔑ろにするのは根本的な矛盾である。併し理性を働かして感情を統制するには、鞏固な意志が養成されてゐなければならぬ。知識を廣め物の道理を澤山知つてゐても、知つてゐるだけでは、それによつて感情を統制しつゝまらぬ享樂に誘惑されぬやうにする力がない。又單に知識一方に走り、人間の本能的欲求から自然に流れ出づる美しい感情を全然抑壓するの

は、動もすると冷酷にして温情なき人を作る憂へがある。故に文化の進歩に伴ふ感情生活の陶冶は、理性を全く卻けるものでもなく、又理性にのみ頼るものでもなく、理知に導かれ感情に推進せられる堅固な意志を養成し、之によつて本能の盲目的邁進に知性的な指導を與へてやるにある。斯くして初めて感情の統制も完全に行はれるに至るであらう。感情生活を萎縮麻痺せしめるのでなく、十分に之を豊富ならしめつゝ知性的な意志を訓練することが大切である。且精神的早熟に基く欲求を知性的な高級な感情的喜びに醇化する道を講じ、粗野な心性に良い意味での文化的教養を潤澤に取入れしめることが最も肝要である。世間では往々本能の阻止を以て文化的教養なりと誤解し、幼い時から禁止や制壓づくめで子供を教育し、無理な作法や行儀を強制するのが文化的な感情教育であると考へてゐる人もある。かくては、子供に生活の喜びや満足といふものが全くなくなり、潤ひのない冷酷な不自然に大人びた人間を作るやうになる。かゝる角を矯めて牛を殺すやうな愚かなことをなすべきではない。唯子供の周囲が非常に頽廢的雰圍氣に充ち、無用な感覺的な刺戟が多きに過ぎる時は、子供が之に感染して早熟となり精神の發達が不調和になる危険があるから、かゝる無用な刺戟は出来るだけ之を遠ざけ、兒童の本能的な欲求を導いて、勞作

を喜ぶ習慣を作らしめ、即ち自分で働き、自分で工夫し、心身とも精一杯に活動する楽しみを十分に経験せしめることが大切である。

第三節 文化と精神病的性格

以上述べたやうに、人間文化の進歩に伴うて生活が複雑且不自然になり、環境の刺激が次第に多様且強烈になると、感情生活が之に順應して、健全なる調和を保つて行くことが困難になる。

即ち現代の人々は日々激烈なる生存競争場裡に忙がしい活動を営み、強烈なる刺激に曝されながら極めて緊張した生活を続けねばならないのであるから、之に堪へるだけの強壯なる精神身體を必要とするにも拘らず、文明の進歩により種々の器具機械が發明され便利安易なる文化生活の設備が完成するにつれて、人が昔の如く手足を動かして労働する必要が減少し、爲めに心身鍛練の機会が次第に少くなり、又人の心身に眞の慰安休息を與ふべき自然の風物からは遠ざかつて人工的な享樂を求め、酒や性の満足などに熱中する結果人の神経は虚弱となり疲労し易くなり、かくして感情生活の不調和と神経的虚弱とは相俟つて、文化生活が精神病的性格を多く生み出した

た重大な一原因をなしてゐる。

樂痛的傾向 感情的頹廢それ自身一つの病的現象にも數へられるであらう。強烈なる刺激を求め結果、所謂樂痛症 (Algolagnia) と稱する症狀を呈するものも少なくない。樂痛症といふのは讀んで字の如く苦痛を樂しむもので、普通は之を性慾に關係せるものにのみ用ひ、異性に苦痛を與へる事によつて性的快感を覺えるのをサディズムといひ、異性から苦痛を與へられて性的快感を覺えるものをマゾヒズムといひ、此二つを合せて樂痛症といふのである。併しながら此の現象は單に性慾に關係せる事柄に限つたものでなく、廣く人間殊に文化人の心理一般に共通せる現象であると思ふことが出来る。即ち文化人は強烈なる刺激を喜ぶ結果、往々にして慘虐なる状態を見て之を喜び、又戦慄を生ずるやうな恐ろしい經驗をすることを望む傾向もあるものであるが、前者は一種のサディズムとも考へられ、後者は一種のマゾヒズムでもある。怒りや恐れ、激しい極端な場合に於いては、身體的には此等と全く同じ効果をもち、強いエネルギーを放射する。然るに生物の活動によりエネルギーを放散する時には一般に快感が伴ふので、強い快感を求める者が、苦痛を樂しむ傾向をとるに至るのであらうと考へられる。

社會的協調の缺如 原始的本能のみでは文化的生活に順應する事が出来ない。本能の調和が出来ず社會的な訓練の出来てゐない者は、團體協調がとれず、不良兒や犯罪者となり易い。野蠻人の間でも社會性のない者は悪人であつたに違ひない。併し文化が進む程、本能的調和が困難となるので、集團的落伍者は多くなるわけであり、若し彼等にして原始的本能が強い場合には、社會的秩序を無視して之を満足せしめんとする。先天的に感情が興奮し易かつたり、氣分が變り易かつたり、又意志的抑制力が弱かつたり、或は無下に自己主張の強いやうな傾向をもつものは、斯かる社會的叛逆兒となり易い。不良兒、亂暴者、性格異常兒と呼ばれる者の中に、この種の者が多い。

抑壓された欲求の内訌 知的な訓練が相當出来て、表面上如何にも謹嚴貞淑に見える者でも、感情生活の誤つた抑壓の結果、性格異常的症狀を内訌してゐる者も尠くない。精神分析學では殆んどすべての精神病的症狀を斯様な後天的機制で説明しようとしてゐる。併しすべての症狀が後天的機制によるとは斷じ難く、寧ろ却つて先天的傾向に基く方が多いと思はれる。相當教養ある紳士が時に驚くべき性的亂行を敢てし、上流社會の子女に變態的性愛遊戲が流行し、可なり

學問のある人が邪教を盲信したりする事は、可なり多い例であるが、此等は勿論後天的に歪められた感情生活の現はれには違ひないが、やはりその人々の先天的稟質の薄弱劣惡に基因する所も尠くない。人類の進歩は一方に於いては却つて頽廢的變質的傾向を増加せしめるので、斯様な傾向の者が刺戟の多くして而かも禁慾を強ひられる現代生活に於いて、異常性格を内訌し易いのも當然である。

神經質的傾向 文化はこの様に種々精神病的な異常な性格を形成し易いが、その中でも特に注意しなければならぬのは神經病質傾向であつて、殊に所謂神經質といはれるものである。之は一名文化病とか都會病とか呼ぶ人もある位で、文化の發達した國ほど、又その中樞部をなす大都市ほど多く見られるものである。現代の都會人に共通の性質は常に何か焦燥を感じ、堅忍不拔なる節操に乏しく、神經も感情も針金の如く鋭く、僅かの刺戟に對して動じ易く、而も線香花火の如く瞬間的であり且疲勞し易い、常に何かを期待しながら心からの満足を感じ得ず、末梢的な興奮に走り次第に強い刺戟を求め、中毒患者の如く無氣力となつてしまふ。愛他的大乘的心情は消え失せてたゞ自分の利害の打算にのみ走る。かかる環境内で育成せられる子供は素質的にも環境的

にも斯くの如き薄弱輕薄な都會人に作り上げられてしまふ。現在の世に活動してその中樞部を占めて居る大人物は殆んど皆田舎より身を興し都會に來たつて勉強し、こゝで成功したものであるが、その子供は三代と續かぬ中に殆んど悉く没落してしまふ。その最も主なる原因は斯くの如き都會の害毒に侵され、都會病にかゝる爲めである。随つてかやうな環境内に於ける子女の教育には最も細心なる注意を要し消極的には頹廢に陥らぬやう、積極的には優良なる品性を涵養するやう、感情教育の方針を立てることが最も大切である。斯くの如くにして感情教育は又治療教育や精神衛生と協力することが必要となつて來る。(性格異常兒や神經病質兒の治療教育に關しては、本講座第十四卷杉田直樹博士著の治療教育學を参照され度い)

第三章 本能と感情

第一節 本能と感情との關係

感情の定義 感情を明確に定義するとなると、學者の間に種々異なる意見もあつて、相當困難であるが、常識的にいへば誰でも自ら経験して知つてゐるもので、愉快とか不愉快とか、喜び、怒り、恐れ、憎みなどの無数の種類がある。美しい色を見、よい音楽をきき、甘いものを味はひ、過去の楽しい経験を思出しなどとすると、愉快的感情を生じ、汚い色を見、騒がしい音を聞き、苦いものを味ひ、嘗て人に嘲笑せられたことを思ひ出す時には、不快な感情を生ずる。斯くの如く感情は視覚聽覺その他の感覺や知覺に伴ひ、又過去の記憶などに伴うて起り、此等の経験の背景をなしてゐることが多いが、又時とするところの背景をなす感情が心の前景に出て來て心の

全體を占領してしまふ事もある。例へば激しい怒りの爲めに目が眩んで、他人の眞心をこめた忠告などの全く耳に入らないとか、或は激しい愛情の爲めに盲目となつて、愛人の缺點や短所が見落されるといふやうなのが其の例である。

本能 すべて動物は其の生理的欲求に基き、又環境の事情に應じ、自己の内部からの衝動に動かされて、然かせざるを得ずして或る一定の行動をとる傾向を先天的に有してゐる。之を本能といふ。卵から出たばかりの雛が間もなく親鳥の後に随つて食物を求めあるき、親鳥が恐ろしい物を見てけたまひしい聲をあげると雛がすぐに親鳥の翼の下に隠れたりするのは、いづれも雛鳥に先天的に具はる本能の働きによるのである。人間に於いても之と同様であつて、生れたばかりの嬰兒も母の乳房を唇に觸れさせてやると間もなく之を吸ひ、一定の乳汁を飲み込むと自然に吸ふことを止めて乳房を口から押出す。或は掌の内面に物を觸れさせると自ら掌を閉ぢて之を握み、更に生後數ヶ月になると兩手と兩膝とで身體を支へて這ひ出し、物につかまつて立上らうと努力する。此等はすべて本能の現はれである。人間は動物の中でも最も高等なものであるから、その一生涯の中に種々の教養を受け種々の技術や知識を學習し、かくて其の行動は次第に複雑を

極めるやうになるが、併し如何に複雑なる人の行動といへどもその根本の動力をなすものは何等かの本能に外ならぬのである。

本能のはたらきは、動物が其の生理的欲求に従ひ種々なる環境の變化に處して之に順應し、以て自己の生存を保持し、進んで自己の種屬を永遠に存続せしめる事を目的としてゐると考へられる。昔の多くの哲學者は、人間の智性を尊重して之を人間と他の動物とを區別する標準なりと考へ、之を本能と對立せしめて、動物は本能を有して知性を有せず、人間は知性を有して本能を有せずと考へて居たが、よく動物や人間を観察して見ると兩者の間に決して斯くの如き根本的な差別はあることなく、兩者とも同様な數多の本能を有して居るのであるが、たゞ動物が高等なものに進むほど其の本能的行動の一定の型が不安定不完全となり、教育や練習による進歩の可能な餘地が次第に廣くなり、知能の發達と共に洞察的な行動が多くなつて來るのである。併しながら人間の如き最高等な動物に於いても其の行動の根本はやはり本能の力である。例へば子供が柵の上の菓子をとるために踏臺を用ひたり、戸柵の中の果物をとるために鍵の開け方を覚えたりするのは、他の動物では到底及び得ない知能のはたらきによるのではあるけれども、子供をしてかゝる知能に

よる行動を起させ、かゝる工夫をこらさせるやうにした所の根本動力はやはり他の動物と共通な食慾である。或は人間が現代の科學の粹を凝した建築術によつて立派な高層建築を造るのも、鳥や昆虫が巢を營むのと、根本に於いては同じ本能から出て居る。元來人間の生活が他の動物に比して、驚くべきほど複雑となるのは、人間の環境の諸條件が非常に多様になるのによるのであるから、之に處するには、人間こそ他の動物よりも、最も多數のそして洗練された本能の所有者でなければならぬのである。又事實に於いて人間は他の諸動物の有する多くの本能を殆どん悉く所有して居る外に、人間のみに見らるゝ高尚なる本能をも數個所有して居るのである。

本能に伴ふ感情 前述の如く本能は動物がその環境に適應し、自己の欲求を満足せしめるやうな行動を起すのであるから、自ら身體の運動や緊張若しくは「構へ」を生ずる。この身體の運動や緊張を生ずるには動物の神経系統全體の活動を必要とし、同時に又その身體の運動から、神経系統に種々な變化を生ぜしめる。かゝる神経系統の活動が我々の心には種々の感情として經驗されるのであらう。とにかく我々が種々の本能的行動をなすに當つては、同時に可なり激しい特殊の感情が經驗される。いはゞ本能の活動によつて心が激しくかき立てられるのである。此等

の感情を、その時の本能の性質によつて、怒りとか恐れとか悲しみとか名づけるのである。それ故に斯様な激情の名稱は、感情の名として用ひられる時もあれば、又その時の本能的行動を指して言はれる場合もあり、感情と本能とは日常に於いては混同して言はれてゐる。それ程感情と本能とは密接な關係にあるものである。

斯様な本能的行動に含まれて經驗される感情は、前に例として擧げたやうな感覚や知覺の背景として經驗せられるものよりは、著しく強く激しい性質のものであり、身體的に重大な影響をもつてゐる。勿論感情としての性質に於いては、單なる快不快の氣持と大して異なるものではなく、只他の種々の精神作用、殊に運動感覺や有機感覺と結合した複雑なものであり、その身體的効果に於いて強烈であるといふに過ぎない。併し感情生活の醇化や、品性の陶冶といふ點からは、之が本能と直接結びついてゐるが爲めに、極めて大切である。

人間の有する本能の數は頗る多いが、之を如何に組織立て、分類するかといふことになる。學者の意見が種々に異つて居る。併し前述の如く、本能の目的が個體の保存、種屬の維持といふことにあるから、この目的の點から本能を分類するのが一番妥當と思はれる。先づ本能を個體保存

のためのものと、種屬保存のものに分け、更にこの間から発生したものに説き及ばうと思ふ。

第二節 個體保存の本能と感情

個體保存の本能の中に數へられる主なるものは、食慾、逃避本能、鬭争本能の三つである。

食慾 生物の生活に何よりも大切な條件は呼吸する事と營養を攝る事とである。併し呼吸は無限にある空氣を自然に吸ひ込んで又之を吐き出すやうに動物の身體の構造や機能が出来て居るので敢てその爲めに手足を動かして行動するには及ばない。然るに營養を攝取するにはこれ程簡單には行かぬ。時には幾多の困難を侵して食物を探し、又は他の動物と鬭つて之を殺して食物としたりせねばならぬ。それで總ての動物には強い營養本能即ち食慾が具はつて居り、空腹時には食慾が猛烈な力を以て食物を取ることが要求する。あらゆる本能中で食慾は最も根本的なものである。原始人の日常生活は、殆んど悉くこの本能を満足さすために、自然と戦ひ、野獸と鬭ふにあると言つてもよい。人類が稍進歩して平和な社會を營み、共存共榮の生活が成立するに至る根本條件は其の社會を形づくつて居る人々が毎日規則的に食物を得る事にある。此の條件が満たされな

いと社會は忽ちに崩壊してしまふ。戦時や天變地異などの時に、食物の不足を來たした場合には、平生教養のある立派な人々も餓虎の如くに食物を争ふことは幾多の實例がある。聖人も、『衣食足つて禮節を知る』とか『恒産あつて恒心あり』とか云つて、人間の教養には、先づ第一にこの動物的本能を十分に満足せしめる事を必要とすることを認めてゐる。然るに今日の文化社會に住む人々は動もすると、食慾が斯くの如く強烈なることを忘れ、平生食慾の事を語るを恥のやうに考へたりするのであるが、それは食物が豊富にあり食慾が比較的自由に満足さされる秩序ある社會に住み馴れて、食物に對する動物的欲求と之に伴ふ激しい飢渴の感情を忘れて居るが爲めである。即ち文化人は一般に食物に對する動物的全身的な欲求よりも、味覺や嗅覺の一時的享樂に耽り、食物を美的趣味的にしようとして居る。然るに一朝天災地變や戦争などの爲めに人々が眞に食物の缺乏に直面した時は、激しい飢渴の情と、動物的な食慾とに苦しめられて食物の爲めに鬭争をも敢てするやうになる。それ故に教養も趣味も皆根本的本能たる食慾の満足を前提として居るのであつて、兒童に十分教養を與へ正しい禮節を得しめようとするならば先づ第一に十分に食慾を満足せしめねばならぬ。胃腸の弱い子どもなどが幼時から食物を嚴重に制限されたりして

居ると、その性格の上にも一種のひがみを生ずるものである。食慾を十分満足せしめ、身體を強壯にし、感情を圓滿に意志を強固ならしめたあとで、或る程度まで兒童の生長した後には、萬一の場合に備へて、『渴しても盜泉の水を飲まず』とか『武士は食はねど高揚子』とかの精神を涵養するのは望ましい。之と同時に食物の豊富に馴れて驕奢贅澤に流れ、未梢的感覺的な享樂に走るのも戒めねばならぬ。文化人の教養として、或る程度の味覺や嗅覺の洗練は必要であるが、徒らにかゝる下等な感覺の樂しみのみを求め、食物に叱言をいふことを誇るが如きは、精神的教養の貧弱なることを自白するものである。

逃避本能 動物は其の周圍に起る天災地變や、或は猛獸毒蛇などの外敵から自己の生命を保護し、又健康を保つ必要がある。逃避の本能はこの爲めに極めて大切なものである。この本能の働く時に經驗する感情を恐怖といふ。恐怖は通常或る危險に遭遇して後に之に對して起るのが常であるが、時とすると何等其のものから危害を受けたことなく、又通常危害を與へることの殆んど無さうなものに對しても強く恐怖が起ることがある。例へば或る年齢になると急に今まで少しも恐れなかつた蛇とか毛虫とかを恐れ出す兒童があるが如きである。或は屠殺場に曳かれる牛が、

一度もさういふ經驗がないのに極力抵抗したり、一度も落ちた例がないのに嬰兒が椽側から恐るゝ覗いたりする如きは此の類の恐怖に屬するもので、或は豫感恐怖とでも名づくべきかも知れぬ。殊に人間の神經病的症狀の中には、何等の原因も認められぬに拘らず極端な恐怖を覺えるものが多い。此等の事から考へると恐怖は必ずしも危險の經驗に基いて生ずるものばかりではなく、危險を未然に防ぐといふ種類のものがあるかも知れぬ。

人智が進歩し、人類が互に協力一致して社會を作るに至つて、人間の生活状態は次第に安全平穩になつて來た。猛獸や外敵の襲來に對しては豫め城壁や武器などによつて防備を堅固にし、自然の天變地異に對しても、科學的にその正體を明かにし、之を避ける設備を考へ、或は之を豫知せんとするまでに至つた。その結果、現代人は原始人に比して次第にかゝる自然や外敵などに對する恐怖心を著しく少くしてゐる。勿論原始的な恐怖の痕跡は残つてゐるが、之を理性によつて或る程度まで制壓し得る程になつてゐる。併しながら文化人はそれ故に一般に恐怖心が少くなつて行くかといふと決してさうではない。動物や原始人などの少しも感じなかつた新しい恐怖心が次第に發達して來てそれが頗る強くなつて我々を苦しめて居る。例へば病氣を恐れるのはその一例で

あつて、コレラや天然痘が上海邊に流行すると、日本人全體が強い恐怖心を起して豫防に注意するが如きである。一體に科學的知識が普及するにつれ、一方には無用な恐怖心が少くなつたが他の一方には新しい恐怖を生ぜしめ、或は無用な危惧を生ぜしめるやうにもなつたことは争はれない。醫療や育兒法に關する或る程度の知識が一般に普及するにつれて、自分の身體に種々な病氣があるやうに考へたり、或は若い母たちがその愛兒の健康を過度に憂慮して却つて健康を損ふといふ例は甚だ多い。その他青少年やその親たちが學校の試験を過度に恐怖するが如きもその著しいものであらう。即ち文化人は自然界に對する恐怖心を相當に征服し得たが、文化生活そのものゝ中から新しい恐怖の原因たるものを發見し、其の或るものは當然恐れて避くべきものであるが他の或るものは何等恐るゝ必要の無いものであるに係らず之を恐れて居るのである。一般に本能は人間の生存に極めて有用であるけれども、其の度を越すと却つて有害になり易いものであるが、恐怖も亦その通りで、大體に於いて身を護るに極めて必要であるが、度を過ぎると却つて心身に害がある。殊に文化生活の中から醗酵する文化的恐怖は、恐怖が恐怖を産んで際限なく進行し、理性を以て制御する事が困難になつて、其の結果神經質、神經衰弱、恐怖症の如き神經性疾患を生ぜしむるに至る。

斯くの如く恐怖はあらゆる動物に共通なる強い本能であるから、如何に人間の文化が進み理性が發達しても、その爲めに恐怖の無くなることはない。むしろ理性は恐怖に對しては極めて無力であり、恐怖に驅られて居る人に如何にそれが恐ろしくないといふことを説明しても無効である。多くの精神病的恐怖症では、患者自身も決して恐ろしがる必要のない事をよく知つて居りながら、而も恐怖に捉はれて居るものが甚だ多い。或は恐怖そのものよりも、恐怖と理性との抗争が疾患の本體である場合も多い。斯く恐怖は不合理なものであるから、學識あり教養ある立派な人でも、随分滑稽な恐怖をもつてゐる場合がある。

恐怖の訓練は道徳的に頗る大切である。敬虔な氣持は、恐怖の洗練の結果であると言ひ得る。未開人の宗教には、自然に對する恐怖が畏敬の念に變つて生じたと思はれるものが多い。死に對する恐れ、罪業に對する恐れなどから、救濟者といふやうなものに對する絶對信憑の念を生ずるに至り、之が信仰の基礎となる。科學の時代にあつては、迷信として排斥せられるものが多いが、併し迷信の基礎となつてゐる心理的過程には、一片の科學的知識を以ては容易に動かす事の出來な

い本能的な深いものがあることを考へねばならぬ。

闘争本能 逃避の本能は消極的に身を護るものであつた。然し「身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ」で場合に臨んでは敢然敵と闘ひ、之を瘞してこそ、眞に災害を除く所以ともなる。窮鼠却つて猫を噛む如く、逃避の本能で身を護る事が出来なくなつた窮地に於いては、逆に敵に抗し之を滅ぼさんとする態度をとる。之が闘争の本能である。闘争の本能が現はれたのは動物の進化過程に於ける一大飛躍で、之によつて自己の環境を征服し、永續する安住の地を得るに至つたのであらう。闘争の本能に伴ふ感情は怒りである。逃避本能も闘争本能も共に外からの危険に對して身を護る本能であるから、その起る場合はよく似てゐるが、怒りは又自己の慾望が阻害された時に起り易い。生れて間もない赤兒が空腹を感じる時、初めは弱い聲で泣いて之を訴へるが、それでも尙ほ乳を與へられぬ時は、次第に泣き聲が激しくなり、遂には手足を痙攣的に動かし顔を眞赤にして泣き叫ぶに至る。これなどは人間の怒りの最も早い時期のあらはれである。

動物に於ける闘争の具は、何よりも體力であり、又牙、角、爪の如き武器である。人間は種々の器具を工夫せる中に最も早く棒とか石塊とか斧とかの武器を發明し、之によつて己れよりも體力の遙かに優れた野獸と對抗し得た。かくて人間の最も著しい特色である智力は、年と共に益々發達して次第に種々の學問を産み、之によつて自然を征服することが進むに従つて、體力による闘争は漸次に智力による闘争と變つてしまつた。

一人の子供の發達に於いても大體之と同じ變化が見られる。最も幼少な時は原始的な慾望と結びついた怒りを示す。食物が與へられぬ時、身體の自由を束縛せられた時など激しく叫喚して怒る。次第に生長して兄弟や友人と遊ぶやうになると、それ等の人々との間に種々な慾望の衝突が起つて其の爲めによく喧嘩をする。子供の喧嘩は自然の制裁であつて、必ずしもすぐに之を制止する必要はない場合がある。悪い事をした幼い兒が、良い強い兒の爲めに腕力の制裁を受けることは道德的發育の上からむしろ望ましいことである。青年期になると、理性が次第に發達する爲めに腕力に訴へる争ひは次第に減少するが、時々喧嘩の起る時にはその結果は往々重大な死傷を生ずることもある。殊に此の時期に於いては團體的精神の發達と共に、集團の名譽を毀損するやうな行爲に對しては、激しい怒りを覺え、腕力に訴へる事も往々ある。義侠心、廉恥心等は、之から發達する。又種々社會の不徳漢や悪人などに對する公憤、義憤が發達し、往々にして自己

の生命を犠牲にしても此等のものと戦ふことを辭せぬやうになる。青年心理學の樹立者たるアメリカのスタンレー・ホールは少年時代に自己の命を賭して肉體的な喧嘩をなし得ないやうなものは、大人になつても十分な道徳的な生活は出來ないと言つてゐる。廉恥、義侠、忠節を最大の國民道徳としてゐる我が國民は、幼少時から正しい怒りの修養を缺いてはならない。

第三節 種族維持の本能と感情

種族維持のための本能の中最も顯著なものは性慾と養育とである。之に伴ふ感情は、何れも愛といはれるものであつて、性慾に伴ふものを戀愛といひ、養育に伴ふものを慈愛といふ。

性慾 種族を保存するために必要なのは、雌雄兩性が結合して仔を産む事である。最も下等な生物では一つの生物が半分に分れて二つとなつたり、身體の一部を芽として外に出して蕃殖したりするが、次第に進歩して雌雄の區別が出來ると、兩方の卵を結合せしめる事が必要となり雌雄相求め相接近しなければならぬ。この機能が生殖本能又は性慾である。併し多くの動物では此の本能は年中常に現はれるものでなく、一定の交尾期、産卵期があり、その時だけ性慾が現はれる。

人類に於いても野蠻人には斯くの如き性慾の周期性が存するが、文化が進むにつれて、かゝる周期性は消えて性慾は如何なる時期にも發動するやうになつた。

性慾の成熟は他の本能より比較的遅く、通常は青年期の初め即ち十二三歳前後から徐々に現はれる。斯くの如く性慾の現はれが遅い爲めにその間種々後天的な影響をうけ、又その現はれる時期や強さについても、著しい個人差がある。この個人差が種々の方面に於いて現はれるといふ事は生殖本能の最も大切な特色であつて、それだけ又環境的影響も受けやすいのである。例へば性的刺戟の多い都市などの兒童はかゝる刺戟の少ない地方の兒童よりも早く性的に熟するが如きである。

性慾の最初の現はれは異性間の求愛殊に雄の雌に對する求愛である。動物でも求愛の定つた経過をとるものがあり、蜘蛛の如きは非常に念入りである。人間に於いては初めは只漠然と性の目覺めとでもいふべき異性への憧れがある。次第に生長するにつれて種々の機會から異性の中の一人を選び出す様になり、自分を相手に見せびらかし、相手の注意をひかうとする。この見せびらかしは動物界にもよく認められるもので、鱗の色が鮮かになつたり、羽の色が強くなつたり、特殊の香氣を發したり、音聲を發したりする。人間でも同様に、種々の美や精神の能力を以て相手の

注意をひきつけようとする。この間の現象が、文學や藝術に美化され、人々は技巧を凝し、呈媚を工夫する。

性慾に伴ふ感情は戀愛である。これは本質的に犠牲的利他的な感情である。本來人間は青年期以前即ち乳兒や幼兒の時代には徹頭徹尾自己本位であつて、利他愛他といふことは全くない。他人よりも多く食物をとり、他人よりも多く玩具を得、他人よりも多く面白い目をしようといふのが兒童の天性であつて、己れを後にして他に譲るなどといふことは全く無い。又それが自然なのである。何故なれば、幼少な子供はまだ十分發育して居らず個人として不完全なのであるから、早く生長して自己を完全にするといふ事が何よりも大切だからである。然るに青年期に入つて身體が次第に成熟し個體として一應完成を遂げると、今度は自己を犠牲にしても、種屬のためにつきす事が大切になる。この犠牲愛他の第一歩は、性愛から始まるのである。

勿論子供は、性慾の發現する前に、隣人を愛すべき事、兄弟友達仲よくすべき事を教へられてゐる。けれどもそれは單なる知識であつて、本當に内心から推されての行動ではない。純な戀愛關係にある青年男女が、互に自分を忘れて相手のためを思ひ、相手の事のみ心を奪はれてゐる

のとは根本的に違つて居る。

二三十年前から有名になつたフロイド一派の精神分析學では所謂『汎性慾説』を唱道し、人間の行動の動機を凡て性慾に歸し、性慾は人が生れた當初から種々の行動に於いて現はれると説く。例へば嬰兒が母の乳房を求めるのも、擱んだものを口にもつて行くのも、親に對して強情になるのも、子供同志の身體的遊戯も、すべて性慾の現はれたといふのである。之が又、青年期の戀愛謳歌と結びついて、戀愛至上といふやうな考へが現はれ、子女の心を害した所も尠くない。

成程子供は幼い時から性的なことにかなり強い興味を示すことが間々ある。出生の真相を知りたがつたり性器を弄したり異性の友達の身體を調べたがつたりすることもある。併し斯ういふ大人から見れば性慾的な事柄も、子供に生殖本能たる性慾が現はれてゐるといふ證據にはならない。本當の自然の目的に従ふ所の欲求は、身體的にそれに應じ得る程度の成熟がなければ起らない。それが自然の理である。勿論、さきに述べたやうに、性慾の現はれには著しい個人差があるので、時には非常に早熟で三四歳にして既に現はれてゐる如き例もないではないが、それはいふまでもなく例外であり、異常であつて、普通は青年期の初頃になつて初めて性慾が徐々に現はれ、青年

期の發育の進むと共に急激に強くなるものである。勿論、現代の社會は性慾の刺戟となるものが非常に多いから、兒童の身體が未だ十分に成熟に至らぬ前に性慾が発生し其の爲めに種々の害惡を生ずることが多いから、之は大に警戒せねばならぬ。

今これを食慾と比較して見よう。我々が生理的に十分に飢えてゐる時は、食慾が強くなり、食物の味や香りが少し位悪くとも、まづい食物をうまく食ふことが出来る。併しながら他の一方からいへば食物の味や香りや色は、食慾を挑發することも亦争はれない。子供が甘さうな菓子や御馳走を見ると、今食事したばかりでも之を欲しがらる。併しかやうに満腹な時に甘さうな食物でも之を食べると、身體を害する。性慾に於いても亦これと同じやうに、外部からの種々なる刺戟によつて、身體の自然の發育では性慾の現はれないやうな時期に於いて、早く既に之を挑發すれば、不自然な早熟に陥つて、後の發育を害し、健康を損ふことが多い。我々は斯ういふ悪い刺戟から子供を護らねばならぬ。殊に悪い友達や召使ひなどの教唆や、挑發的なる映畫や讀物等になるべく接せしめないやうに注意せねばならぬ。

後に一括して述べる筈であるが、すべて動物が單純幼稚な時には、其の本能的欲求は直ちに之を満足せしめんとするが、動物が次第に高等なものに進化するに従つて、かゝる本能を或る程度まで抑壓してその満足を或る時期の後まで延期せしめる事が出来るやうになる。之は一方に於いては後天的な訓練にもよるが、又その種屬の先天的な能力即ち體制的機能にもよる所が多い。人間が他の動物に比して最も優れてゐるのは、本能的満足を可なり長い間抑壓延期せしめ得る體制的機能（特に新腦の發達）を有し、隨つて他の動物に比して遙かに多くの訓練の可能性を具備してゐる點にある。人間の子供は、一方では本能を十分強く發達せしめられねばならぬが、他方ではこの本能の抑壓延期を十分に訓練されねばならぬ。下等な動物では其の本能が主として自然の周期や、自然の統制によつて調節されて居るが、人間はさういふ自然の統制を多くうけない代りに、自分自身之を抑壓し延期せしめねばならぬやうになつてゐる。本能の中でも性慾の發現は比較的におそく、隨つて其の長い年月の間に本能抑制の訓練が十分出来るので他の本能に比して遙かに抑壓制御の容易な状態にある。青年子弟の性生活を正しく導くには、一方では外部からの無用な挑發的な刺戟をなるべく遠ざけ、他方では訓練による本能抑制の力を強からしめねばならぬ。同時に、現代生活の經濟状態によつて不自然に延期されてゐる正常な性的満足即ち正當なる

結婚を餘り遅らさないやうにしなければならぬ。

養育 下等な動物に於いては親はたゞ卵を産みさへすればよいので、後は自然の環境と、與へられてゐる本能によつて、子供は自分で生活して行き得る。然るに動物が高等になるに従ひ、生れたばかりの子供はまだ十分に完成して居ない爲めに自活が困難であり、親の保護養育を受けねばならなくなる。之に應じて其の動物は卵や子供を産むのみでなく、更に之を保護し養育せんとする強い本能を生ずるやうになる。之が即ち養育本能であり、之に伴ふ感情を慈愛といふ。人間は他の動物に比して最も高等複雑であるから、人の子供は他の動物の仔に比べて、生れた時には最も未完成の状態にあり、親の保護なくしては單に生存することさへも困難である。之に應じて人の親の養育本能は亦最も著しく發達し、乳を飲ませ、衣服を着せ、大小便の世話をやき、その他何から何まで世話をしてやるのみならず、その世話をしてやる期間が頗る長い。

併しながら養育本能はたゞ人間のみにあるものでなく、その他の動物にも可なり強く之を所有して居るものがある。昆虫、魚類、鳥類、哺乳類などに於いて相當に強い母性愛や父性愛の存する事實は日常我々の見聞する所である、彼等が非常な困難や危険と闘ひつゝ其の子供のために餌を漁り、敵が襲ひ來る時には親は身を以て子供を保護し、己れよりも遙かに強い敵に對しても決して退くことなく之と闘うて遂に自ら死んでしまふ。山火事の時、鳥の巢が焼けたあとには、卵を庇つて焼死してゐる親鳥を發見する事がある。仔を生んだ飼犬は近づいて來る飼主にさへ噛みつくことがある。

人の親の母性愛や父性愛は此等の動物に比すると更に幾十倍の強さを有して居る。只人間社會に於ては、鳥獸の場合の如き重大な危険が頻繁でないから身を殺して兒を救ふといふやうなことが認められる機會は少い。併し一旦天變地異その他の爲めに愛兒が眞の危険に頻した時に示される母親の献身的な行動は、鳥獸の類より遙かに強烈である。加之人がその子を養育するのは他の動物に比してその期間が頗る長い。文化生活が進んで社會が複雑になるに隨ひ、人が獨立して社會の一員となり得る時期は次第に後れるから、親が子を世話する期間は従つて益々長くなつて行く。

養育本能に伴ふ慈愛は戀愛よりも更に一層愛他的で、全く自己を顧ることなく、盲目的な強烈な愛情である。男女間の戀愛では未だ自分が相手を受する代りに相手からも己れを受することを

求めるといふ半利己的な交換条件の如きものがあるが、慈愛にはそれが全然なく、全く子を一方的に愛するのみで何等の報償を要求しない。戀愛に於いては男女がほゞ同等の發育をなし同等の力を有つて居るから、一方から他方に與ふると共に、亦それと同じやうなものを與へかへすのが理想的な愛であり、所謂「相思相愛」となり相互的な關係となるのであるが、親子に於いては子は全然無力で何等親に報いることは出来ないものであるから、たゞ親から與へるばかりで其の關係は全く一方的であり、親はまたその一方的なることを喜び、子供が己れの與へたものを喜んで受けることに無限の満足を感じるのである。此の點から慈愛は戀愛よりも更に進んだ犠牲的道德であるといはねばならぬ。勿論いかに其の子を愛する親と雖も時には、子供に對して怒り或は之を憎むことがないではない。子供が生意氣になつて親のいふ事をきかなくなると、眞に心から怒り憎む時期もある。大體に於いて子供の成長と共に養育にも種々の段階があつて、その時期の切れ目切れ目が、かういふ憎くなる時期に當つてゐる。その最も顯著な時は、子供の四五歳頃と、十四五歳頃とである。この頃は親子關係のいはゞ危機であるが、かういふ危機の多い程、それだけ人間が他の動物よりも高く進歩してゐる證據であるといへる。動物の進歩が低い程、かゝる親子の

間の危機が度重なる事なく、早く來たり且一度で終る。即ちそれは養育本能の終りを示すものである。然るに人間では或る時に一時は子を憎むこともあるが其の後再び可愛くなる。子供も一時は親から離れるが、又親の許に歸り親に従ふやうになる。此の如く親が時として子供を憎むことがあるからと言つて、人間の養育本能を疑ふのは誤りである。

或は親の愛は子供がなつく事を代償とするといふ人もあるが、之も誤りで、純粹な親の愛には子供がなつくと否とは問題で無い。前述の如く親の愛はたゞ與へるだけで、子供から愛されたり子供から孝行されたりする事を其の報償として求めるやうなことは無い。強ひて親の愛の代償を求めるならば子供が立派な獨立の人間になつてくれる事であらう。我國の古い御伽噺である姥捨山の物語に、子が老母を山に捨てに行つた時に、捨てられる親は少しも子を怨まず、却つて子供が歸路に迷はぬ様に道々木の枝を折つて置いてやつたといふことである。親の愛の如何に高く如何に無我であるかをよく表はして居ると思ふ。

第四節 其他の本能

以上に擧げたものは、生物の根本的的である個體保存と種屬維持とに關する基本的本能であるが、更に此等の本能を助けて個體や種屬の保存を一層都合よく行ひ得るやうな生活様式をとらしめる本能が相當に多くある。それは大體に於いて、集團本能と適應本能とに大別し得る。

集團本能 殆んどすべての動物は、孤獨の生活をする事なく、多くの同類と共に住む。食物を探すためにも、敵を防ぐためにも、その方が遙かに利益である。お互に慾の強いもの同志が相集つてゐながら、その間によく統制がとれ、秩序が維持されて居り、協同して敵を襲うたり敵を防いだりする。斯ういふ集團生活を營むための本能とみられるものが二三ある。

群居性 殆んどすべての動物は、常に多くの同類と共に群をなして生活して居り、孤獨で居るものは極めて少い。水中の魚、軒端の雀などを見ても此の事は直ちに知られる。牛馬の如きものも野生の状態に於いては必ず何百何千といふ多數が群居して居る。その群から一匹だけ捕へて來ると非常に悲しんで食物を攝らない事がある。人間では殊にこの性質が著しく、生後七八ヶ月の赤兒は、其の傍に母親が居なくなると淋しがつて泣き出す。少年青年は殊に同年輩の友と群居することを好み、大人になつても同様で、野球蹴球などの試合や芝居百貨店等に人が集るのは、此等の

ものを見物する興味の爲めよりも寧ろ人が人を呼ぶ事が多い。而して人間が相集つて群をなすに當つては、所謂類を以て集ると言つて、人種、年齢、生活状態、教養等の互に相似かよつた程度のもものが一番集り易い。

種々の動物の群を見ると、一見非常に雜然としてゐて全く何の秩序もないやうに見えるが、實は整然たる秩序のあるものなのである。異つた處から買ひ集めて來た多くの雞を一つの場所に放つと、最初は方々で喧嘩が起るが、それが間もなく終つて一定の秩序を保つやうになる。この群の中へ又新しい雞を一羽加へると、新しい雞は最初群から遠ざかつてゐるが次第に群の方に近づいて來る。さうすると群の中の大將が出來て來て、暫く之と睨み合ひをし、時には嘴で琢み合ひをする。新しい雞が負けると、群の中の他のものが集つて之をいぢめるが、結局新しい雞は其の大將の部下としてその群の中に加へられる。此の場合に若し新しい雞が勝つと、他の雞は今までの大將を突きまはし、新しい雞を大將として、それに隸屬する。即ち雞の群居生活は最初喧嘩から始つて一定の秩序が生じ、相當に長い間平和が保たれる。新に來てその秩序を破るものがあるば、之が前から居たものと争うてその勝負によつて群の中の位置が定まり、秩序が回復せられ

る。かくの如く一見雜然と見える動物の群居生活にも一定の秩序が自然に保たれて居るのである。この事は群居生活に極めて大切である。人間に於いても同様であつて、子供同志互に遊び友達を求め、併しお互によく喧嘩する。かくて喧嘩の間に自然に秩序が生じ親密さが増し、そこに一種の統制ある子供の社會が出来、協同一致して人々相互の福利増進にとめる團體が成立つのである。かくの如く子供同志の間に自然に生ずる群集生活とその中に起る喧嘩とによつて、子供は互に切磋琢磨し社會的に訓練され、種々な社會的・道徳的感情もこの間に養はれるのである。同情性。家族の一人が心配事があつて沈んでゐると家中の人が皆陰鬱になり、反對に一人が愉快な顔附をしてゐるとその周囲の人が皆愉快になる。このやうに、我々の一人がある感情をもつと、之が周圍に傳染する性質がある。之が共感又は同情と稱するものの根本である。俗に群集心理と言はれてゐる附和雷同は同情の最も原始的なものである。更に精神が發達して想像や理解の作用が進んで來ると、他人の心の微細な働きまでも感受し得るやうになり、己れの心にそれと同じ感情を生ずる。これが即ち同情の更に進んだものである。普通にいふ同情はこの後の場合のやうな狭い意味のものを指す。それで他人の心に敏感でその微細なる感情にも同情しうるのが、教

養の程度を示すものといふことも出来る。始めに述べたやうな原始的な同情から、かくの如き高級な精神活動に關する共感、同情に進歩するには、相當な精神的教養が必要で、この同情の程度の差が人の群の分裂を起す有力な原因となる。『肝膽相照す』とか『心友』とかといふのはこの同情の極めて深い關係をいふので、協同生活の重要な基礎である。

同情心を養ふには、精神的教養を高めると共に、自ら多くの感情的經驗を経ることが必要である。人生の苦境を多く體驗してゐる人ほど何か暖い人間味が感じられるのは、かかる體驗によつて深められた同情の大きさと廣さによる。自分で經驗のない感情生活には中々本當の同情は起らない。經驗が浅く想像や理解が不完全だと、間違つた同情が起り易い。子供はよく人形や無生物に同情したり（之を擬人化と呼ぶ）、大人の嬉し涙を悲しんでゐると感違ひしたりする。之は經驗や理解の不十分による。

普通に同情といふのは只悲しみの場合の共感にのみしか用ひないが、學問的にいへば喜びでも怒りでもあらゆる感情の場合に用ふべきである。子供は大人に比べて繊細な感情の共感極めて尠いが、原始的な同情は頗る強い。子供が被暗示性に富むといはれるのがそれである。即ち周圍

の人々の氣持や雰圍氣に非常に感染し易く、勿論細かい感情は分らぬが大略の傾向には直ぐ感應する。周圍の人々が楽しい氣持で居れば子供の氣持も朗かであり、周圍の者が怒りつばいと子供もいらくして來る。随つて子供の感情生活を導くには周圍の空氣が明朗であることが必要である。

賞讃を喜ぶこと。協同生活を營む上には、相手に嫌悪され排斥されては、自分の身を保つのが困難である。それで人間はすべて自分に對する仲間の態度には非常に敏感であつて、本能的に仲間に好まれ其の賞讃を得やうとつとめる。それには先づ自分のよい所を他人に示さうとする。子供に於いては身體の大きさや腕力又は知力等を露骨に他に見せびらかさうとする。菓子や玩具を貰ふと直ぐ外へ持つて出て友達に誇示し、仲間が感心し羨望するのを見ると大得意である。大人では子供のやうに露骨に誇示することは次第に少くなるが、種々な間接的な仕方では自己の腕力、知識、富、衣服や容色の美、自己の家柄の尊さ等を誇らうとする。

賞讃を喜ぶ心は、人を向上せしめる非常に大きな力であり、少年や青年の教育にこの心を善用すれば随分効果がある。併しそれが度を過ぎると虚榮心になり、又他の種々の害悪を誘發するこ

とがある。その一例は子供の盜癖である。小學校一二年生位までの子供の盜癖の原因の九十パーセントほどは友達と遊んで貰ふため、その歡心を買ふため、或は自分を大將にして貰ふために、家の品物や金錢を持出して友達に與へたことから起つてゐる。即ちかゝる事が度重なると、自家の物や金だけでは足りなくなり、他家のもの學友のものを盗んで之を友人に與へるやうになつて行くのである。又餘り嚴格な家庭で育ち、他の子供の持つてゐるものを與へられぬ子供は、それを得んが爲めに盗みをするやうになる。幼い子供の盗みの背後には、多くは十四五歳の不良少年がゐて之を教唆して居ることが多く、幼兒はかゝる不良少年の賞讃を得んとして盗みをする事が多い。

適應本能 本能はすべて環境に適應する機能に外ならぬが、こゝで特に適應本能として擧げるのは、外部的の事柄をとり入れて、自己の心身の發達に資するやうな本能を指すのであつて、模倣と好奇心とがその中で著しいものである。

模倣。模倣はさきに述べた同情（共感）と非常に似てゐる。同情が感情の傳染であるならば模倣は行動の傳染である。一匹の犬が吠えたと近所の犬が皆吠え出し、赤坊が一人泣くと周圍の子

供も泣き出す。一人が欠伸をすると皆に移つて行き、一人が笑ふと他の者まで笑ひ出す。これ皆模倣によるのである。子供の智慧の進むのは大部分模倣の働きによる。生後二年三年目頃から模倣は非常に顯著になつて、子供はそれによつて言葉や動作を覚えて行く。初めは只周囲の者が聲を出すとなしに發聲し、周囲の人が何かの動作をしようと手を動かす程度であるが、次第に自分の音聲や動作を大人のそれと一致させようとするに至り、狭い意味での模倣、即ち有意的模倣が始つて来る。之が即ち學習である。

元來人間の生活の大部分は模倣の結果である。朝起きて衣服を着ることから顔を洗ふこと、食事をする事、座ること、立つこと、歩くこと、寝ることなど悉く周囲の人の模倣ならざるはない。我々の一日の仕事で自分が眞に創作發明したやうなことは殆んど無いと言つてもよい。子供に物を覚え込ますのも模倣によるに外ならぬ。「まなぶ」ことは結局「まねる」事に外ならぬ。子供は考へたり創作したりする力は極めて幼稚であるから、最初にまづ單純に周囲の人々のすることを見真似て、衣服の着かた顔の洗ひかた食事のしかた其他無数の事をおぼえ、更に多くの文字や數へ方や筆の持ち方や字の書き方などを學習せねばならぬ。この頃動もすると世間の人々殊に教育

者たちが模倣を蔑視して創作を尊重する傾があるが、創作の基礎は模倣にある。有史以來何千年人類が何度となく失敗を重ねてやり直し築き上げて來た今日の文化を、も一度初めから自分でやり直して見る人もあるまい。人々は模倣によつて出來るだけ少い勞力を以てその時までには達してゐる人類の進歩の水準に達するのである。創作はそれから後の事である。「自分は子供の創作心を訓練するのだから一切の手本を與へない、模倣でなしに子供の創作に任せてゐる」と誇らかにいふ教育者などがあるが、子供が創作すると云つても實は實物を模倣し自然を手本として工夫するのである。而も或る程度の手ほどきを與へねば、子供の工夫力を養ふことも出來ない。創作の基礎は模倣にあることを忘れてはならぬ。

模倣が社會的に或る大きな勢力をもつた時、之を流行といふ。女の着物の色合や洋服の形などが毎年變るのは即ち流行の例である。流行が比較的長く續くと風習となる。禮装の時に男子は羽織袴をつけ、女子は白襟紋附を着るなどは即ち風習である。流行や風習は非常に大きな強い力をもつて我々の生活を束縛し、之に反抗することは殆ど不可能である。流行おくれの衣服を着る人は何となしに人前に出るのに引け目を感じ、儀式の時に平生着のまゝでは甚しく列席の人々の

感情を害する。流行は單に衣食住に關する事のみならず思想や感情にも存在する。左傾思想の花やかなりし頃は青年は殆んど皆これに雷同し、此の如く考へねば思想の進歩に後れるやうに思つた。然るに之と正反對の日本精神が流行すると左傾して居た人々は忽ち轉向して、愛國的な言行をなすに至つた。併し一時流行を極めた服装や髪飾りなどが其の流行の去つた後の時代から見ると實に醜く滑稽に見えるのと同様に、思想の流行を追うて居ては決して確乎たる信念を持ち不磨の眞理に達することは出来ない。其の時代の流行思潮に反抗することは容易でないが、流行の思潮なるが故にとの理由のみで之に盲従することは大いに慎まねばならぬ。

好奇心。新しい經驗を欲求することを好奇心といふ。子供が手に掴んだものを口へもつて行つたり、珍しいものを好んで掴まうとするのは好奇心の初歩の現はれである。少し大きくなると抽出しを開けたり、隠れた場所を探したり、更に進んでは他人の秘密を知らうとしたりする。四五歳頃になると何事にも不審の感を抱き、説明を求めらるやうになる。想像の發達するにつれて、種々空想を廻らし、お伽話の國を實際に知りたがつたりする。大人になると好奇心は一層種々な方面に向つて發達し或は感覺的な新しい享樂を求め、或は性慾の方面に好奇心を起し、或は純粹な知

的探究を好むやうになる。かくして好奇心は發達して知識慾となり、人間の進歩向上の最大原動力となるのである。

それ故に子どもの知的教育を正しく行はんとするには、幼少な時から適當な方法を以て其の好奇心を刺戟し之を益々旺盛にすると共に、之を正しい知的探求の途に導いてやらねばならぬ。即ち學問を面白いと思ひ、之に益々興味をもつて、知識を得ることを楽しいものと考へ、一生涯を通じていつも新知識を求めて止まないやうな性質を具へさせねばならぬ。通常學業成績のよくない子供は學業に興味をもたない子供である。それは多くの場合に父母や學校の教師から自分の能力以上の知識を與へられ、之を理解し得ないために、學問に對する興味を失つてしまつた爲めである。加之かゝる子供は絶えず自己の學業成績の悪いために自分の知的能力について劣等感を抱くに至り、自信を失ひ、遂に進歩向上の途を迹る氣力を無くしてしまふ。

以上で大體主なる本能を擧げ、感情生活との關係の緊密である點を述べた。勿論この外に尙本能として擧げられるものも若干あるが、——例へば蒐集本能とか表出本能、審美本能、笑ひの本

能等をあげる人もある。——子供の感情生活を理解する上には、右に述べた種類で先づ十分かと思はれる。

第五節 本能とその制御

以上の論述に於いて、私は或る時は本能が動物及び人間に自然に具つて居るもので甚だ大切なものであるから之を十分に満足せしめねばならぬといひ、或る時は併しながら本能を適當に抑制することが必要だといひ、或る時は本能に比れば知性の力は弱いものであると述べ、或る時は本能を知性によつて導くことが大切であると説いた。かくの如きは一見頗る矛盾撞着して居るやうにも思はれるから、此處に一括して本能とその制御との關係を述べて見よう。

上述の如くすべての本能は我々が自然から先天的に賦與されてゐる生活機能で、我々のあらゆる生活作用の根本をなしてゐるものであり、此の點に於いて人類と他の物動との間に於いて何等の相異は無い。而も此等すべての本能は、それが適度の強さで現はれる時は、我々の生命を保持し生活を促進するに役立つものであることは本能の目的によつて明かなことである。

自然に近い原始的な状態に於いては、生活條件が頗る簡單であるから、或る一つの事態に對して特定の一つの本能が發動して、其の動物の個體や種屬を保存することが出来る。動物が下等で原始的であればある程、一時に一つの本能で行動する。巢を作る時は巢を作るのみ、産卵の時は産卵のみ、子を育てる時は育てるのみの本能が働いて居り、いはゞその生活が比較的断片的であり極めて單純なる本能生活を營んでゐる。然るに動物の體制が高等複雑に進み、その生活條件が複雑になる程、一つの場合に幾つもの本能が協同して働き、或ひは互に相争うて働くやうになる。育児本能は同時に個體保存の本能の協同を得なければならず、食慾は集團本能と協同して初めて完全に満足される、或は敵に逢つた場合に一時は逃げようか飛びかゝらうかと迷つてこの逃避本能と闘争本能とが互に相争ひ、外敵が我が子を襲撃して來た時には我が身を全うして逃げようとする逃避本能と我が子の爲めには身命をも擲たんとする養育本能とが相争ふこともある。かくして高等なる動物の生活は、幾つもの本能の相互の協同と抗争との働きによつて維持される。そこで或る一つの本能のみが極端に強くなつて他の本能を壓迫したり、危急な場合に餘り多くの本能が相争つたりすることは動物の生活に大なる危険となる。茲に於いてか種々の本能相互の間

に秩序と統制とが必要となるのである。

斯様な統制は先づ本能相互の自然的調和によつてなされる。即ち或る一つの本能が極端に強く、なると他の反対の本能が起つて之を制する、必要に応じて幾つもの本能が協同して働き、兩立し難い事態に遭遇するまでは、その協同を続けることが出来る。さういふ本能相互間の自然の性質によつて調和が保たれる。

併し生活條件が更に複雑になると、同時に働いてゐる種々の本能の互に兩立し難いやうな事態が非常に多くなる。さういふ生活條件の下にゐる動物では、本能の開発から實際の行動に移るまでの間の時間を延ばし得るやうな體制を具へてゐる。就中人類がさういふ點で一番發達してゐる。換言すれば發現しようといふ行動を一時抑へて、その間に理智の力によつて事態を省察し利害得失を考へることが出来るやうになつてゐる。更にかくの如き抑制は、教育や訓練の力によつて益々進歩する。犬や馬などに於いても適當なる教育訓練によつて、この本能的行動の制御を或る程度まで實現することが出来る。人間の如き複雑な環境に生活して之に順應せんとするものは、殊に此の如き抑制を發達せしめて其の時々の本能に驅られて輕卒なる行動に出でないやうに訓練する

ことが必要である。

斯くの如き抑制の訓練は特別な手段を用ひなくても、人類の集團生活、即ち社會生活を營む中に、種々の本能の協同牽制によつて、或る程度までは自然に出来て行く。それが自然の訓練である。必ずしも或る一つの本能のみを抑制するのではなく、本能相互が相協調して行く中に、調和的抑制を計るのである。又或る本能の發動を全然抑止するのではなく——それは本來出来ないことである——其の行動を發生せしむる刺激と其の行動との間に一定の時間をおき得るやう、行動の發現を遷延せしめ、外部の刺激によつて輕々しく動する事がないやうにするのである。

本能の抑制は斯くの如き自然的訓練によつてなされるのみならず、他方に於いて経験を豊富にし、事態を省察する習慣をつけ、動物的本能的なる行動を理智的洞察的なものとする事によつても成し遂げられる。現在の人間の住める如き複雑な知的環境に處するには、是非ともかかる訓練が必要である。併しながら、これには上に述べた自然的訓練がよく行はれ、各本能が夫々十分な強さをもつて統制されないと、却つて悪い結果に陥る事が多い。知力が本能を正しく統制する方に働かずして本能の狡い満足にのみ向けられるやうになる。又知性の訓練は餘程注意しないと

好奇心や恐れを異常に強め、性格を歪める恐れがある。

人間の本能の制御には一定の公式がない。かうすればかうなるとは必ずしも定つて居ない。あつてもなり、かうもなるといふ可能性が非常に多い。それが又よい所である。我々は決して枝葉に捉はれず、本能が道徳に如何に關係深いものであるかを考へ、知識は本能に對しては指針を與へるのみで根本の動力とはなり得ないといふことを特に注意せねばならぬ。殊に幼少な子供に於いては、感情を繊細化せしむるよりも力強い感情的欲望とその満足とを育成することが望ましいのである。

第四章 感情と身體的條件

第一節 感情と身體との關係

前章に於いては、感情と本能との關係をのべ、感情を我々の生活の目的の上から考へたのであるが、本章では感情と身體との關係を述べようと思ふ。

感情の興奮と共に、身體の種々な部分に著しい變化が起ることは、何人でも日常經驗してゐる所である。嬉しいと笑ひ悲しい時には泣く。恥ぢて顔が赤くなり、驚いて蒼白になり、冷汗が出たり、鳥肌になつたりする。どんな感情でも、その種類や強さに従つて、何等かの身體的變化を伴はぬものはない。それを我々は感情の身體的隨伴現象と呼ぶ。いはゞ心の中の感情の動搖が身體の表面に現はれるのであるから之を或は表情と呼ぶこともあるが、必ずしも表面にのみ現はれ

るのではなく、深部の種々の内臓にも多くの變化が起るのである。何人でも或る激しい感情に襲はれた時は、忽ち身體のあらゆる部分に種々なる強い變化の起ることを感ずるであらう。例へば心臟のどきどきと鼓動する感、背中がゾーツと寒くなる感、グツとこみあげてくる感、カーツと頭の熱くなる感の如き身體的な感じを覚え、物を言はうと思つても口が乾上つてゐる言葉が出なかつたり、逃げようと思つても所謂腰が抜けて足が自由にならなかつたり、笑はうと思つても顔がこはばつて笑へなかつたりする。かくの如く感情が餘りに激しい時には、主として身體の諸部分の變化やその感じの方が経験せられて、快とか不快とか喜びとか悲しみとかいふ所の所謂感情の主觀的經驗は之を觀察することが頗る困難である。それで我々が感情と言つてゐる經驗は、かういふ身體的な感じ即ち有機感覺の總和に外ならぬと考へる學者もある。勿論胃の痛いのと、胃痛の時に感ずる氣分の不快とは全く同一であるとは言へぬかもしれぬ。併し兩者の間に密接な關係のあることだけは疑はれない。感情を單に精神的なものとは考へ、それと同時に密接な關係をもつてゐる身體的隨伴現象を考慮に置かぬと、感情の抑制や感情の洗練の如きことが十分に理解されず、又教育の實際上にも頗る無力なものとなり易い。

第二節 感情と自律神経系

感情の神経生理は未だ分明でない點が多い。併し感情と有機感覺との關係が密接な點から見て、有機感覺を司る自律神経系と感情との關係が深いことは、現在多くの學者に認められてゐることである。

自律神経系とは、全神経系統の中で内臓、腺、心臟、血管、生殖器、膀胱等、我々の意志で支配することの出来ない器管の働きを司る神経系を指す。之に對して骨格筋の如き意志を以て動かすことの出来るものを支配する神経系を、脳脊髄神経系といふ。而して此の兩者は互に密接に關係して居り或は前者は後者の附屬物であるとも見ても差支ない。

自律神経系は交感神経と副交感神経との二部分に分れて居るが、ここに最も注意すべきことは我々の身體の内臓器官は必ず同時に此の二部分たる交感神経と副交感神経から支配されて居り之を二重支配といふ)而かも同一器官に對して此の兩神経は正反對の作用をもつてゐることである。即ち心臟に就ては交感神経はその作用を鼓舞促進せしめ、副交感神経(迷走神経)は抑壓制止

せしめる働きを有つて居る。消化管の運動には前者は抑制的に、後者は促進的に作用し、氣管枝筋肉には前者は弛緩を後者は收縮を來たす。瞳孔には交感神経は擴大を、副交感神経（動眼神経）は縮少を來たす。このやうに交感神経と副交感神経とは相反する仕方であらうと夫々の器官を支配してゐるのである。

以上は自律神経系の遠心的運動性支配について述べたのであるが、自律神経中に求心性（感覺性）の纖維も含まれて居り、之が有機感覺を傳へる神経であらうと思はれる。今内臓の一器官に傷をつけて、その刺戟の求心的傳導を辿つて行くと、それは交感神経、副交感神経を通つて、間腦の視神経床に達してゐるやうである。この視神経床は皮膚その他の感覺領域からの知覺神経が集つてゐる所で、大脳中樞との中間中樞をなす所であるといはれてゐる。即ちこの中樞から起つた遠心性神経細胞は下降して脊髄内の遠心性細胞（内臓筋、骨格筋、腺に聯絡する）に連なるらしい。そして此處が、感情と深い關係をもつてゐるやうに思はれる。尠くとも感情の身體的隨伴現象の神經的基礎は、自律神経系及び視神経床にある反射中樞にあるらしい。今我々の心に或る感動が起ると、その中樞的興奮は自律神経系に傳はり、之がその支配する器官の活動に夫々變化

を生ぜしめる。又内臓諸器官の損傷や緊張の變化は求心性神経を経て視神経床にある反射中樞に達し、此處で他の遠心性神経と連り、所謂表出運動を生ずることになる。感情に伴ふ隨伴現象が、非常にその場の狀況に適應するものであり、且我々の祖先の生活を傳へてゐるやうに見えるのも、主にこの自律神経系に具つてゐる自律的機制によると思はれる。

自律神経系は内分泌と密接な交互關係をもつてゐる。例へば副腎のアドレナリン分泌作用は交感神経の支配下にある。そしてアドレナリンは交感神経の末端を刺戟してその興奮性を保持する。精神的感動は交感神経を経て副腎のアドレナリン分泌を増加する。そのアドレナリンは交感神経を刺戟して、殆んど全身的な作用を及ぼすのである。副腎の外に、甲状腺、腦下垂體、脾臓等の内分泌腺も、自律神経系と密接なる關係がある。

内臓感覺の反射中樞であり、感情と密接な關係をもつと思はれる視神経床は、大脳から制止作用をうけるものと思はれる。此の制止中樞たる大脳からの影響は、動物の進化、殊に精神發達と密接な關係があつて、これが感情の意志的抑制の神經的基礎であらうと思はれてゐる。

第三節 呼吸の變化

感情に伴うて呼吸に變化が起ることは昔から知られてゐる。「溜息をつく」「鼻息が荒い」などの語で感情を表現することを以ても知られる。一般に、愉快な時は呼吸が浅く速く、不快な時は深く遅い。怒つた時は強く速く、怖れた時は弱く遅いか又は停止する。

呼吸の中樞は延髄内にあるとせられる。この中樞の興奮は本來自動的なものであつて意志に關係がない。此の中樞を興奮せしむる刺戟となるものも種々ある。血液中の炭酸瓦斯や酸素の量の變化が刺戟となり、又肺臓自身の運動が刺戟となつて反射的に興奮する。我々の日常の呼吸は斯様な興奮によるのである。運動をした後で呼吸に變化が起るのは運動の爲めに炭酸瓦斯の發生が多くなり之が呼吸中樞を刺戟するためである。然るに我々は或る運動競技に臨む時に實際運動をやる以前から呼吸の變化を生ずることが多い。是は前記のやうな自動的興奮ではなく、精神的刺戟によるもので、恐らく上位の腦中樞から來る刺戟によつて呼吸中樞が過敏となる爲めであると思はれる。すべて精神的感動に伴ふ呼吸の變化は、この上位中樞から來る刺戟によるものと思はれる。

る。

呼吸そのものは反射的なものであるけれども我々は亦意志によつて之を抑制したり促進せしめたりすることが出来る。是は幼い間は出来ないが、或る程度まで身心が發達するとなし得るやうになる。幼兒は最初は鼻をかむことが出来ないものであるが、やゝ生長して之を練習すると出来るやうになる。これは意志の力によつて急速に呼吸を鼻から出すことであつて、有意的な呼吸統制のよい例である。而してこの有意的な呼吸統制は感情の動搖を鎮めるのに頗る役に立つ。腹式呼吸法とか靜座法で息を整へるとか躰下丹田に力を入れるとかいふのは皆それに屬する。之は整へられた呼吸が感情の動搖を鎮めるといふよりは、本來反射的な呼吸を意志の制御の下に置くのに大なる努力が要り、それが所謂精神集中に役立つのであらうと思はれる。

第四節 血行の變化

激しい感動の時に心臓の動悸が激しくなることは誰でも知つてゐる。それで昔からよく心臓は心の作用殊に感情の宿る所であるやうに考へられてゐた。支那で精神の心といふ字を心臓にも用

ひて居るのもかゝる考への爲めであらうし、歐羅巴の諸國語でも心臓といふ字と感情といふ字と同じである。概して言へば愉快な時には脈膊は強く遅くうち、不快な時には弱くて速い。一般に強い感情の時には心臓は強く速く、平靜な時には遅くうつのが原則である。大きな動脈のみならず、細い毛細管も感情によつて著しい影響をうける。顔が赤くなつたり蒼ざめたりするのは顔面の毛細管の收縮弛緩によるのである。

心臓の運動は極めて複雑微妙であつて、その機構については未だ十分に分らない所が多い。併し心臓には全く神経の支配をうけない心臓自身の動く能力（自働能）がある事は確かであつて、この自働能によつて心臓は活動するのであるが、併し身體の時々の必要に應じてその活動が調節し得るやうに、交感神経と迷走神経との支配をうけてゐる。さきにも述べたやうに迷走神経は心臓の制止神経で、この神経の刺戟は心臓の搏動の數と其の強さを減じ、時には全く停止せしめる。之に反して交感神経の刺戟は搏動の數を増し時にはその強さをも増す。殆んど總ての知覺神経は刺戟をうけると、或は迷走神経の緊張を下げ、或は交感神経の緊張を高めて心臓の搏動數の増加を來たす。併し内臓神経と三叉神経の刺戟は反對に搏動數の減少を來たす。感動による上位

中樞からの刺戟は、迷走神経中樞の緊張を變化するのであらう。

後に述べるやうに精神感動はアドレナリンの分泌を増加するが、之が又、一方では血管を收縮せしめ、他方交感神経を刺戟して心臓の搏動を増加せしめる原因となる。

第五節 筋肉の變化及び感情表出の制壓

感情の骨格筋に及ぼす影響は、最も人の注意を惹き易い。激しい感情が起ると手や足その他の骨格筋が活動する。例へば怒つた時に拳を握るとか全身を緊張させて今にも相手に飛びかゝらうとするが如きである。併し感情の起つた時に最も鋭敏に之に伴うて現はれるのは顔の筋肉の動きであつて如何に微かな感情でも之によつて顔つきの變化が起らないといふことはない。顔面に於いても殊に目と口の周圍には小さい筋肉が一定の配列をなして居り、之が種々の感情によつて必ず一定の收縮伸長の運動をなし、之によつて顔つきの變化を生ずる。普通に之を顔面の表情といつて居る。併し尙その外に顔面の血管の收縮開張による顔色の變化や呼吸の變化による鼻孔その他の部分の運動なども亦顔面の表情の中に含まれて居り、我々は平生これ等の表情を見て其

の人の感情を自然に察知するのである。畫家や演技家などはこの表情術を深く研究せねばならぬ。顔面にある多くの小さい筋肉は、腦脊髄神経系の顔面神経の支配の下にあつて平生絶へず適度の興奮を與へられ之によつて一定の緊張を保つてゐる。この興奮の強さが變化すると、顔面筋肉の種々なる運動を生ずるのである。耳の下のあたりで顔面神経が頭蓋骨から出て來てゐるが、そこへ電氣の刺戟を與へて神経を興奮せしめ且その刺戟の強さを種々に變じて見ると、顔面筋肉の運動に種々な變化が起る。神経の興奮の少い時には笑顔になり、頗る多い時には怒つた顔になる。かゝる人工的な方法で神経の興奮を平生よりも弱めることは出來ないが、神経病等で神経興奮の異常が起つてゐる例から考へると、悲しみの顔は興奮が平生より少し弱くなつた時、恐れ顔は興奮が更に著しく低下した時（痲痺）に起るものと思はれる。勿論感情に伴ふ實際の表情の動きはこれ等に比すると更に複雑なものであるが、原理的にいふと、やはり顔面神経の興奮の程度によるのであらう。此等の事から見ると、感情は顔面神経の普通時の興奮を或は強め、或は抑制するものと思はれる。

すべて人々には平生一定の顔つきといふものがあつて、或る人はいつも怒つたやうな顔をして

り、又或る人はいつもこゝ／＼して居るといふやうなことがあるが、これは平生その人が習慣的に生ずる感情の表情が固定して、一定の顔つきを作りあげたのだと見ることが出来る。例へば平生怒つてばかり居る人は怒つたやうな顔になり、平生愉快な氣持で居る習慣の人は常に笑顔をして居るが如きである。併し一方から考へると、にこやかな顔やムツツリした顔は生れたばかりの嬰兒時代にも其の差はあるのであつて、必ずしも後天的にのみ作りあげられたものと限らず、先天的の原因も相當にあるのであらう。更に又顔面筋肉のよく動く性質と左ほどよく動かないものとも亦先天的性質による所があるやうで、此等の點については種々な素質的程度の差があるものと思はれる。併しながら上に述べたやうに其の時々の感情興奮が一定の顔面表情となつて現はれると同様に、永續的な氣分は更に強く其の人の顔面表情を固定せしめることは明かな事實であつて、此の點は兒童の教育上深い注意を要する所である。

顔に次いでよく感情を表はすものは、手や指の動きである。悲しい時に手を揉んだり、恐しい時には手を握つたり、愉快な時には手の指がのび／＼して居たりすることは少しく注意すれば知り得ることである。

感情が強く烈しくなつて來ると、全身の筋肉に影響を及ぼし、からだをちぢめ（恐れや驚きの場合）そりかへり（愉快又は自負）敵にとびかゝり（怒り）或は走つて逃げ（恐れ）たりする。普通かういふ全身的な感情の表現を身振りといふ。即ち感情が強く複雑になるほど動かされる身體の部分が廣くなつて、顔つきの外に身振りが重要な表情運動となるのである。感情が洗練されて複雑微妙になる程、微細な顔つき身振りによつてそれを表はすやうになる。

感情が更に激烈になると、筋肉は痙攣を起したり或は硬直してしまふこともある。或は又時によつては異常な力が出ることもあり又反對に全然力が抜けてしまふこともある。火事で驚いた時などに平生とても持てないやうな重い荷物を持出すことが出來たり、激しく怒つて敵と戦ふ時は平生とても出ないやうな力で長時間戦ふことの出來るのは前者の例で、甚しく恐れたり甚しく喜んだりした時に腰が抜けて立てないなどいふのは後者の例である。或る罪人が検事の情によつて不起訴にされた時あまり喜んで腰が抜けたといふ例もある。

感情に伴つて筋肉に變化が起るのは、全く無意的で、我々が意志の力でさうするのではない。併し表情に用ひらるゝこれ等の筋肉は同時にいづれも意志の支配下にあるのであるから、我々は

意志の力を以て故意に種々の表情運動を起すことが出來、又意志の力を以て表情運動を抑制することも出來る。此の事は人間生活に非常に大切な意味をもち又人間の生活を複雑ならしめる原因となつたと思はれる。日本人は從來その感情を外部に表出することを餘り好まない。悲しくても泣かず、腹が立つても強ひて笑顔を見せ、恐しくても泰然としてゐるのが教養ある人のなすべき所だと考へるのが習慣となつて居た。日本の舞を西歐のダンスに比べると、日本の能樂を西洋のオペラに比べると、日本の方は殆んど無表情と思はれるまでに感情を内に抑へて外にあらはさないやうになつてゐる。併しそのため自から其處に品位を生じ又見る者の心に従つて、動ともなり静ともなる含蓄を湛へ、身體的な表出によるよりも心の合致によつて之を理解せしめんとする傾向が強くなつてゐる。併し歐米人相互の間にもかやうな點での相異はあるのであつて、自分の家が焼けた時、ラテン系民族は直ぐにわめき立てて激しく身振りをし、英國人は一服やつてから眼鏡を出して火事の状況を眺めるであらうといはれて居る。此等の差については必ずしも一概にその是非を論ずる事は出來ないが、日本人や英國人に見るが如き感情の身體的表出の抑制は、其の人の心に落附きと餘裕とを與へ、事變に當つて狼狽することなき悠然たる態度を涵養する點に於て、確か

に人間の向上進歩に役立つことは疑ひない。併しそれと同時に其の生活が動もすれば不自然で人工的となり、偽善的となり易く、且色彩と潑刺さとを失ひ易い弊がある。激しい感情の起つた時は即ち身體に非常なエネルギーの漲つた時である。故に適當なる方法によつて此のエネルギーを散せしめれば元の平靜なる状態に歸り易い。腹の立つた時に相手の頭を擲つて怒りのエネルギーを發散させてしまへば怒りも容易くおさまるが、怒りを靜かに堪へると之によつて強い意力を養成し又反省の餘地をも存して、道德的には誠に望ましい事であると同時に、一方からは數日もの間その怒りの爲めに心を亂されることを免れ難い。

子供の感情の表出をどの程度まで抑制せしむべきか。之は甚だむづかしい問題である。昔の殿様や金持の息子につまらぬ人間の多かつたのは、一體に子供の時から我まゝ一杯にさせられて居て感情の抑制の訓練がなかつた爲めであらう。併し又感情の表出を極端に抑制すると動もすると全く氣力のない奴隷的な人間になる恐れがある。前章に於いても述べた通り、感情の表出は生理的なもので、之を抑へることは子供などには極めて困難なことであり、成人に於いてこの抑制が次第に出来るのは長い間の社會的訓練によるものである。同年輩の多くの子供が相交つて居る間

に露骨無遠慮な感情の表出から時々子供同志の喧嘩が起り、勝者も負者も相當な苦痛を経験するから、子供も次第にかゝる争ひを起したやうな感情の表出を控えるやうになり、かくして次第に統制ある社會生活を營み得るやうに訓練されるのである。

上述の如く感情の身體的表出を意志の力によつて制御し、之によつて感情そのものを統制し醇化して行くことは、禮儀や作法の人間生活に缺くべからざる根本の理由である。腹に力を入れ姿勢を正し口を結んで一點を注目すれば、身體の姿勢に落ち附きが出来ると同時に内部の氣持も自ら落ちつく。平常動作に規矩を設け舉動を慎重にすれば、突發する感情の動搖に捉はれることなく、自然と感情を統御することが出来る。これ昔の聖人が子弟に坐作進退の禮法を教へた所以である。併し之を餘り極端にやり過ぎその根本の精神を没却して徒らに煩雜な作法の末に捉はれると又多くの弊害を生ずる。殊に幼少な子供に於いてはその感情は單純で潑刺として居て之を抑へることは殆んど不可能であるから、餘り幼少の時から嚴酷なる作法で束縛することを避けねばならぬ。之と同時に他の一面に於いては、此の頃の一部の青年男女に見るが如く、二十歳前後になつて相當に思慮も分別も出来べき年齢に達しながら、少しも自己の感情を制御し醇化することを學

ばず、周囲の事情にも場合にも拘はらず感情を赤裸々に表現し、己れの我がまゝを押し通すを以て明朗な生活なりなど考へて居るのは、幼兒乃至動物の生活に轉落するものといふべきであらう。

第六節 消化器への影響

不愉快な時には食が進まず、愉快な時はつひ食べ過すなど感情と食欲とが密接な關係にあることは人の知る通りである。

近頃の研究によつて飢の感じは胃と食道の下端及び小腸の上端部位の周期的收縮と密接な關係を有する事が分つた。飢が続く時には心に不愉快な感じを生じいらくとして落つきがなくなり血壓にも變化を來たす。

唾液や胃液の如き消化液の分泌は通常食物の刺激によつて反射的に起る。例へば砂糖や梅干などを口に入れると忽ち唾液の分泌が起ることは何人も知る處であるが、實は此の時には同時に胃液の分泌も起つて居るのである。胃液の分泌は、食物が胃にはいつた時之に刺激されて起るのは當

然であるが、その前に食物が口にはいつて味覺末梢器を刺激するだけでも反射的に起るものである。加之必ずしも食物が口に入らずともたゞ食物を見又はその香を嗅ぎ又は食事の合圖の音を聞くだけでも唾液や胃液などの分泌が起る。即ち精神的感動によつて反射的に消化液の分泌が起るのである。此の事を初めて證明したのはロシアの有名な生理學者パヴロフであつて、彼れは外科的手術を用ひて犬の唾液や胃液を身體の外部に滴下させるやうに巧妙な裝置をなし、之によつて分泌された消化液の分量の多少を測定し得るやうにしたのである。即ちかゝる手術をした犬にその平生好む所の食物を與へると、唾液や胃液が盛んに分泌されて體外に滴下する。然るに今或る方法によつて、例へば犬に猫を見せて、此の犬を怒らせると、忽ち唾液や胃液の分泌が停止する事が實驗的に證明された。かゝる實驗は其の後種々の學者によつて繰返され、いづれも大體同じやうな結果を得て居る。或は猫に食物にバリウム等を少し混じて食はせ、之をX線にあてゝ見ると、バリウムはX線に不透明であるから腸の中の食物が不透明に見え、従つて其の食物が腸の中を移動する有様が見られる。さうして置いて其の猫を怒らせる(例へば犬を見せる)と、忽ち腸の動きが止つてしまふことも實證された。我々が食事する時にも不機嫌の時にはまづく感じ、愉快に食事をす

れば食欲も旺盛で消化もよく行はれる理由が之で解る。

一體に兒童は大人に比べて感情の統制が十分でないから時々突發する感情のために食欲を障害されることも亦屢々あり得るわけである。團體的訓練に缺けた我儘な神經質兒には、常習的な食物の嫌惡や食欲の不振がよく見られる。食欲の不振は必ずしも感情の影響のみでなく、寧ろ體質や身體の狀況によるものが多いであらうが、併し所謂偏食なるものをよく調査して見ると、氣分に基くものも亦頗る多い。自分の家では嫌ひだと言つて居る食物でも、他家では喜んで食ひ、原形のままでは決して食はぬものも、料理を工夫して、少し味や色合をよくすると喜んで食ふことが甚だ多い。かういふ食事に對する感情の關係を考へて兒童に食事を愉快に攝らせることも、かかる偏食や食欲不振を矯正する上に大切である。

第七節 副腎への影響

副腎といふのは左右腎臓の上端に冠さつてゐる腺である。この副腎の機能が不完全になり之が萎縮し變性すると、人は瘦せ衰へ筋肉の緊張がなくなつて無力状態となり、血壓や體温が下降し

皮膚に黒褐色の色素が沈着して所謂アチソン氏病といふ奇病になる。

副腎の最も重要な働きはアドレナリンと稱する物質を分泌して之を血管内に送り出すことである。即ち副腎は一の内分泌腺であつて、その内分泌物（これを通常ホルモンといふ）が即ちアドレナリンである。アドレナリンの作用を一言にして言へば、交感神經の末端を刺戟することである。交感神經を刺戟するから、交感神經が制止神經である臓器には制止的に、その促進神經である臓器には促進的に作用する。随つて之によつて血管を收縮せしめ心臓の鼓動を促進して血壓を上昇せしめる。但し冠狀動脈は逆に擴張するから心筋の榮養はよくなり又心筋に直接働いて其の收縮力及び搏動數を増すから、血壓は上つても心臓の効率は非常によくなる。又腦や肺の血管はアドレナリンによつて收縮しないから、腦の血行が旺んになる。その他アドレナリンは消化管の運動を抑制し、氣管枝の筋肉を弛緩せしめ、毛髮の直立、眼裂の擴大、瞳孔の散大を生じ涙を分泌し又交感神經唾液といふ粘稠で濃厚な分泌を起し、發汗を起す。

アドレナリンは又肝臓内に貯へられてゐる含水炭素即ちグリコーゲンを糖化する働きをもつてゐる。此の糖分が血液の中に入つて血中の糖分が餘り多くなると過血糖となり、或る時は一時性の糖

尿を來たす。併し糖を多量に含んだ血液は筋肉に其の糖分を與へて筋力を生ぜしめ又は疲勞消耗せる筋肉を回復せしめる。

今甚しい精神感動が起ると之が交感神経を経て副腎に作用しアドレナリンの分泌を急に増加する。然るにアドレナリンは前記の如く筋力の基となり筋肉の疲勞を恢復し且心臟の効率を高めるから、遁走や攻撃の如く大なる筋肉活動を要する時には甚だ都合がよくなるわけで、之は我々の生活に大變意義があることである。前の節に述べたやうに非常の際には非常な力の出るといふこと、例へば火事の時に平生は到底持てない重さのものを持出したり、野獸と出逢つた時は後から想像の出來ない程の力で之と格闘したりすることなどの一つの原因はアドレナリンの働きにもあるのであらうと思はれる。かくの如くにして感情に伴ふ自律神経系の働きは、一方では前述の如くに精神的感動が直接に反射中樞に働きかける爲めもあるが、他の一方にはアドレナリンの分泌を旺んにして、之が更に前述の如き交感神経刺戟による効果を生ずることも亦注意しなければならぬことである。

第八節 健康状態と氣分

感情と身體的隨伴現象との關係は決して以上を以て盡きるものではない。或る一つの感情が起るとそれが身體の隅から隅までに影響を及ぼすもので、之を一々説き盡す事は出來ない。上に述べたのはたゞその中の主なるものだけである。之を要するに我々の意志で左右し得ない交感神経の微妙な働きが、精神の感動に應じ、又身體の諸器官の状態に應じて、全身的な感應を生じ、生命の不思議を守護してゐるのである。

感情と身體との關係はかく密接なので、身體が健康であるか否かは直ちにその人の感情に大なる影響を與へる。疲れた子供と元氣のよい子供とは同じ状態に對して異つた反應をする。即ち疲れた子供は些細なことに恐れたり、怒つたり、強い嫌惡を示したりする。一度何かの事で怒るといつまでも長く怒つてゐるのは大體は身體の虚弱な子供で、健康な強い子供は一時は怒つてもすぐに機嫌を直して愉快に遊ぶ。子供の感情生活に健康が極めて大切な關係のある事を忘れてはならない。感情が餘り激しくはないが比較的長く續く状態を氣分と名づけるか、此の氣分は殆んど身體

の健康状態に深い関係があると思はれる。我々が朝起きて気分がよいのも睡眠によつて前日の疲労が恢復し、身體に新しいエネルギーが満ちてゐるからである。睡眠不足や便秘や過勞の人が不機嫌になり勝ちなものこの爲めである。随つて子供の精神の衛生を考へるには食事、睡眠、運動、仕事、その他無数の身體的條件が同時に慎重に顧慮されねばならぬ。

併し又他方に於いて気分は單に身體的な状態にのみ基くものでなく精神的な影響も大に力あることは勿論である。心配のある時は気分が面白くない。廣々とした野外に出て春光を浴び鳥の聲を聞くと憂鬱な気分も消えて晴々とする。悪臭の中に閉籠められてゐると重苦しい気分になり、美しい音楽を聞いてゐると愉快になる。さうして斯ういふ気分が更に身體の健康に影響する。常に愉快な気分であると血行、呼吸、消化等が皆うまく行くから自然に健康が良くなるを得ない。不快な気分であると、血行はわるく脈搏は速く弱く呼吸も消化も不十分であつて、大體に於いて軽い熱でもあるやうな身體状態となり、従つて自然に健康が悪くなる。同様に病氣になつても、気分がよしあしで恢復に遅速がある。看病は藥よりも大切であるといふのは此の爲めで、看病人の親切が行き届いて病人が病苦を忘れるやうであると血行も呼吸も整ひ消化もよくなるから自然

に病氣も早く癒るのである。

斯くの如く健康と気分と相互に深い関係があるから双方互に相補つて身心を共に健全にしななければならぬ。腹具合が悪いと気分が面白くない。之は自然である。併しその気分を押されて精神的に益々不快な事を考へたりすると更に益々気分が悪くなり、その爲めに病氣を一層悪化せしめる。元來病氣で気分が悪くなるのは自然が安靜を要求するのであるから、靜臥して、つとめて気分を爽かに持つて居れば身體のはたらきも次第に順調になつて病氣は自から恢復する。併し之にも自から程度があつて病氣なのに無理に気分を引立てんとして身體を動かしたり興奮性の刺戟を多くしては却つて悪い結果を生ずる。

文化が進むに従つて精神的刺戟による気分の醸成が非常に多くなつた。併しそれは人々の健康状態に必ずしもよい影響を與へるもののみでなく、却つて神経を過度に疲れさせ不健康に陥れる傾向も頗る多い。子供の周圍を朗かにし、晴々として、子供をなるべく愉快な気分で見守ることは大切であるが、あまり強すぎ又複雑すぎる刺戟を與へて子供を疲らせ、又精神的刺戟に中毒させることの無いやうに注意せねばならぬ。

第五章 精神の發達と児童の感情

第一節 児童に於ける感情の發達の分化

前章に於いて述べた如く怒りや恐れなどのやうな感情は人の本能に伴ふものであるけれども、それが生活の上に現はれるには、人の精神が一定の發達をして居なければならぬ。何となれば我々人類の環境が我々の心に影響して或る感動を起させるには、かゝる環境に感ずるやうなはたらきが我々の方に出来て居なければならぬからである。盲人にとつては色彩の世界は無く、聾者にとつては音の世界が無いと等しく、児童の精神發達が不十分である間は環境の變化に感ずることなく、随つて之によつて感情が起るまでに至らないのである。それ故に子供の心身の發育の順序が大體に於いて一定して居る結果として児童の種々の感情が最初に現はれる時期もほゞ一定して居り或る時期には特に或る感情が著しく現はれるといふやうなことも大體きまつて居る。

精神發達の低い間は、児童と外界との關係が極めて單純であるから、児童の感情も亦原始的である。精神が次第に發達して環境が廣く且複雑になると、單純な本能生活が出来なくなり、感情も複雑になり多様になり、その結果種々の感情が或は混合し協働し或は拮抗し抑制して、複雑な状態を呈するに至る。

いふまでもなく生れて間もない赤兒に於いては感情の分化は甚だ尠い。然るに『三ツ子の魂百まで』と言はれるやうに、その個人の性格の感情的な基礎は、大體四五歳頃には或る程度の完成を見るのであるから、この僅々四五五年の間の感情の發達は、よほど注意深い母親でも動もすれば見のがし易い程速かで且複雑である。

不分化なる一般的興奮 生れたばかりの赤兒即ち新生兒には特殊の感情的反應はない。相當大きな音をきかせ又身體を激動させても、赤兒はたゞ緩徐な全身運動をやるのみである。又甘いものを口中に入れれば之を吸ふが、苦いものをやつても同じやうに吸ふ運動をやる。即ち味の辨別は無いといはねばならぬ。又一般に新生兒の運動は斷片的で身體各部の運動が各勝手に獨立してなされ相互間に協應性がない。勿論是等の刺戟によつては新生兒の安靜状態が亂されるの

であるから、何等かの興奮を神経系に與へてゐるに違ひないが、それを恐れてゐるとか喜んでゐるとかいふ風に解釋することは出来ぬ。たゞ一般的な漠然たる興奮があるといふの他はない。恐らく反射中樞や自律神経系が、各部勝手に働いて居て上位中樞の統制がまだ出来て居ないのであらう。

快、不快の分化

併し生後數時間乃至數日の間に既にこの一般的な興奮反應とは違つた稍分化せる反應が現はれてくる。それは不快と快との傾向を帯びたものである。即ち最初の一般的な興奮に於いては外部からの刺戟と赤兒の反應との間に何等特別の關係がなかつたのが、次第に兩者間に定つた關係が出来始め、或る種の刺戟には快の反應を生じ、或る種の刺戟には不快の反應を生ずるに至るのである。この不快と快との分化が、生後約一ヶ年間の子供の生活の基調となつてゐる。

不快の反應は生後數時間乃至數日にして既にあらはれる。授乳を途中で止めると泣き、排便すると泣き、室の溫度や濕度が著しく變ると泣き、甚しく苦いものを與へると吐出して泣き、身體を壓迫されると泣く。日時を経るに従つて益々かういふ反應は明確になつて来る。一般に赤兒に

不快を起させる原因は、外界又は身體内の強い或は急激な感覺的刺戟であり、又身體の正常な活動を妨害することである。又不快に對してなす反應は筋肉の緊張、呼吸の停止、顔色の變化、身震ひ、叫喚等で、一體に身體的又反射的な反應である。

かくの如き不快の爲めに泣いてゐる赤兒の襁褓を取換へたり室の溫度を適當にしてやつたり或は甘い物を與へたりすると、不快の反應は勿ち止んで快の反應を示す。赤兒の快の反應は緊張せる筋肉が弛緩し、唾液が盛んに分泌し、手足を自由に動かし、軽く發聲したりなどすることによつて現はれる。ゆるく揺ぶるとか擦るとかするやうな穩かな若くは律的な運動感覺又は皮膚感覺の刺戟が最も多く快の反應を起さしめる。即ち赤兒に快感を生ぜしむる刺戟は、其の自然の活動を容易ならしめる種類のものである。この關係が極めて單純である爲めに、赤兒に於いては快と不快とはたやすく相交代して起る。激しく泣いてもちよつとあやしてやればすぐに微笑み、笑つて居る子供も少しくその手足の運動を妨げると直ちに泣き出し、哺乳嚙をみて喜んで手足を盛んに振つてゐる嬰兒も、嚙を隠すとすぐ不機嫌になる。かやうな赤兒の快不快の反應は、殆んど全く身體的狀態の現はれである。

恐、怒、喜の分化

生後數個月になると快不快の反應が特殊の狀況によつて促進され、それに應ずる身體的表出にも特殊の型が現はれてくる。即ち恐れ、怒り、喜びなどとなるのである。たとへば突然の激動による不快は恐れとなり、慾望を妨害された時の不快は怒りとなり、慾望の達せられた時は單なる快ではなくて喜びとなる。生後五六個月の赤兒は突然大きな音を聞くと目を見張り身震ひして明かに恐れを感情を示す。又頭に布をかぶせると、手足を不規則に動かし額に皺をよせ、顔を赤らめ、力み、終に泣く。之は明かに怒りである。又頭にかぶせられた布を自分の手で取去ると愉快げな笑ひを見せ得意さうな聲を發する。之は喜びである。十月十一月となつてこれら感情は場合に臨んで愈々明確に現はれる。又この頃には各種の慾望が盛んになると共に手足の運動が相當自由になるので、赤兒は、その求めんとする目的物に向つて這ひ近づく。此の時大人がそれを妨害すると激しい怒りを示す。反對にその目的物を獲得した時は實に愉快さうな顔をして喜ぶ。親の威嚇や叱責が効果を生ずるのもその頃で、それは子供の恐れが次第に強くなつて來たからである。一年目前後の赤坊は事毎に喜び、怒り又は恐れる。そして赤兒の身體發達が不十分で運動能力が遅れるほど赤兒は怒り易くなり駄々子になり易い。

親和の感情

生後九ヶ月頃から既に集團本能の現はれが見られる。即ち好奇心が現はれて珍しいものを欲しがり、又大人のすることを多少眞似し始める。又生後半年頃から記憶の發達が徐々に目立ち、自己の周圍の人や物を記憶するやうになる爲めに親和の感と期待のはたらきが現はれる。即ち見なれた人殊に母の顔を覚え、母が居なくなると淋しがつて之を求め様子をする。即ち再び現はれるのを期待して居るのである。之に反して親和の感のない見馴れぬものに出會ふと恐れと好奇心との混じた感情を示し、又期待が満足されぬと怒る。即ち長く母が歸つて來ないと怒つて泣く。生後八九個月になつて這ふことが出来るやうになると赤兒はしつこく母について廻り、母が居なくなるとすぐに之を探しに出かける。

生後一年の頃には幼兒の母親に對する親和の情は最も強くなり、絶へず母を慕ひ求め、夜眠る時なども母に抱かれ乳房をくはへて限りなく満足安堵した氣持の中に眠つて行かうとする。それでも動もすると所謂『抱き癖』がついて幼兒を眠らせることが母の一苦勞となる事さへ少からずあるが、之は前述の如き子供の感情の發達から由來する自然の現象である。

生後一年の終頃には幼兒は大體今述べた程度の感情の發達を示す。そして種々の欲求が強く起るために、物を求めて淋しがることゝ求めた物が得られなくて怒ることゝが一番目立つて來る。併しその欲求を満足させれば極めて朗かで上機嫌である。大體に於いて人間の感情生活の基礎は既に此の頃に出來てゐると言ひ得る。

以後の分化

之から後の感情の發達は極めて複雑多様である。それは第一に感情の抑制が起り、第二には豫感的感情が次第に強くなり、第三には自我感又は自尊心が全精神の中心を占めてくる爲めで、この三つの事情によつて、今迄頗る簡單幼稚であつた感情が種々に變形されて複雑に發達するのである。

赤兒の時露骨に率直に現はれた怒りが抑制されると、失望や美望、嫉妬等の感情となる。今までは恐ろしいものが眼の前に現はれてから恐れを感生して居たのであるが之からは何か恐ろしいものか現はれはしないだらうかといふ豫感的な恐れが生じこれが即ち不安となる。同様に豫感的な喜びが希望となる。又自尊心が強くなると今までは自分に全く無關係なものとして少しも痛痒を感じなかつたやうな出來事でも直ちに自己に關係あるものなりと感じ、些細なことにも或は怒り或は羞恥或は之を嫌惡する。譬へていはゞ幼兒の自我が大きく生長した爲めに之に觸れる

外界の物が次第に多くなり、感情の反應を生ずる機會が多くなつたとも見るべきであらう。

自我感

此の自我感が最も露骨に強く現はれるのは三四歳の頃である。それで或はこの時期を強情期と呼ぶ人もある。自我感の發達は子供の精神的發育の上から見て甚だ興味があり又子供の教育の上から頗る大切であるから之を少しく詳しく述べて見よう。

自我感又は自尊心は、本能的に賞讃を喜ぶことで集團の中に於ける自己の位置に關する感情である。如何なる人でも自己の屬する集團の中なるべく高い位置に居て他人から見上げられ賞讃されたいといふ強い欲求をもつて居り、隨つて他人に勝るやうな自己の性質などを誇示せんとし他人に劣るやうな事柄を隠さうとする。自己の腕力、知力、學問、地位、財産、名譽、家系その他少しでも他人より勝つて居ると思はれるものはすべて之を他人に誇示せんとする。子供に於いては殊に之が單純に露骨にあらはれ、よい着物を着たり珍らしい玩具を持つて居ればすぐに友だちの所に行つて之を示し、自分で美しい繪を描いた時にはすぐに父母に之を示して得意となる。之に反して人々がもし自分の缺點や弱點を自覺すれば自我感は之を他人から隠さうといふ努力となつて現はれる。之を劣等感といふ。自我感、自尊心の過度に強いものは動もすると自分を現實以

上にえらいものと考へ、誇大妄想的な空想の世界に迷ひこみ易く、之に反して劣等感の餘りに強いものは過度に自らを卑下して自信力を失ひ現實の問題に立向ふ氣力を喪失し易い。

〔生後一年の頃から子供はかなり怒りつぱくなるものであるが、之は身體的及び精神的の欲求が旺んになるため、例へば赤兒の欲求は、腹が減つて食物が欲しいのに與へられなかつたり、淋しくて母を求めて居るのに母が來なかつたりする爲めに起る怒りである。之はその欲求を満足させさへすれば直ぐに止んで子供は今までの怒りを全く忘れて機嫌よく遊びを始める。然るに大體生後三年目の中頃になると、自我感が著しく現はれるために、欲求するものを得ることよりも、自己の欲求を認められることを求めるやうになり、所謂『欲するために欲する』やうになる。之が『意地』の初まりである。即ち要求してゐるものが欲しいよりも、欲しいと言ひ出したその意地を通さうとするのである。欲しいものを與へられなくて怒つた子供は、それが與へられると、今度は要らぬと言つて強情を張る。物を與へられないのを怒るのではなく、要求を妨げられたことを怒るのである。即ち欲求は一歳頃のやうに單なる自然的欲求ではなく、欲求出来るといふ自我感に基いた欲求となつてゐるのである。従つて自己の腕力を誇り、又持ち物を見せびらかしたりすることが多

く、何でも自分でしなければ承知せず、相撲や喧嘩に負けると甚しく口惜がり、俗にいふやんぢやが強くなる。反對に力の弱い子供や智能の劣つた子供は劣等感が強くなり、臆病で意氣地なしになる。

〔自我感を傷つける原因が外にあれば怒りを生ずるが、自分自身にあると羞かしさとなる。つまり自分自身に對する怒りが羞かしさである。而して子供には自分と外界との區別が未だ十分に出來ないから、動もすると自分が過ちをしたのに拘らず、他のものに對して怒ることがよくある。〕

〔子供の自尊心は今述べたやうに強い力をもつて居るから、之を適度に刺戟することは子供を勉勵さす爲めにも又道徳的に躰ける爲めにも頗る有効である。併し子供の能力に伴はない過大な要求は却つて自尊心を萎縮せしめ自信をなくさせてしまふ。例へば子供の失敗を餘りに強く咎めるやうなことがあると、子供は失敗に對して過度の恐れを抱き何事をも爲さうと努力しないやうになる、同様に子供に勉強させるのにも餘り周圍から過度に教へ込むやうな態度で臨むと、子供は自ら努力することなく遂には之に馴れて何にも覺えないやうになる。〕

自我感が子供に芽萌えだした三四歳の頃はこの『自ら欲することが出来る』といふ能力に非常

に誇りを感じて、一時頗る強情になることは前に述べた通りであるが、一方に智力が進み又團體的秩序に馴れるにつれ、子供は種々なる新奇なもの驚異すべきものが自己の周囲にあることを發見し、友達や大人の中には自分より偉いもの、澤山あることを感じ、それ等に對し漠然たる併し強い畏敬尊崇の念を抱くやうになる。子供の宗教的感情の根ざしは此のやうなものにあるのであらう。

第二節 感情的傾向の固定

前節で述べた如く、感情は或る場合に於ける特殊な反應の型として、精神發達に伴つて現はれてくるのであり、その基本的な現はれ方は子供の可なり幼少な時に既に揃つてしまふものである。併しかゝる種々なる特殊の感情が如何なる具體的な場合や具體的な事物に對してどんな風にして現はれるかは、全く其の人の個人的經歷に基いてゐる。例へば人は恐れ of 感情を先天的に具へて居るけれども、それは蛇を恐れるとか雷を恐れるとかいふやうに對象の定つたものでなく、いはゞ可能性に過ぎない。感情の表現も同様で大體前章で述べたやうな表出をするけれどもそれも一般的

可能性で、個々の場合に於いて種々に變化するものである。例へば或る時には恐れて縮み上り、或る時は逃げ出すといふやうな差がある。即ち一々の場合に當つてこの先天的可能性が如何なる風に現はれるかは、その個人の過去の經驗と、其の時々の具體的な環境とによつて定まるのである。勿論我々の環境に起る顯著なる事柄は大體誰にでも同様の効果を及ぼすものであるから、さういふ事柄については如何なる人にも大凡共通した感情が起る。併し子供の生活に於いて日常起る事柄は千差萬別であるのみならず、各々の子供はそれ／＼特殊の文化風俗の中に住み、特定の家庭の子で、或る特殊の階級に屬し、特殊の境遇の下に教育され、かくて子供の先天的可能性が種々な形に鑄上げられ、千差萬別の感情的傾向が固定されて行くのである。此の傾向の固定せらるゝに至る經驗を今少しく細かに見ると大略次のやうである。

模倣 第一に子供は上に述べた模倣によつて頗る鋭敏に周圍のものに感染する。親や先生たちの熱心な道徳的訓戒よりも、親や先生が無意識の中にする所の行動や感情が極めて鋭敏に子供に感染し、子供にそれと同じやうな行動や感情を起させるのである。親が神経質で些細な事に怒り易くては、如何に口で子供に忍耐、我慢、平靜の大切なことを教へても無効であつて、自

然に親のやうな神経質な怒り易い性質となるであらう。その反對に親が平靜な落附きのある人々で家庭に和氣が満ちて居れば不知不識の中に子供もそのやうな穩かな性質となるであらう。かくして家庭に於ける感情生活は子供の感情の發達に頗る重大なる影響を與へる。之を感化といふことも出来る。意識的にやる説諭や教訓に比べて、無言の感化、無意識の間の影響は、其の結果の現はれるのは稍遅いかも知れないが、其の効果は永くして且深いものである。随つて子供を道徳的に教育せんとする親は、第一に自己を教育し自ら道徳的な人となることを心がけることが根本的に必要である。

條件づけ

食物が口にはいれば唾液が出るのは自然の生理的の反射作用であるが、併し我々は甘さうな食物を見ても思はず唾の分泌が多くなり或は涎が流れることは何人も経験して居ることである。本來食物を見ることは何等唾液の分泌に關係のないことであるが、我々は生れてから何萬何千度となく食物を見ると同時に之を口に入れて居るから、この長年月の経験の中に何時の間にか食物を見るだけで唾液が分泌するやうになつたのである。これをパヴロフは實驗的に研究した。即ち一匹の犬に食物を與へる時にこれと同時にいつも鐘を鳴らして聞かせた。かゝる事

を何十回も繰返すと遂には食物を與へなくともたゞ鐘の音を聞いただけで犬が唾液の分泌を起したといふ結果を得た。此の如く本來無關係な刺戟(鐘の音の如き)が、長い時間の訓練の結果、或る反射(例へば唾液の分泌の如き)を起すやうになることを生理學者は反射の「條件づけ」と呼び、かゝる反射を「條件反射」と名づけた。子供の感情生活の固定にはこの條件づけに類似した過程が重要な一因子をなしてゐる。

即ち或る感情を起す状況に常に存在してゐたもの、或はその感情を起す対象を常に含んでゐた状況は、長い時間の後には直接にその感情を惹き起す原因となるのである。赤兒は哺乳嚙を見ただけで喜び、或は哺乳嚙を常に持つて來てくれる乳母の姿を見ただけで喜ぶものであるが、本來赤兒の喜ぶものは乳であつて嚙や乳母ではない。然るに乳は常に嚙の中にはいつて居り、それを飲む時は常に乳母が來た時である爲めに、何時の間にか嚙と乳母とに喜びの感情を起すやうになつたのである。換言すれば喜びの感情が乳から嚙と乳母とに移つたのである。或は病氣にかゝつて醫者の治療を受けた時に痛い經驗をした子供は、その醫者を恐れ或は醫者の居る病院の建物を恐るやうになるのも全く同じことである。かくの如き感情の轉移は凡て上述した條件づけの道程

によるものである。

これに類した事は日常生活に極めて多い。或る激しい感情を経験した時、その感情がその時の状況の或る特殊の事情と結合し、後日その特殊の事情が繰返されると、その感情が起つてくることがある。或る子供が強い腹痛で苦しんでゐた時、隣家からピアノの音が續いて聞えてゐた。それ以來、ピアノの音を聞くと非常に不愉快な気分が起り、それは随分後年まで續いたといふことがある。又或る子供は學校で友達にひどくいぢめられた時、偶然校舎の屋根に烏がとまつてこちらを向いてゐるのを見た。それ以來その子は烏を見ると何とはなしに腹が立つたといふ。頼山陽が日本政記を講じて居た時に親の死んだ報知を得て其れ以後政記の講義をしなかつたといふものと同じ例である。我々が平生理由が分らずに或る特定の場合特定の物に對して不快な氣持が起つたりする場合をよく分析すると、幼い時のこのやうな經驗が原因となつて居ることを見出すことがよくある。前に述べたフロイド一派の精神分析學では、かかる心のはたらきを極めて重視してゐる。

賞罰褒貶

子供が悪い事をした時には之を罰し、よい事をした時には賞めることは、人の

自然の情から出るのであるが、これが又大體に於いて子供の教育に頗る有効であることは疑はれない。併し賞罰はまた我々の生活の中に自然に行はれて居り、子供はこれによつて本能的行動を制御し次第に道徳的になつて行く。猫をいぢめて其の爪でひつ搔かれた子供は、親から猫をいぢめるなどといはれたよりも痛切にいぢめてはわるいことをおぼえる。親が青い梅を食ふなど教へてもなか／＼きかない子供も一度之を食べて腹痛に苦しむとその時から之を食はなくなる。自然は言葉を以て子供を教育しないが、人間の百萬言よりも有力な實物教訓を以て道徳的教育を興へて居る。その手段となるものは即ち自然の賞罰であり而も多くの場合は苦痛による罰である。

家庭生活に於いて親が子を教育する時にもこの苦痛を適度に利用することは相當に有効である。勿論それは子供をより大なる苦痛から救ふための小なる苦痛でなければならぬ。例へば病の苦痛から逃れさせるために苦い藥をのませるやうなものでなければならぬ。或は子供が自身で行為の方向をきめることの出来ない場合の指針として用ひるやうにせねばならぬ。決して之を用ひ過ぎて子供の自我感を傷つけるやうなことがあつてはならぬ。

賞も亦これと同様である。自然は人間に特別の賞を興へることは少い。併し人が自然の攝理に

従ふ時には、健康を興へ心を豊かならしめ自然の満足を樂しませてくれる。

然るに現在の多くの家庭に於いては賞が平生餘り多くなり過ぎて居る嫌ひがある。結局之によつて兒童によい事をさせ、より大きな幸福を得させる爲め的手段ではなくして、賞のための賞となつてしまふ。をとなくなくなるため勉強をして向上するための賞ではなくて、賞を得るための勉強や行儀となつてしまふ。

すべて人間は場合によつて同一な刺戟に對しても種々の異つた感情を以て、反應するものである。随つて親切のつもりで他人に何かしてやつても却つて誤解されて先方を怒らすこともあり、又別に何の氣もなくしてした事が思ひ掛けなく非常に感謝されるやうなことも無いとはいへない。子供に賞罰を興へる時にも斯くの如き場合は少くないから、賞罰の際にはよほど深く注意して、之に對して子供が如何なる氣持を起し如何なる感情的反應をするかを深く注意し、それによつて賞罰の興へ方を變化するやうにせねばならぬ。勿論大體に於いては子供は賞を得ては喜び罰されては恐れて過を改める場合が最も多いのであるけれども、場合によつては全く期待したのと反對の結果を生ずることも少からずあることを忘れてはならぬ。殊に子供が自分では叱られる筈がない

と思つてゐる時に叱つた場合や、或は叱り方が拙であつた時、殊に叱るのが頻繁すぎた時などは、却つて子供を怒らせ反抗心を起させ、遂には親の叱責を、馬耳東風にきゝ流すやうにさせてしまふ。

何故子供を褒めたり叱つたり又は賞罰を興へたりしなげばならないかといへば、いふまでもなく子供の本能的行爲の或るものを抑制し或るものを促進して親や社會の望むやうな型の人間にしたいからである。或は子供の感情の粗野な表出を矯めて高尚なる表出にさせたいからである。併し通常多くの家庭に於いて眞にそれだけの眞面目な考へをもつて子供を褒めたり叱つたりしてゐる人は案外さほど多くないのであるからうか。即ち親は自分の時々の氣分に從つて褒めたり叱つたりするやうなことが多く、随つて子供が同じ事をして或る時には褒められ或る時には叱られたりするやうな事が無いとも限らない。親といへども元來が感情の動物である以上、子供を褒め又は叱る時に常に冷靜に客觀的に子供のした事の善し惡しを考へてそれによつて褒貶をするといふ譯には行かぬ場合も相當にあるであらう。一部の學者や教育者の中には、斯くの如き氣分によつて褒め方叱り方がふことを甚しく嫌ひ、斯くの如きは教育上最も慎むべきものであるといふ

人もあるが、更に一面から考へると親も人間である以上斯くの如く場合によつて差異のあるのがむしろ自然なのであつて、子供はこの親の氣分と自分の感情との矛盾の中から自然とその矛盾を調和することを覚え、周圍の感情的氣分に同化してそれに染んで行くのであらう。親の感情をぬきにして子供に對して常に冷靜沈着に其の行爲の善惡を批判して之によつて褒貶するといふやうな事は、動もすると變に人工的な褒め方叱り方になり易く、或は却つて子供を偽善的な氣分にさせぬとも限らぬ。それよりも親がその心の奥底に於いて深く子供を愛して居りさへすれば、場合によつて褒め方叱り方の標準が少々違ふやうな事があつても結局その眞心が子供の心に映り子供の心を動かすものである。斯くして子供の感情生活の發達は、親の褒め方叱り方の上手下手などといふ問題よりは、寧ろその子供の住む環境の感情的零圍氣全體によるものである。極端にいへば叱り方や褒め方の技巧にばかり神経を尖らし、却つて親自身情味の乏しい硬化した感情生活を營んでゐる家庭からは、すなほな豊富な感情生活をもつた子供の生ずることは期待出来ない。

自制

子供の精神が發達し殊に自我感が著しく發達すると、外部からの壓迫によつてではなく、自分自身の精神的欲求によつて感情を制御するやうになる。或は物質的な賞罰よりも、

精神的な褒貶によつてより強く刺戟されるやうになる。自分はもう兄さんだといふ自我感によつて、菓子や幼い弟に分けてやつたり、少し位弟が亂暴しても之と争はずに笑つて許してやるやうになる。狭い意味での訓練が子供に對して行はれ得るのは此自尊心と自制とが現はれてからである。即ち之によつて子供の精神生活の水準を高め従つて精神的な喜びや怒りといふやうな高級な感情生活に導くことが出来る。それにしても幼少な兒童の精神發達はまだなかく低い程度に止まり道德的或は宗教的な感情といふやうなものは極めて初歩的なものしか有つて居らぬ。例へばこの頃の子供は確かに自分よりも偉いものに對して尊崇の念を抱いてゐる。併しその偉いといふことは身體が大きいとか力が強いとか自分の出来ないむづかしい事が出来るといふ位のこと過ぎない。併しさういふ偉いもの例へば自分の父などを尊崇する氣持は、次第に進歩すれば神に對する畏敬の念などに發達すべきものに外ならぬから、十分に之を尊重し育成せしめねばならないが、眞の意味に於ける道德的又は宗教的感情といふやうなものは、大體青年期にならなければ起つて來ない。

人爲的變化

強い怒りの感情が起つた時之をそのまま外部に現はすと親達に叱られるが、

悲しさうに泣いた時は親が自分をいたはつてくれることを度々経験すると、子供は次第に怒りを悲しみの形に轉換するやうになる。或はある感情の起つた時に之を耐へるのが偉いのだといつて褒められる事を度々経験すると、子供はその感情を抑へて外にあらはさぬやうに我慢するやうになる。かういふ感情の人為的變化は六七歳から現はれてくる。かくて漸次に意識的に自己の周囲と感情の調子を合せ得るやうになる。即ち周囲から教へられた崇高なもの道德的なもの美的なものへ、感情を強ひて向けて、此等のものを大切なるものとして感ずる事が出来るやうになる。或は幼い時には人の死に對して何の感情も起らなかつたが、周囲の大きな人々が之を悲しみ泣くのを見て何時の間にか自分も悲しまなければならぬといふやうな氣になつて悲しむ事が出来るやうになる。同様に親がある人に對する憎しみを語るのを聞いて、自分もその人を憎まねばならぬのだと思つて憎むやうになる。かういふ感情の人為的變化は一方からは成るべく避くべきものゝやうにも思はれるが、結局我々が幼時の原始的な感情を次第に修養して高級な感情を發達せしめて行く爲めには頗る大切な過程であることを忘れてはならぬ。

子供の感情が次第に發達して大人の高等なる感情になり行く過程は大體に上に述べた如くであ

る。而して度々述ぶる如く子供の感情の調子は周囲の感染による所が極めて大なのであるから、周囲のものが自身が調子の高い感情生活を營み、自然の間に子供の感情生活の發達に影響し之を感化し得るやうにして置くのが、感情教育の最もよい方法である。

第六章 子供の生活と感情の教育

第一節 生活環境

我々人間は(他の動物も同様であるが)祖先から遺傳し來たれる先天的傾向を内に包藏しつゝ、種々複雑に變化する所の環境の中に生活してゐる生物である。而して生理的必要によつてこの複雑なる環境に適應し、環境に於ける無数の變化に對して適當に處置して行くのが生活である。この基本的な適應能力は本能として遺傳されてゐるものであることは前に詳しく述べた所である。而して環境に於いて起る種々の出來事はたとへ外觀的には同じであつてもそれが異なる人々に及ぼす影響は必ずしも同一でない。例へば彗星が天に現はれた時、無教育な老人は何等かの凶兆であるとして甚しい恐れを抱くであらうし、教育ある人々は純粹な好奇心即ち知識慾を以て眺めるであらうし、詩人はその限りなき美を讚美し、科學者は好機逸す可からずとして望遠鏡を以て之を觀察し、又生後間もなき赤坊は何の影響も受けずやくと眠つてゐるであらう。或は、又銀行

の破産は或る人をして自殺せしめることもあらうが他の人々には對岸の火災に過ぎぬであらう。或は人生は甲にとつては牢獄に等しく乙にとつては無上の樂園であらう、このやうに環境に於ける同一の事柄も主觀的即ち心理的には決して同じものではない。そして人々が實際に生活してゐる環境は、物理的乃至客觀的性質に於ける環境ではなく、各人に影響を與へる所の環境に他ならぬ。昔の人も知識としては唐天竺のあることを知つてゐたが併しそれは昔の人の實生活には殆んど存在せぬと同じことであつた。然るに今日の日本人は支那印度を問題にせずしては生活が出來ない。そこで支那印度は今日の日本人にとつては大切な環境的條件となつて居るのである。山を越へて來た旅人が、其山が山賊の巢窟であることを聞いた後は、どうしてもその道を後もどりすることが出來なかつた。山そのものに變りはないが山賊の居ることを知ると知らぬとでは彼の環境は全然別の姿をもつたのである。

このやうに我々の生活する環境といふものは、客觀的に存在する存在しないに關らず又その客觀的性質の同一か否かに關係なく、我々への影響を通して投射された環境である。之を假りに生活環境或は心理的環境と呼ぶこととする。勿論心理的環境はその基礎を客觀的環境によつて支へ

られてゐることは明かで、然らざれば我々の生活は宙に浮いてしまひお伽噺の世の中となつてしふ。つまり我々は客觀的環境の中で生存するが、併しその生活は心理的環境に於いてであるといふのである。それ故に子供を教育する時に於いても、我々が如何に外面的に子供の生活條件を整へてやつても、それが子供にどんな影響をもつか、さういふ外面的な環境の中でどんな心理的環境が成立してゐるかを考へなければ、子供の生活を理解することは殆んど出來ないと言つてよい。随つて親がかうしようといふつもりでした事が豫期とは正反對の結果を子供に與へたり、思ひがけない事柄が意外な影響を子供に及ぼしたりするやうなことは屢々あることで、注意深い親たちはかゝる例を幾つとなく記憶して居るであらう。換言すれば子供に向つて他から與へたと思ふ環境、他から見て存在してゐると思はれる環境が、必ずしも豫期されるやうな効果を與へるものでなく、子供はその能力とその時々々の欲求とに従つて、斯かる外面的環境の中に彼自身の生活環境を有し、其の中に行動してゐるのである。即ち子供の生活には大人とは異つた、又大人からは見えない社會的關係、空想の世界、知識の世界等が、環境となつて作用してゐるのである。

斯くの如くにして子供は親の生活圏内に於いて即ち親の住む土地環境文化風物の中に於いて自分の能力で許される限りの生活環境を自分の棲家として生活し生長して行くのである。勿論子供にとつて生活は決して満ち足りたものではない。子供は子供相當にその生活の内に於いて苦難を経験しなければならぬ。子供の欲求が悉く満足されることは少く、欲しても與へられぬものもあり、いやでも無理にさせられることもあり、自分の意志が親たちに通ぜぬはがゆい思ひをすることもある。

併しながら大體からいへば子供の生活は彼等に無上の歡喜を與へるものであることは疑ひを容れない。子供は決して與へられた環境に受動的に動かされてゐる無機物ではなく、自分の意志で生活し潑瀾たる情感を以て周圍に反應して居る。父母に甘へ友と遊び山に登り川に泳ぎ鳥獸に親しみ草花を愛で、晝は精一杯遊んで夜は前後も知らずに眠る。誠に子供の生活は楽しみそのものであるとも云ひ得る。このやうな子供の生活は決して他から強制し得るものではない。與へられた環境——即ち家庭、近隣、文化風俗、周圍の風物、その他一切の環境の中で子供が營んで行く自分自身の生活なればこそ、斯くの如く歡喜に満ち又苦痛も多いものなのである。随つて親たちが子供と共に生活し子供と共に楽しみ苦しみ悲しんでこそ子供の心情を知らずくの中に育み行く家

庭教育は出来るのである。又子供が山に登つて木の實をとり川に行つて魚を掬ふ其の自然の生活の中に彼等は自然の感化をうけるのである。又友達と或る時は仲よく遊び或る時は喧嘩しつゝ自ら他人との交際の仕方をも覚え社會的生活の訓練をうけるのである。斯くの如くにして子供の生活する其の主觀的環境中に於いて、彼等がその自然のまゝに生活しつゝある間に、環境からの有力なる教育を受けるのである。即ち彼等の主觀的環境のこの無言の感化は賢い親が心を痛め手段を盡して試みる説得や叱責よりも何十倍も強い効果を子供に與へるのである。

第二節 家庭生活

子供は其の生活の大部分を家庭に於いてする。殊に幼少なほど家庭で暮す時間が長い。隨つて子供の生活環境の中で最も強力な直接的な影響を與へるものは家庭であり、それが爲めに子供の感情傾向や性格などの基礎は悉く家庭に於いて作り上げられる。家庭内の道徳的な雰圍氣や感情生活の調子、例へば一家内の大人たちの間が圓滑であるか否かといふやうな事や、又父母の子供に對する態度などは、いつの間にか子供の心に滲みこんで、その感情傾向に影響する力は驚くべきほど強大なるものがある。

家庭生活と一口に言つてもその中には可なり多くの事柄が含まれて居り、それ等の多くの事柄が何れも子供に種々雑多な影響を及ぼすのである。その中から特に子供の感情に大きな影響をもつ二三の事柄について述べて見よう。

母子の關係 云ふまでもなく家庭の中心をなすものは母であり母の子に對する影響は他の何ものよりも遙かに大きい。さきに養育本能の項に於いて述べた如く、母親の子供に對する感情は全く自己を犠牲にした献身的な純眞な強烈な愛情である。子供のためには何んな勞苦も厭はぬ母親の此の強い愛情が子供の心に強い反響を起さない筈はない。母を慕ひ母に甘へ、母の手に抱かれて初めて安々と眠る幼兒の母に對する態度は絶對無限の信頼である。

併しながら他の一方に於いて母は如何にその子を愛するからと云つても必ずしも常に子供の欲求を満足させてのみ居る譯には行かないこともあり、時には儼として子供の我儘を嗜め或は之を罰することもあり、又ある時は子供から離れて家庭の用務をする時もある。危険に際しては自己の一命も投げ出して子供を庇ひ子の爲めには何物をも與へて惜むことなき愛の權化たる母親が、

又時としては嚴重に子供の我儘を抑へる神々しいまでに強い姿をあらはすのである。時には春風颯々、時には秋霜烈日、此の兩方面をそなへて初めて理想の母たり得るのである。

おやつの時間に子供を火鉢のまはりに集めて母親自らかき餅を焼く。餅の焼けるのを待ちながら一日中の最も楽しい時を過す子供の心は母に對する満腔の感謝と信頼とに満ちてゐる。其の時に母は其日の學校の有様や學課の出来具合などを聞いて、それ〴〵適當な賞讃と訓戒とを與へてやり、又時としては一粒の種子から此の餅に出來上るまでの農夫の苦勞などを話してやる。誠におやつの時間は母と子との精神的接觸の最も緊密な時で家庭教育の最も有力に行はれる時である。此の頃動もすると若き母たちが或は菓子屋から買った立派な西洋菓子などをおやつとして與へ、甚しきに至つては子供に金錢を與へて隨意に菓子を買はせたりするのは、全くおやつを物質的にのみ考へた大きな誤りで最も有効な家庭教育の時間を失ふものといはねばならぬ。

母親は決して哺乳嚙の代用ではない。又母はたゞ子供の身體發育に適當なる食物を子供に與へさへすればよいといふのではない。單に榮養の上から言つても、如何に賢明に工夫された人工榮養も到底自然に湧き出でる母乳に比すべからざることは現代醫學の明かに證明して居る所である。

況して母と子との絶え間なき接觸によつてのみ養はれ得る信頼感謝尊敬などの感情は、其の子供の性格を形づくる最も重要な要素であつて、此等の感情を十分に兒童に植る附け得ない母親は、如何に體育知育の方面に於いて成功しても、兒童の教育全般からは大なる失敗といはざるを得ない。然るに現代の一部の女子の中には折角出る母乳を棄て、牛乳や練乳を以て我が子を育てるをよい事と考へ、或は買物や享樂などの爲めに常に外出勝ちであつて子供の世話は全く雇人に任せておいたりするものが尠くないやうである。米國のマクドゥーガルといふ心理學者は、哺乳嚙で育てられた國民の風儀が粗野になり、凡ゆる點に於いて冷かに堅くなり、慈愛感情の優雅化の影響を缺くと述べ、嬰兒の哺乳嚙を禁止せよとまで言つてゐる。勿論之は米國の婦人や状態に對して誇張した警告を發したのであるが、間違つた文化生活を得意がる人々に考へてほしい點である。いふまでもなく文化の進歩は頗る喜ばしいことには相違ないが、それが實生活を餘りに便利にする結果、遂には女が子供を育てるといふ自然から命ぜられた生物學的任務をさへも厭ふやうになつたならば、それは決して文化の進歩でなくてむしろ人間の破滅の途に向つて居るものといはねばならぬ。

此やうに子供の感情に最も大なる影響を及ぼすものは母であるから、若しその母が良からぬ性質をもち、或は偏狹我儘であつたり、或は絶えず感情的に興奮しやすく喜怒哀常ならざるヒステリー的な性質を有つてゐたら、その子供の性格は容易にその母に感染し、母と同じヒステリー的な性質になつてしまふであらう。随つて母親が子供に及ぼす自己の感化の重且大なるを自覺するならば、十分に自ら克己修養を積んで身を修めることが何よりも大切である。即ち子を教育するの基礎は結局自己を教育するのにあるのである。

他の家族との關係 母に次いで家族の他の人々の影響も亦相當に大きい。その最も著しいのは父の影響である。大體に於いて父が子供に及ぼす感化は母に比して多く劣らない。たゞ父は平生外出することが多く、母のやうに行住座臥に子供に接して居るといふ譯でなく、それだけ子供にとつては母より親しみ難い所がある。併し父親を交へて初めて生々としてくる家庭團樂の空氣が、子供の心をどれだけ楽しませ安らかさを覚えさせるか分らない。又一般に父親は母親よりも無口であるが併し言葉に出さない感情の動きは極めて敏感に子供の心に通するものであつて、それが却つて強く父に對する子供の畏敬の念を起さしめる。即ち家庭に於ける父の感化は母のそ

れよりも一層不言不語の間に行はれ、子供は父に對し何か近づき難い威嚴を感ずると共に、一方では極めて深い信頼と畏敬とを抱くのである。

併し子供にとつて更に遙かに重要な事は、父と母との關係が圓滿であるか否かの點である。父が餘りに暴君である家庭、或は母が父を無視して我儘勝手に振舞ふ家庭、或は又父母の仲が不和であり冷淡である家庭などは、いづれも其の子供に與へる影響は極めて恐るべきものがある。結局子供は父や母を輕侮し尊敬も信頼もなくなり、子供は家庭に居ることを喜ばず、多く戶外に遊んで居て、随つて種々悪友の感化を受け不良なる性質になることが極めて多い。之を要するに子供の感情及び性質に與へる結果は、父母一人々々の性格より來るよりも、**父母相互の關係の圓滿か不和かによつて生ずる家庭の雰囲気より來る影響が遙かに大きい。**夫婦相愛し琴瑟相和してこそ初めて圓滿良好な子供の性格を作り得るのである。

子供の祖父母の同居する家庭では父母のみの場合よりも關係が少しく複雑になる。時とするとき老人が子供を獨占して父母の影響が十分子供に及ばないやうにすることがある。老人は自分の身體が次第にさかなくなり活潑な運動も出來ないやうになつて居るから、孫が自由に飛び廻るのを

甚しくあぶないと思ふ傾向がある。又老人の無聊を慰めるのに子供は大いに役立つから、世の中に興味を失ひ又世の中からも捨てられんとする老人は、子供を父母よりも甚しく愛して或は之に頼らんとする傾きがあり、一面に子供の運動を制限せんとすると同時に他面には些か子供を玩弄しすぎる弊が生じ易い。随つて大抵の子供は父母の許にあるよりも祖父母の手にある時の方が我儘になり易い。加之祖父母と父母との間には一般に考へ方がちがふと同時に育児に關する方針も亦異り易く、爲めに動もすると祖父母が父母の教育方針に干渉し、甚しきは子供の前で父母の仕方に反對したりすることがある。これは子供の感情の上に非常なる悪結果を生ずる。ましてや老人が始終嫁を罵つたりいぢめたりしてゐる家庭では、子供の健全な感情教育などは、到底出来ない。同様に父母の祖父母に對する態度がよくないやうな時は、それが直に子供に著しい影響を與へることも亦いふ迄もない。

畢竟するに家庭に於ける子供の感情教育の基礎は一家の團樂の完全不完全にある。一家和睦み相親しみ朝夕に笑聲の漲る家庭であれば、子供は自ら其の雰圍氣の影響によつて優しい素直な性質を得るであらう。反對に一家の生活に調和が缺けて父母が相争ひ或は父母と祖父母との間が圓

滑に行かず、家庭が常に冷かな空氣に満ちて居るやうな時は、如何に父母が子供の教育に苦心し手段を廻らしても、子供らしい明朗な感情に何等かの陰影が宿るのを妨げ得まい。父母の品性や性格は不知不識の間に大小種々の行動となつて現はれ、一舉一動の末に反映するものであり、従つて子供は斯かる雰圍氣の中に絶へず生活して之に染み之を自分の心の中に吸収する。まことに子は親の性質を鏡のやうに映し出すものである。

兄弟 兄や姉から子供がうける感化も亦頗る大きい。併し親の感化に比べると大分趣きを異にする所がある。小さい子は姉や兄のすることを片端から眞似するものであるが、併し兄弟同志は年齢の差もあまり大きくないから單に年上のもものが年下のものに眞似されるだけで無く、年下のものから年上のものに影響することも相當にある。即ち兄弟姉妹が互に切磋琢磨する所からして寛容、従順、融和、相互扶助等の感情が發達して來る。兄弟喧嘩は絶間のないものであるが、大體が親密な關係の上に起るものであるから、通常長続きせず、暫くすると仲直りが出来るのみならず、生長した後から見ると幼ない時の兄弟喧嘩程、思ひ出の懐しいものはない。時としては互に一步も退かぬ主張の對立から激しい争鬭をするけれども、又その中から自ら弟は兄に従ひ、

兄は弟を庇ふ優しい情が起つてくる。喧嘩絶間のない兄弟が外に向つて相庇ひ相扶けて其の侮りを禦ぐのは實に見る目も麗しい風情である。兄弟をもたぬ獨り子には鷹揚なよい所があるけれども往々相互扶助の情に乏しい缺點がある。

かくの如く兄弟姉妹關係が子供の感情發達の上に及ぼす影響は頗る大きいもので兄弟の間が調和よく行けば徳性の發達に非常によい結果を生ずるが、若しさうでないと思慮すべき事態を起す恐れがある。子供は何れも父母の寵愛を自分一身に集めようといふ欲望をもつてゐる。二三歳の子供が始めて弟か妹が生れた時、自分の代りにその赤兒が母の膝に抱かれ母の乳を飲むのを見て大いに怒り、赤兒を打つたりすることも少くない。之に似た事は兄弟同志の間に常に起ることである。それ故に親の一寸した不注意の爲めに一人の子供が自分だけ除け者にされてゐるといふ感じを起すやうなことが間々ある。殊に數名の兄弟の中で一人だけ何か缺點をもつてゐる時、例へば智能が著しく劣るとか、身體的に不具だとか虚弱だとかいふ場合には、その子は次第に劣等感を抱き、僻みの心を起し、その爲めに元氣をなくして何事にも退嬰的になつたり、或は反對に強いて空元氣を出して奇矯な行動に出たりすることが尠くない。

生活條件

世の中には金殿玉樓の大邸宅に住み多數の雇人に侍かれて居る子供もあれば、貧民窟に生れて殆んど親にも構つて貰へず困苦缺乏を忍ばねばならぬ子供もある。玩具の國の王子のやうに部屋一杯を埋める立派な玩具の中で育つ子もあれば、棒切れや空罐などを唯一の玩具として遊ぶ子供もある。斯様な物質生活の差は次第に子供の感情の調子に影響しない筈はない。上品で繊細な感情は上流社會の子に多く見られ、粗野で力強い感情の調子は下層社會に屢々見られる。斯くの如く人各その生活の水準に應じて夫々特徴ある感情の調子に染むものであるが、併し此處に貴賤貧富を問はず子供の感情教育上家庭に於いて最も注意すべきことがある。其の第一は子供の心の満足は決して物質のみで満たされるものではないことである。さきに述べた通り家庭に於ける人の和がどんな生活状態に於いても根本的に大切である。兩親の愛に存分甘えることの出来ない子供は、如何に贅澤な生活をして居ても何處か充されぬ心の隙を感じてゐる。その反對に家庭が圓滿であれば如何に物質的には貧窮な家の子も精神的に十分恵まれ愉快な満ち足りた感情をもつて居る。第二には餘りに豊富完全な環境に子供をおくと却つて子供の心を十分に満足せしめず又十分な發達をさせないことである。例へば子供に上等なバネ仕掛の玩具や高價なる組立て

玩具などを與へるよりも、むしろ簡単な棒切れとか古新聞紙とかボール紙とかいふものを與へて、これから自分で思ふまゝの物を作り出すやうにさせる方が遙かによい。(勿論子供は高價な玩具の立派さや珍らしさには暫し心をうたれるけれども、實際に於いて子供が眞に欲求してゐるのは物の出來上つて行くことに伴ふ楽しさである。町角の家裏店の前に立つて今川焼の焼けるのを待つ楽しさは、高價な西洋菓子と與へられるよりも遙かに子供の心を誘惑する。玩具屋の店頭に並ぶ立派な船や自動車よりも、父親と二人で鋸や金槌を以て日曜の半日を費して作り上げた船の方が、たとへ粗末なものであつても何倍かうれしく大切に思はれるのである。都會の懶惰な生活に馴れた子供は、動もすると面倒臭い製作の過程を楽しむよりも、容易に手に入る既製品を次から次へと享樂する方を選ぶ事もあるが、併しそれは既に子供が餘りに完備し且豊富過ぎる環境に中毒して自然の心情が麻痺してゐるからである。勿論子供を全く文化の恩恵から遠ざけよといふのではない。併し子供の心情の發達には、尙多く素朴な自然的な環境の中に生活して子供自ら此環境に加工し、その中から自らの力によつて何物かを作り出すことの樂しみを味はふことが必要なのである。第三には餘り早くから精神的刺戟を與へ強制的智的教育を施したりして子供を疲れさせてはいけな

いといふことである。殊に都會では極めて強烈な音や光や味や香などが充滿して居り、かかる刺戟の中に生活することは勢ひ子供の早熟を來たし、随つてまた早老となる。人々の感情も弱々しくなり又徒らに心がいら／＼して持久性や調和性に乏しくなる。今日の大都會の人々の状態を見たらば思半に過ぐるものがあるであらう。それ故に都會の子供はなるべく自然に接する機會を多く與へ、出來るだけ山や海に遊んで日光に浴し清潔な空氣を吸はしめ、身體を動かさせ、又無用な刺戟を遠ざけて、落ちついたのんびりした感情を味はしてやらねばならぬ。

子供の感情を正當に發育せしめんが爲めに家庭に於いてなすべき注意は之で盡きるものではないが、要するに家庭は子供の生活の本據であり子供の心の安息所である。父母兄弟の團欒の囂々たる和氣の中に住めば子供は自ら平穩な美はしい感情を豊富にもち、家庭が不和で殺風景であれば子供の感情も粗野となり反道徳的な方向に傾き易い。家庭に於ける人々の中でも殊に父母の感情傾向は、日常不知不識の間に強い影響を子供に及ぼし、子供は父母のすることをそのまゝ見習ふのみならず、親の性行が醸し出す雰圍氣の中に住んで日常座臥その影響を受けることが實に深く大である。子供の教育に關して父母の何よりも注意すべきは此の點にある。彼の知識の教育の

如きは之に比すれば第二次又は第三次的のものなのである。

第三節 子供の感情と自然界

子供は本来自然の子であり、自然は子供の心身の發達に極めて密接な関係をもつ。山に登り川に泳ぎ犬をつれて野に遊び鳥の歌をきゝ花を摘み草の上に横はることは、子供にとつて無限の楽しみであり子供の心身の健康に最もよき影響を與へる。然るに現代文化の進むに従ひ人々の都市集中の勢は増し、都市は次第に人工的な要素が多くなり、道路さへも悉く舗装されて人は全く土を見ることが出来ないやうになり、都市の子供が次第に自然界から遠ざかりつゝあることは、人類の將來に對して誠に重大なる結果を生ずるであらうと考へられる。

都會の子供と田舎の子供 都會と田舎の子供を比較して見ると、種々な點で著しい相違が認められる。

體格 都會の子供は田舎の子供に比して、身長に於いて優り、胸圍と體重とに於いて劣る傾向が次第に著しくなりつゝある。一言にしていへば都會の子供はひよる長くなり、丁度日光に當ら

ない植物に似て居る。いふまでもなく都會は田舎よりも衛生設備や保健思想が遙かに發達してゐるから、乳兒(即ち生後滿一箇年の子供)死亡率の如きは田舎よりは都會の方が少いが、子供の體格は大體に於いて悪くなりつゝある。齶齒も都會の子供に遙かに多い。京都府の小學兒童に關する身體検査統計を例として表示して置く。(第一表イロハニ)

第一表 小學校兒童身體検査統計(%) 昭和七年京都府學務部

	男		女	
	京都市	郡部	京都市	郡部
發育概評	26	24	25	24
營養	54	58	55	57
眼疾	20	18	20	19
耳疾	40	49	44	48
齒牙	53	49	51	50
	7	2	5	2
齶齒	4	4	4	4
齶齒	3	2	2	3
齶齒	2	2	1	2
齶齒	83	62	84	67

年齢	男		女	
	市	郡	市	郡
7	109.9	108.9	108.8	108.6
8	115.2	115.7	113.8	112.5
9	119.8	118.9	118.8	117.7
10	124.8	123.8	124.6	122.1
11	128.8	128.4	128.5	126.9
12	133.8	132.0	134.1	131.6
13	137.9	136.7	139.0	137.7
14	146.4	143.6	144.0	142.5
15	147.5	147.8	149.4	144.3

第二表 都市及郡部兒童の心的機能比較

		都市			比
		市内	近郊	郡部	
智 能 (B式圖檢體 查ノ成績)	男	48	42	40	0.8
	女	45	37	36	0.8
作業速度 (60枚ノカード分類ニ 要スル時間(單位秒))	男	155	159	183	1.2
	女	148	150	185	1.2
作業確度 (同上ニオケ ル誤配數)	男	17	19	11	0.6
	女	16	19	13	0.8
握 力 (スメドレ -握力計)	男	23	19	24	1.04
	女	18	19	23	1.3
持 久 力 (エルゴグラフノ連續率) 引持久時間(單位秒)	男	50	53	63	1.3
	女	42	40	52	1.2
語 彙 (三分間ニ聯想シ 得ル言葉ノ數)	男	48	39	35	0.7
	女	40	34	31	0.8
反應時間 (合圖ノ音ヲ開イテカラ 指ヲ押ヘルマテノ時間 (單位1000分の1秒))	男	230	250	290	1.3
	女	220	240	270	1.2

第六章 子供の生活と感情の教育

の疲労よりも精神的の疲労に基くことが明かに
なつてゐるので、都會の子供の方が精神的に速
く疲労し易いと言ひ得るのである。
運動的氣質、アメリカのダウネー原著、我が
國の桐原博士改訂の意志氣質検査法を、市部及
び郡部の小學六年生(男女共)に就いて試みた
結果の平均値を圖示すると第一圖のやうになる
(桐原葆見著『意志氣質検査法と其規準』参照)。
之によつて見ても田舎の子供は都會の子供よ
り一般に愚圖々々してゐるが抑制や固執が強い
といふ常識が裏書きされてゐる。
自然界に對する態度、都會の子供と田舎の子
供では自然に對する態度、即ち觀念や感情が大

心理的機能 第二表は、嘗て私が京都市並びにその近郊及び郡部の小學六年生の一部に就て試
みた心理検査の結果を比較したものである。市部の子供は郡部の子供に比して多く識り仕事が速
く能率的であるが持久力が非常に劣つてゐる。この持久力の検査は、一定の装置につけた錘りを
右中指で精一杯連續的に半秒毎に引いては放し引いては放しさせ、耐へられなくなるまでの時間
を計つたのである。最近の研究によれば、この仕事で最初に現はれてくる「耐へられぬ感」は筋肉

〔ハ〕 (グキ
ラ
ムロ) 體重

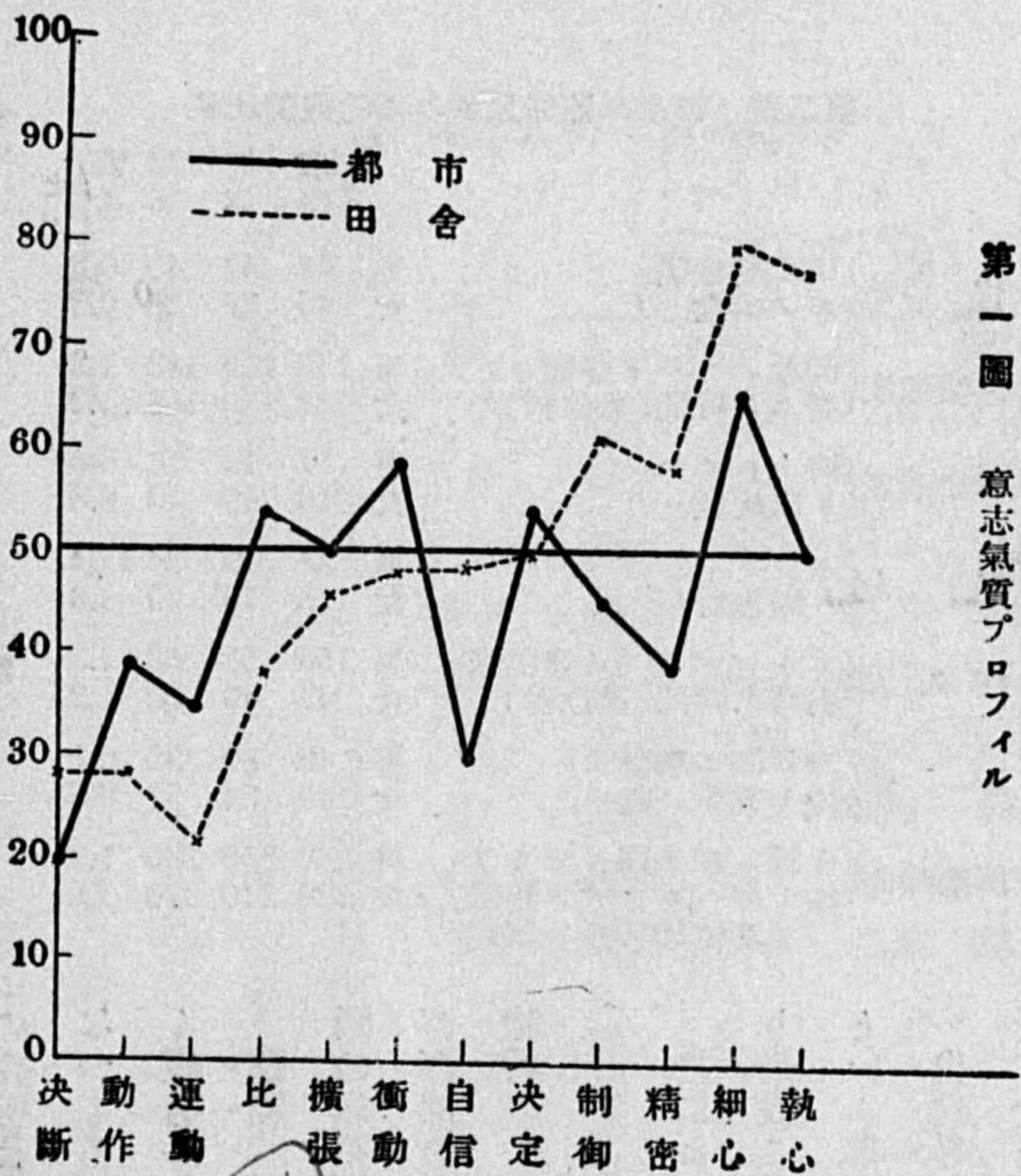
年齢	男		女	
	市	郡	市	郡
7	18.3	18.5	17.6	17.9
8	20.1	20.1	19.6	19.3
9	22.2	22.3	21.8	21.5
10	24.3	24.3	24.3	23.6
11	26.5	26.5	26.5	26.1
12	29.2	28.9	29.8	28.9
13	31.6	31.7	33.6	33.9
14	36.8	36.2	37.8	37.9
15	38.7	40.5	41.2	40.7

兒童の情操とその教育

〔ニ〕 (バ
イ
トル) 胸圍

年齢	男		女	
	市	郡	市	郡
7	54.5	54.7	53.0	53.7
8	56.3	56.9	54.7	55.0
9	58.4	58.9	56.6	56.7
10	59.9	60.7	58.3	58.8
11	60.9	62.6	60.2	60.8
12	63.5	64.8	62.7	63.0
13	65.6	67.2	66.1	66.2
14	67.0	70.5	69.3	70.0
15	71.3	72.7	72.9	72.0

第一圖 意志氣質プロフィール



分違ふであらうと思はれる。それを確めるつもりで、私は嘗て都會の學校生徒と或る山間の小村の學校生徒(尋常五年生)とに『太陽』『秋の一日』といふ題を與へて作文を作らせ比較對照して見た。學校教育の力が随分影響してゐるので餘り顯著な差を見出すことは出来なかつたが、太陽の恩恵として擧げてゐるものでは、
 都會……熱、光、萬物育成のもと、
 太陽がなければ人は滅びる。等
 の如く一般的抽象的なものが多いの
 に對し、

田舎……夜があける、雞を遊ばせる、牛や馬を肥らす、穀を乾かす、稻を實らす、雪を解かす、日が照らねば遊びに行けぬ、等

の如き、生活の中に切實に感じられてゐる具體的な場合が澤山算へられてゐた。それだけ田舎の子供にとつては自然の恩恵が知識としてではなく生活に染みて深く感じられてゐるのであらうと思はれる。然るに太陽を讚へる言葉に於いては都會の子供は實に豊富な語彙をもつてゐる。之は『秋の一日』の方でも認められることで、自然を美化する美辭麗句は都會の子供の文の中に遙かに多く見出すことが出来る。太陽とか雲とかいふ自然物をそのまゝ題にすることは田舎の子供には稍困難を感じしめるやうである。然るに『秋の一日』の如き題で書かせて見ると田舎の子の文の中には自由自在に自然が織り込まれてゐる。自分の生活を述べながらその中に織り込んだ自然界の叙述によつて秋の氣分を十分に出してゐる。これに對して都會の子供の文には特に秋を誇張しようとする苦心の跡が多い。郊外散歩、紅葉狩、茸狩といふやうな特別な行樂を述べるのではない、自分の生活と秋の氣分とを一致せしめた叙述が極めて尠い。秋の氣分を主にすると單なる敘情文になり、生活を主にすると別に秋でなくとも差支へのないものが多くなる。これ等の點から見る

と大體に於いて次ぎのやうに云へるのではないかと思ふ。即ち都會の子供は自然を自分と相對して向ふに置いてゐるが、田舎の子供は自然を自分の生活から切離せないものとしてゐる。田舎の子供は表現は幼稚であるが自然を味はつて居り、都會の子供は觀念的に自然を考へて居り、表現の仕方は知つてゐるが肝腎の實感がない。之は都會と田舎との生活環境から當然豫想される事柄である。

私は又小學校の三年生に星の世界を童話化した挿繪を示し、之を基としてお話を作らせ、都會と田舎で如何に違ふかを調べた。都會の子供は殆んど總てが直ちに之を星の世界のお話と解し、長短巧拙の差こそあれ、空想的な童話風のものを作つた。之に對し田舎の子供は約半數までが繪の意味が理解されず、只お姫様がゐます、女の子がゐます、蝶を捕へようとしてゐます、の如き繪そのものの敘述に止まつた。他の半數も空想的感情の貧弱なことは都會の子供に比して著しい對照であつた。之によつて考へるに、都會の子供は繪本、童話、童謡等の文學によつて自然に對する空想的詩情を豊富にもつて居るに反し、田舎の子供は斯かる文學に接する機會が乏しいため、自然に對するさやうな空想的感情には餘り親しみがなないのであらう。併しこの事を、さきの都會

の子供には自然に對する實感が乏しいことと併せ考へると、都會の子供の自然に對する感情は、自然そのものから誘發されるよりは、童話童謡の如き文學から導入される空想的感情が主なる勢力を占めてゐるのであり、之に對して田舎の子供は常に自然を友とし自然の中に生活してゐるから、自然に對する感情は自己の生活感情であり、一方感傷的文學に接する機會が乏しいために、自然を戲化して見る空想的感情に乏しいのであらうと思はれる。

五六歳頃の幼兒は盛んに種々な質問を大人に向つて發するものであるが、逆に我々が斯かる幼兒に自然現象や形而上的觀念に就いて質問を發しその答へを調べて見ると、子供の特徴ある思考法則を發見する事が出来る。瑞西のピアジェといふ兒童心理學者は斯かる方法で種々兒童の心理を研究したが、その結果子供の考へ方は根本的には極めて自己中心的で、何でも自分の爲に又自分と同じやうな心をもつて實在するものであると考へるもので、それは子供の思考が、(1)實在論的であること、(2)汎心論的である事、(3)人工論的であること、に現はれてゐると言つてゐる。幼兒の考へ方が實在論的であること、即ち幼兒は夢や思考や神や名前の如きものを、すべて他の物と同様に實在するものであると考へてゐること、及び幼兒の考へが汎心論的で、自然物はすべて自分

と同様に心もち、思考、感情、意志を以て動いてゐると考へてゐることは、確かに幼兒の考へ方に共通してゐる事實であると思はれる。併し幼兒が自然を人工論的に、即ち自然物や自然現象は人間又は全能なる人間(神)の作爲によつて作られたものであると考へてゐるといふ點は、尙ほ聊か疑點を有する。私も都會並びに山間の小村の幼兒に就いて種々質問を試みて、子供が天體や自然物の由來に就いて如何なる考へをもつてゐるかを調べたことがあるが、大部分の子供の答へは『知らない』『分らない』の一點張りであつた。神様や佛様の作つたものであるといふ答へも聞か見うけられたが、之は大人に教へられてゐた故である。原始人の宗教や哲學的思想には、自然界の發生に關して人工論的な點が頗る多く見うけられるが、子供では教へられてゐない限り『分らない』といふのが眞實であると思はれる。所が私は質問を追求して見た結果、同じく『分らない』といふ答へにも都會の子供と田舎の子供とでは聊か相違のあることを見出した。勿論子供は自ら『分らない』といふ事柄に對し質問を追求されると、苦しまぎれに随分出鱗目な答へをしたり態と妙な答へをして大人をからかつたりするものであるから、斯かる追求に對する答へからして實際には子供がそのやうに思考して居るのだと早斷する事は避けねばならぬ。概して子供のする因果

的な説明は事物間の表面上の連りさへ出来ればそれでよいとしてゐるものであるから、随分氣紛れな其の場限りの説明で誤魔化す場合がある。併し私の見出した差異といふのは、答への内容ではなく、寧ろ質問に對して答へんとする態度上の差である。都會の子供は『太陽はどうして出来たか』『山はどうして出来たか』等の質問に對し、一應は説明をしようとする努力を示す。併し暫く考へても其の説明が出来ぬから『分らぬ』と答へる。その時更に追求すると、益々『分らぬ』といふか或は『火で出来た』『土で出来た』『地震で出来た』といふやうな答へを辛うじてする位である。之は都會の子供は幼時から既に物を合理的に考へようとする傾向のあることを示すものではなからうか。之に對し田舎の子供は同じ質問に對し同様に『分らぬ』といふが、之は太陽や山は初めからあるものだから、出来た時は分らぬといふ意味が勝つてゐる。質問を追求すると、『お日さんは山の向ふに初めから居る』『山は八幡さま(鎮守神)が作つた』『お日さんは照らさうと思つて出て来た』の如き答へ方をする。即ち田舎の子供にとつては天體や自然界は初めからあるものである、との考へ方を大人の考へに翻譯すれば人間の爲めになるやうに出て来たものであるか、又は神様が作つたものだらうか、それは昔のことだから分らぬ、といふ意味であらう。

都會の子供は自分の理性で承知し得るやうな説明を試みようとするのに、田舎の子供にはそのやうな努力がないのが著しい對照であると思はれる。

都會の子供と田舎の子供とでは此のやうに心身の働きの上にも感情や觀念の上にも相當な相違が認められる。この相違を要約して言へば、都會の子供は虚弱で耐久力がなく智的に早熟で且感情も空想的に纖細になつてゐる。田舎の子供より仕事は速く能率的で且多くを知つてゐるが浮薄な點がある、と言ひ得る。畢竟これは子供が自然から遠ざかり人工的な環境で生ひ立つからである。中には田舎育ちの子供は鈍くて要領が悪く感情が粗野であり、都會の方が遙かに子供を高尚にし秀才にする^{と考へる人もあるが}、幼い子供にとつては智的早熟や感情の纖細化は決して望ましいものではない。都會の子供を自然の懷に歸してやらねばならぬ。自然を相手にした時子供は眞の生活の喜びを味はふのである。併しそれを述べる前に、自然が如何に子供の性格に重要なものであるかを述べて見たい。

性格と自然 性格の發展には自我感と能力との均衡が大切であり、殊に多數の相集まつて營む所の社會の生活に於いてさうである。前にも述べたやうに人は皆自己がえらいものである

といふ感じを有つて居るが、實際に於いて自己の能力がその自我感に相當して居つて自分をえらいと思ふだけの仕事が出来れば子供の心には愉快を感じるが、自己の能力がその自我感に相當せず兩者の均衡が破れると、いかに自分を偉いと思つて居ても實際の自己の能力ではその期待に添ふだけの仕事が出来ないから、大いに悲觀して自信を失ふ事になり、甚しきは性格の異常を生ずること少くない。元來子供の性格異常には、先天的な素質的缺陷に基くものも多いが、又後天的環境によつて自我感と能力との不均衡を來たした爲めに生ずるものも相當にある。その中特に目立つのは智能劣等者や不具者が陥り易い自信喪失と、拗ね者になることである。

自信喪失兒と自然 智能の劣等なものの中最も甚しいのは精神薄弱兒と呼ばれるものであるが此の種のものは今暫く置いて、普通小學校で劣等兒と呼ばれる程度の子供、或は少し出来が悪い位の子供は、往々自己の不成績の爲めに自信を失ひ奮發勉強する氣力が無くなり、課題を與へられたり或は試験などの時に人の前に出ると、初めから度を失つて出来る筈のことが出来なくなつてしまふ場合がよくある。その爲めに一見すると頑固な意地の悪い性質のやうに思はれ易い。實はこの子供に對する外からの要求が高きに過ぎた爲めに子供自身も初めは相當な自我感をもつてゐる

たのに何か仕事をやつて見ると、自己の能力が之に伴はず、自我感との間に甚しい不均衝を來たすために自信を失ふに至つたのである。斯様な子供を性急に教へようとして強く叱責したり或はたゞ激勵するのみでは効果は無いのみならず却つて悪化させることが多い。右を見ても左を見ても自分には出来ない要求のみ提出されるやうな境遇の中にあるならば、何人でも斯様な精神状態になるであらう。故にこのやうな子供を指導するには、先づ彼等が興味を以て對應し得るやうな環境に置いてやらねばならぬ。例へば自分よりも幼少な子供と共に仕事をしてゐる時には自分にも相當な事が出来、自分の力を十分に發揮し得るから、かゝる子供は前とは打つて變つて喜んで元氣よく遊び又は學ぶやうになる。更にかゝる子供に對して最もよいことは自然を相手にさせて遊ばせ又は學ばせることである。自然は何をされても怒ることもなく又子供に不可能なことを要求することも無い。そして自然に接觸して居ると、子供はその能力に應じて自然の中から自己に相當な種々の驚異や美を發見する。人を相手にする場合には劣等感によつて押縮められてゐた心が自然を相手にする時には何の故障もなく伸張し、自發的興味が油然として起り、子供は次第に元氣を取返し快活明朗になつて來る。小鳥の飼育とか金魚の世話とか草花の栽培とかいふやうなこ

とを子供にさせすべてを子供の責任に任せきつて彼等の自由にさせるならば、子供はこれ等のことに次第に興味を感じるやうになり又自己の努力の結果草の花が咲いたり小鳥が卵を生んだりすると、そこに初めて自己の能力に自信を生じて更にそれ以上の六かしいことを進んでやらうとするやうになり、かくして徐々に能力の發達を促すに至るのである。

拗ね者と自然 今述べたやうに子供の自我感が相當に高いのに、環境の事情や身體的の缺陷のために心身の能力が不十分で、期待しただけの仕事が出来ずして十分な自我感の満足が得られなかつた場合に、子供は非常に頑な拗ねた根性をもつに至ることが間々ある。斯様な子供を矯正するには先づ子供が信頼し得る暖い心の持主が其の指導者となれば比較的に容易に出来るのであるが、それでも尙ほ子供が胸襟を開かうとしない場合には、やはり前と同じく子供を自然に親しましめるのがよい。子供は自然との接觸によつて自然の中に素直な性情を發見する。何をされてもされたまゝになつてゐる自然物は、子供の心に之を愛し之を憐み之に同情する心を喚起し、かくて相當の月日を経れば、何時の間にか子供の心の鐵鎖も自ら解け始めて、次第に明朗な子供らしい氣持になるのである。

飽き易い子供と自然 物質的に恵まれた家庭の子供就中都會の子供は得て物事に飽き易く絶えず新しい物を求めて不平不満な氣持でゐる者が多い。即ち子供の周圍が餘りに人工的に完備し人工的な強い刺戟によつて満されてゐるので、最初は新しい刺戟に興味を喚起されるが間もなく之に馴れて興味を失ひ、更に前よりも一層強い刺戟を求めるやうになるのである。例へていはゞ平生少しの身體の故障に對してすぐに藥劑を用ひて之を治さんとする人は、次第に強い藥でないときかなくなつてしまふ様なものである。總て何事によらず、又子供のみならず大人に於いても、その心の欲求を人工的な刺戟で満足せしめやうとすると、次第に其刺戟を強くするか或は更に珍奇にせなければ満足せぬやうになり、結局感情の頹廢を招く感覺的享樂に陥つてしまふ。然るに世の中に最も變化の多く最も新しい刺戟に富んだものは自然である。試みに斯くの如き都會の子供を一日野外に放して見るがよい。一木一草の姿態にも蛙や魚や蝶や鳥の運動にも千萬無量の變化があつて、見れば見るほど今まで知らなかつた新しいものを發見し今まで感じなかつた新しい興味を見出す。村の子に交つて蟬をねらひ蝶を追ひ魚を掬ひ鳥の卵を探しなどして遊べば、其の興味は無限であり刺戟は無盡藏であつて、日の暮れるのも忘れるであらう。かくして人を相手にする時は生

氣を失つて萎縮する子供の心も、或は人工的な刺戟によつては十分満足を味はひ得ない子供の心も、自然を相手にする時は澹澹とその生氣を恢復して來る。子供は畢竟自然の子である。都會の人工的な環境からなるべく子供を救ひ出して、自然の懷に抱かれしめるやうにすることは、性情陶冶に最も大切なことである。

自然を友とせよ 以上述べた所によつて子供の發達にとつて自然がいかに大切なものであるかを示し得たと思ふ。前にも云つたやうに自然に關する知識や自然に對する感傷ならば、却つて都會の子供の方が豊富であらうけれども、子供と自然との交遊の目的は決してそのやうなことを第一に求めはしない。自然の懷に抱かれ自然の中で思ふまゝに遊びつゝ子供自身が體得して行く生活の力即ち澹澹たる生氣を養ふことが何よりも大切なのである。都會の中に居て道を歩くにも電車や自動車に轢かれぬやうに戦々競々として居ねばならず、學校の庭で遊ぶ時も多數の他の生徒と衝突せぬやうに注意せねばならず、又家の中でも近所や隣りに氣兼ねして大きな聲をも出し得ない子供は、自然を相手にする時に初めて精一杯思ふ存分に走り、飛び、歌ひ、叫ぶことが出来る。之が最も貴い所である。而も自然は無限の變化と無盡藏の美しさと珍らしさと不可思議

とを持つてゐる。人の作つたどんな面白いことも、自然の中に遊んで生ずる興味ほど多くなく又永續きはしない。加之書物で知る自然の知識も自然と交つて初めて眞の興味を深め、童謡や童話で養はれた詩情も自然の懷に抱かれて初めて實感を籠めることが出来るのである。ゲーテはその『植物研究の自傳』の中で次のやうな意味のことを述べてゐる。

『自分はかなり大きな都會に生れ、こゝで育てられたので、そこで得た自分の教養は文學と詩歌とであつた。自分の青春時代は斯くして過ぎたので、自然界の現象に就いては少しも知らなかつた。その後の教育も大きな都會でうけねばならなかつたので、必然的に自分の精神活動は社交的儀禮に向はねばならず、その結果として美文學といはれた滑稽なもの、研究に費され自然界の興味を解し得なかつた。學校に於ける無意義な博物學の講義の如きは幼時に夢想もしないことだつた。後に自分はライマールに移つた。そこで今迄の書齋的な零圍氣を田園や森林や果樹園の如き環境と取り換へることが出来た。人間には背を向けて植物や花の世界にその注意を注ぎ、正しき事に向ふ汚がれざる精神の力で、秘かに心を惹く自然の生兒を究めんとする植物界に對する趣味は非常な力を以て自分の胸中に湧き起つて來た。後更にアルプスを越すに當つて、自然界殊に植物の世界に對する自分の努力は更に強く刺戟され、詩歌に對する趣味と並んで自分に一種無限の快感を與ふるに至つた。』

と。又宋の蘇東坡の『赤壁賦』に

『夫レ天地ノ間、物各々主アリ、苟クモ吾ノ有スル所ニ非ンバ、一毫ト雖モ取ルコトナケン、惟ダ江上ノ清風ト山間ノ明月ト、耳之ヲ得テ聲ト爲シ、目之ニ遇ウテ色ト成ヌ、之ヲ取ルモ禁ズルコトナク、之ヲ用フルモ錫キズ、是レ造物主ノ無盡藏ニシテ、吾ト子ト共ニ適スル所ナリ。』

といふ一節がある。共に大いに味ふべき言であると思ふ。

唯こゝに注意すべきことは子供を自然に親しませるのは、子供に眞の自己の生活を覚えしめるのであつて決して大人の趣味を強制するものであつてはならぬことである。子供が自然界に見出す驚嘆は大人から見れば極めて微細な平凡な事柄に對してであつて、雄大な風光や明媚な風致に心を惹かれることは尠い。岩の間を巧みに流れ去る木葉の動き、溪間を辿る蟹、青葉に隠れる甲虫、樹の枝の間の思ひ掛けぬ所に見出さるゝ小鳥の巢などに興味をひかれるのである。又子供は自然界から動物學や植物學を學ぼうとするのではない。實物教育は子供にとつて極めて興深いものであるが、決して早くから強制さるべきものではない。これ等の事はすべて子供の心の成長を精細に觀察してその發育の時期に適するやうに誘導し教育して行くことが肝要である。

第四節 友人關係と子供の感情

子供の集團本能 子供が生れて半年位の間は歩くことは勿論這ふことも出来ずたゞ一つ所に横臥して居るより外に何も出来ない。この間の乳児は目のさめて居る間はたゞ手や足を無目的に動かすだけで周囲の人や物を見たり手に持たされたものを見たり又は之を口に入れて吸うたりして遊んで居り、少しも他の人を相手にしようなどいふ欲求はない。たゞ見馴れた母や乳母などの顔を見ると喜び、それ等の人が居なくなると時々淋しがらるものである。即ち此の時代の乳児の生活は殆んど全く孤獨的で他との交際といふやうなことは殆んど無いと云つてもよい。然るに生後一年又は一年半頃になつて子供が歩き出せるやうになると、自分と同じ位の年輩の子供の中に交らうとする欲求が盛んになり、即ち遊び友達を求めらるやうになる。而かも其の遊び友達の數は初めは極く限られた一人か二人であるが、生長するに隨つて次第に多數の集團に加はるやうになり、斯くして子供同志の關係が、子供の生活環境として極めて重要な意味をもつてくる。此の時代の子供にとつては友達を求めることは其の自然の欲求であつて、いくら子供が玩具を

喜び或は自然を愛するといつても、自分獨りでは淋しくて興味が少く、同年輩の子どもと遊ぶことが何より楽しいのである。隣近所の子供同志は非常に速かに親密になる。新しく轉宅した家の荷物がまだ片づいてゐない間に子供はもう近所の子供と仲よしになつてゐる。田舎に連れて來られた都會の子供は草や虫に親しむ前に、村の子と友達になる。先づ友達を得、友達に交つてから後に自然や土地が子供の生活環境となつてくるのである。子供同志で何々の遊びをしようといふ約束のあつた日曜日に親が子供を郊外に連れ出さうとしても、子供は承知しない。親が強ひて連れ出しても子供は樂しまない。或は子供に勉強をさせる時でさへも時とすると一人では氣が乗らず、同じやうな子供と一緒にやつてやる時には大いに勵みが出て一生懸命にやるといふことも多い。それ故に子供をその友人關係から切離して單獨に考へるならば、種々な理想的な教育法も考へられよう。併しかゝる教育を行ふに當つて、子供が斯くの如く他の子供と遊ばうとする本能を抑止して、子供と全く年齢が違ひ隨つて性質や氣持の全く別な家庭教師や乳母などのみ交らせて置いたならば、如何に理想的に割り出された教育法でも、それは少しも子供に喜ばれず、隨つて實績を伴はぬのみか、却つて子供の心を傷つける結果となる。從來兎角に子供の集團本能が人々に

無視され易く、子供と親又は子供と先生との関係だけで子供の教育が出来るやうに考へる人が多かつた。そして子供同志が自然に相集つて遊んで居ると多くは無秩序な亂暴なことをし易く、親たち先生たちの考へて居る教育の理想と遠ざかり易いので、親や教育者は子供の交友に嚴重な制限を附する傾きがあつた。向ひの子は行儀が悪いから遊んではいけない。隣の兒はきたないから遊んではいけないなど、禁止づくめであつた。勿論子供同志の間に種々道德的な感化模倣の行はれることは極めて多く、『友を選べ』は昔も今もかはらぬ金言であり、悪い性質の友たちとの交遊は禁じた方がよい。併し友を選ぶと云つても餘りに神経質に過ぎて完全無缺を望み少しでも缺點あるものは之を避けさせるといふやうな風であると、結局我が子を周圍の子供達から離してしまふこととなる。然るに子供が友達を欲するのは其の生れながらの本能であり、友達との交際によつて他からは得られない精神的榮養を攝取するのであるから、之を禁することは恰も子供に必要な食物を與へざるが如く、若くは天然の食餌を避けて人工榮養を試みる如きものである。餘りに衛生に神経質である爲めに、あれも汚い之も危険であると云つて結局榮養が十分に與へられぬ結果となるやうなものである。子供はどうせ大人の眼から見れば亂暴な野蠻なものである。むしろ

それが自然なのであり、或は望ましいのですらある。それにも係らず子供の友達の選擇に餘り嚴格にすぎ、子供を小さな大人のやうな不自然なものに仕上げようとすると、却つてその心身の十分なる發達を成し遂げ得させないやうな結果となる。これを要するに子供の交友關係については親や教育者は極めて大體の點に於いて之を監督指導し、蔭から之を見守つて大なる弊害の無い限りなるべく自由にさせて置くべきものである。

児童集團の秩序 児童の交友關係は幼少な子供に於いては極めて漠然たる形をとるもので、一緒に遊ぶと云つても必ずしも皆で一緒に一つの組織立つた遊びをするといふやうなことなく、たゞ他の子供と共に居るだけで満足してゐるので、銘々は夫々自分勝手なことをしてゐる。又必ずしも多くの人數が要るのではなく、二人でも三人でもよいのである。或る人が幼稚園の子供が組を作つて遊んでゐるその一組の人數を調べた所、滿三年から五年の終り頃までは二人か三人の組が多く、六歳を越すと三人組四人組が最も多いといふことであつた。街頭などで多くの子供が集つて遊んでゐるやうに見えても、よく見ると本當に一つの組となつて遊んでゐるのは三四人づつで、幾つかの組が互に入亂れて一つ所で遊んでゐる場合が多い。ウインのヘツツェルといふ

人が街頭に於ける子供の集團遊戯を観察して、彼等が如何なる種類の遊びをしてゐるかを調べた

所、上表の如くであつて、四歳以下の子供では、只他の子供と

一緒にゐて勝手に跳ね廻つたり歌つたり、又は他の子のすること

とを真似しあつて、同じ歌を歌つたり、同じ玩具で同じことを

し合つたりしてゐるのが大部分である。五歳から十歳頃の間は

『天神様の細道』や『中の中の小坊さん』或は『蓮華摘まうく』

の如く各自のする事が一々規則に従つてゐる遊戯が最も多い。

子供の群の数は多くなり集團的になるが、各自が一々規則に従

つたことをするので仲よく遊べる。子供は規則に従つて遊ぶこ

とを自ら好むのである。昔から傳つてゐる遊戯の他に、彼等自

ら考案するものもある。十歳以上になると、各自の行動が一々

規則に従ふのではなく、やり方の規則のみが定つてゐる各自は

其の範囲内で自由な行動をとる編制遊戯が大部分になる、以上

第三表 年齢別兒童の集團遊戯の型(%)

年齢	性	規ナ遊	他似遊	各ル一ノ規	スガ定ニ遊	大ガル自	規テテ各ハ遊	計
3	男女	33	55	17		0		100
4-6	同	16	30	51		3		100
4-10	同	2	18	60		20		100
10-15	男子	0	10	23		67		100
	女子	0	16	25		59		100

所、上表の如くであつて、四歳以下の子供では、只他の子供と一緒にゐて勝手に跳ね廻つたり歌つたり、又は他の子のすることとを真似しあつて、同じ歌を歌つたり、同じ玩具で同じことをし合つたりしてゐるのが大部分である。五歳から十歳頃の間は『天神様の細道』や『中の中の小坊さん』或は『蓮華摘まうく』の如く各自のする事が一々規則に従つてゐる遊戯が最も多い。子供の群の数は多くなり集團的になるが、各自が一々規則に従つたことをするので仲よく遊べる。子供は規則に従つて遊ぶことを自ら好むのである。昔から傳つてゐる遊戯の他に、彼等自ら考案するものもある。十歳以上になると、各自の行動が一々規則に従ふのではなく、やり方の規則のみが定つてゐる各自は其の範囲内で自由な行動をとる編制遊戯が大部分になる、以上

はヘツツェルの得た結果であるが之は大體我が國の子供にも當てはまるやうである。かくの如く子供の集團は年齢の長すると共に自然と規律に従ひ又規律に従ひながら自由に振舞ふやうになるので、子供は集團に加はることによつて自己の我儘を抑制し、社會的協調の習慣を形成して行きうるのである。之は子供の集團本能の自然的發達で、他から強制されたものではない。他の子供と遊ぶためには子供自身我儘を抑制しなければならぬやうになるのである。或る人が十歳から十四歳までの少年少女に『遊戯の時に嫌ふべき性質は何か』といふ質問を試み、次表の如き結果を得た。

第四表 遊戯に於いて嫌ふべき性質

性質	男兒 (百分比)	女兒
我儘、頑固、法螺吹き、怠ける等、集團の一員たるに適せぬ性質	三四	三七
不正直、喧嘩好き、遊戯の規則を犯す、虚言、虚偽、偏頗	二四	三二
友誼や義侠心の缺乏、玩具を壊す、取去る、遊びの邪魔をする、意地悪、嫉み	一五	九
社會的性質—身なりの無さま、移氣、粗野、騒々しい、無作法	一七	一一

我儘や、頑固不正直や不従順は子供自身によつて最も嫌はれてゐる。子供の集團本能は斯かる性

質を自然に防禦してゐるのであると言ひ得よう。子供は他の子供と交ることによつて自然に我儘や意固地を抑へ、不正直不誠意を戒め、又對抗遊戯等によつて自己の責任感を強めることが出来るのである。

子供の喧嘩

人と人とが寄り會へば欲求の衝突も起り優劣の争ひも起るのは當然である。

大人では既に一定の社會的感情が發達して居り社會的位置も出來てゐるので、意見や欲求の衝突があつても又優劣の順位を争ふことがあつても腕力の喧嘩なしに片づくことが多い。併し社會性が之から出來て行かうとする子供では斯様な場合には直ぐ喧嘩になり易い。

二歳三歳頃は喧嘩が可なり頻繁に起る年齢である。そして玩具の取合ひなどは最も屢々その原因となる。即ちこの年齢に於いては既に積極的な性質のものと引つ込み勝ちな者との差が出來て居り、積極的な者は他の子供のもつてゐるものを取らうとして喧嘩になる事が多い。又年長の幼兒は自分より弱い赤兒のもつてゐるものを取らうとし、又小さい赤兒でも氣の強いものは溫和しい年長の兒のもつてゐるものを取らうとしそこで喧嘩になる。即ち斯かる幼い頃の喧嘩はいつでも欲求の強い積極的な者がしかけるので、弱者や溫和しい者がいつも負けになる。

然るに稍長じて集團遊戯をなし得る頃になると、餘り欲求の強い積極過ぎる子供は、他の多くの子供から忌避され仲間はずれにされる。一人と一人との喧嘩ではなく集團と一人との喧嘩となり、かうなると概して集團の方が強い。勿論幼稚園等では我意の強い積極的な力の強い子供が集團を率ゐる場合もよくあるが、併しそれは永續きしない。却つて我儘をいはずに他の子供の遊びを指導するやうな子供の方が、常に子供仲間の中心とされる。斯様な傾向は子供が長すると共にはつきりして來て、子供の集團はその中心となつてゐる子供の性質によつて夫々異つた色合を呈する。例へば小學校などで一つの學校又は一つの學級の中で、專制的な子供、世話焼きな子供、何處となく尊敬される子供(多くは智能の優秀な者)などを中心とすることによつて、子供たちが幾つかの組に分れ、それ等が互に相對立する場合もある。多くの組の中で各々支配關係が定まり各人相互の間の協調がとれてゐて、之を亂すやうな者か出ると喧嘩となる。

組が固定し、他の組との對立が顯著になると、組と組との間の喧嘩が起る場合がある。組の成立は、家が近所とか、學校が一緒とか、町が同じといふやうな、空間的接近が最も大きな原因で、これに年齢、學年の近いことや、性質の類似、智能、生活程度、階級等の接近の如き、多くの原

因も加はる。かくして組が成立し固定すると、互に自分等の組の優越を示さうとして、組の内切磋琢磨が行はれると供に、他の組に對して張合ふやうになる。

斯くの如くにして子供の喧嘩は初めは單に自己一身の欲望を満足さすためのものであつたのが成長するにつれて自己の屬する組の協調維持のためになり、更に其の組の名譽のために起るやうになる。即ち子供の喧嘩を發達的に見ると、このやうに、先づ個々の兒童の強い積極的氣力の我儘から起り、次で子供が集つて組を作るやうになると個々の子供の我儘を抑へるために起り、更に其の次ぎには組の名譽のために起るやうになる。かくして子供の喧嘩は、協調性、義侠心、責任感等の積極的な社會感情を發達させる大切な原因となる。我々は子供の喧嘩を罪惡視して一概に排斥することなく、寧ろ時としては勇敢に喧嘩をするやうにさせ、又次第に喧嘩に對して正しい判斷をなし得るやうに指導すべきであらう。併し子供は未だ本來自己中心的で他人に對する眞の愛情は十分に發達して居ない。従つて喧嘩が粗暴慘虐になり易く、又つまらぬ原因からすぐ喧嘩を始める所の所謂喧嘩好きな性質に陥る憂も少くない。子供の喧嘩は子供の社會性情を養成する上に大切なものであるが、特に之を獎勵する必要はなく、又單なる喧嘩好きにならないやうに戒

めて、些細な事に争はず争ふべき時には堂々と眞劍に争ふだけの勇氣を持つやうに教育すべきであらう。

第五節 青春期と感情生活の變化

青春期の感情的特質

子供が成長して十四五歳の所謂青春期になると身體にも精神にも可なり大きな變化が起つて來る。十歳から十二三歳頃までの間は、心身のはたらきが頗るよく整ひ各部分の間によく均衡がとれて、健康は最も良く病氣にかゝること少く活動が旺盛であつたのが、此の青春期に入るに従つて再び心身のはたらきの平衡が破れ身體各部は各自勝手な方向に急激な發達をなし、その爲めに兒童の心身に不安定不調和の動亂時代が現出し、その生活態度や感情生活の上に著しい變動が起る。斯くの如き青春期に起る心身の變化を詳しく述べるのは別に青年心理の書に譲ることとし、此處では單に感情上に於ける主なる特質のみを略述することとする。

第一に性的機能の成熟に伴うて心身上の性的特徴が顯著になり行くことが青年期の最も重大な特質である。性慾に伴ふ愛情即ち戀愛の萌芽が青年の胸に萌し初める。今まで何等の興味を惹か

なかつた異性の友達の成熟しかけた姿が次第に氣になり出し、異性の前では平靜を失ひ易くはにかみが強くなり、一方には異性に接近せんとする強い衝動はありながら、他方には強ひて之を抑制し、そのために却つて異性への思慕の情を募らせるやうになる。性の秘密に對する好奇心が強まり、密かに性に關する知識を漁つたり或は戀愛小説に心をときめかしたりする。併し性に關しては大體無知識である爲めに之に關係ある種々の事柄についていゝな心配や疑懼を抱く。例へば自瀆の經驗あるものは、之によりて何か重い病氣にかゝらぬか又は精神異常でも生じはせぬかと心配し、或は自己の性器に異常がありはせぬかなど、心配するが如きである。青年は又服装や姿態に氣を配り出し異性に對して自分をよく見せようと努力する。かくして青年の心は性慾と其の抑制、好奇心と心配、戀情と羞恥等の葛藤で、常に不安な落着きのない状態を續けてゐる。

感覺的、感受性は此の時期に非常に鋭敏になる。色彩に對しても音楽に對しても敏感になり好悪が強くなる。殊に味覺と嗅覺とは著しく發達するものと思はれる。觸覺も亦特殊の快感を發するやうになり、擦感（皮膚の全面に漲るやうになる）。又性器興奮の感覺が新に起る。このやうに感受性が強くなるため僅かな刺戟にでも興奮し疲勞し易くなる。このために青年は感情に激し易く

醒め易く、概してその氣分に變動が甚だ多い。故にその指導宜しきを得ない時、又は悪友に誘惑されたりするやうなことがあると、動もすると感覺的末梢的享樂に耽溺し易く、強い酒や性的の興奮のみに興味を感じるやうになる。

自我感（自我感）は青年期に至つて著しく強まる。身長も伸び體重も増加し腕力も強くなり、今まで大人と思つて見上げて居た人々も自分も餘り變りないやうになつたことを發見すると、自分はもはや子供でないといふ氣持が強くなり自我を尊重してもらひ度いといふ欲求が強く起る。又論理的思考力の發達によつて、物事を自分の理性で満足し得るやうに理解しようとする。従つて父母や先生、制度、規則等に對する従來の盲從的態度を放棄し、少年時代のやうに機械的な暗記を好まず、何事にも合理的説明を得なければ止まないやうになり、大人から見ると生意氣だと思はるゝ態度が現はれて来る。併しながら青年の智力はまだ極めて未熟であり經驗は極めて淺いから、此の時代に於いて青年に課せられる様々の問題、即ち小にしては代數、幾何、物理の如き學科も、大にしては人生の目的、生存の理由、宇宙の由來の如き事は、到底青年が之を徹底的に解決し得るものではない。即ち一方に於いては機械的暗記ではなく合理的に理解するのが一番正しい道であると思は

ながら、他方に於いては何事も自分の知力の手には合はず、又誰も之を解るやうに指導して呉れないといふ所から、心中に強い煩悶苦惱を生じ、却つて自信を喪失して自暴自棄となり、甚しきに至つては自殺するものさへも生ずる。

内観生活も亦青年期の一特徴である。氣分の不安や思考上の煩悶などのことから、青年は少年時代の如くにたゞ外界のみに注意して犬を追ひ花を求めるやうな態度を改め、心を内に向けて自分の氣持を考察し、内観するやうになる。即ち自分のこれ／＼の氣持はどうして起つたか、彼れの如き感じは何に基くか等の内省が強くなり、終には自分自身に同情して感傷の涙に浸る時もある。自然や天體に己が心情を移して考へ、我が心憂ふれば天地も亦悲しむやうに見え、己れ愉快なれば周圍の自然も明朗になつたと考へるやうな氣持が甚だ強くなり、或は自然界から自己に對する同情を求めたりして、所謂物のあはれを感じるやうになる。この傾向は一般に女子の方に多いといはれ、女學生の日記は殆んど全頁斯くの如き内観的叙情的言辭を以て埋められてゐるやうである。

斯くの如きが青春期の感情生活の基調をなす主なる様相である。斯様な基調に據つて種々特徴

ある青年期の生活態度が現はれる。

同性愛

青年期の感情生活を通じてその基調をなすのは愛情の満足を求める心である。愛情は本來異性間に起る感情であるが、併し之が満足を求める心に満ちて居る青年は、たとひ同性の間に於いても互に相同情し相牽引するやうになることが多く子供の頃とは異つて青年相互の友情は、それが同性間にあらはれる場合に於いても感情的に甚だ深いものがある。子供の集團は青春期にはいる前後で解散され、青年は多くの友人と表面的な結合を結ぶよりは、一人か二人の氣の合つた友を求めて之と深い交り結び、互に相同情して所謂肝膽相照す友となるのである。然るに多感多情な青年はどうかすると異性に注ぐ戀情を同性の友に注ぐやうなことが起り、二人は永久に離れないとか、身體は一つでも心は一つだとか誓ひ、服装又はその他持物などを全く同じくしたり、更に進んでは之に感覺的成分が混入して抱擁接吻となり、甚しき時は一方が男となり他方が女となつて夫婦の生活を営んだりする。斯くの如き常軌を逸した變態的行爲は勿論極めて少いが、併し青春期にあつては親友關係と同性愛關係とは明瞭な區別が出来ないことが多く、永久に變らざる友情を誓ひ死生を共にせんことを約束し、常に相伴ひ或は感極つて互に抱擁するが如きは、友

情といへば友情、同性愛といへば同性愛とも言ひ得るであらう。つまり此等の事は青年時代に愛情に對する欲求の極めて強い爲めに起る事で、或る程度を越えなければさほど他から心配するほどの事はない。然るに世人や親たちがかゝる親しき間柄を過度に心配して疑惑の目で見るやうな態度を示すと、却つて青年の感情が激しく益々相愛の情を深め又その關係を秘密にするやうになり、遂に不純な同性愛へ向ふことさへもある。此の點は頗る注意すべきことである。

女學校や中學校の寄宿舎で常に問題の種となる姉妹關係や寵愛關係は、勿論右に述べた同年輩の青年同志の友情に姉たり兄たるの感情を交へた程度のもが多いが、併し中にはその年齢の差により年長者側に性慾的因子が介在する場合が少くない。斯様なものはその年齢の差に於いて普通の友情とは見做し得ない不自然なるものがあり、いふ迄もなく絶対に禁止すべきものである。

反抗 人々の智識は経験や學習によつて益々深く且つ廣くなつて行くが、智慧の働きの素質である智能(即ち學習能力)は十四五歳で發達の略々頂上に達するといはれてゐる。青春期間になれば一應自分で物事の理解も工夫も洞察も出来るやうになるので、此の點からも前に述べた自我感が強くなり、子供扱ひをされるのを好まず、何事でも合理的批評的に見て理窟をのべるやうになる。大人の目から見れば未だ黄吻乳臭稚氣満々たるものであるが、一面の理窟だけは一通り通つてゐるので本人は大得意である。親や教師の言葉でも昔の聖賢の書物でも或は道德の原理でも、すべて今までは無批判的に盲従してゐた事を、一應自分の理解の篩にかけて見る。同時に自分の欲求を相當な理窟をつけて遠慮なく主張する。斯様にして生意氣な反抗的態度が青年の特徴となつて現はれるのである。

青年期の特色の一つである反抗心はその智的發達に伴ふ合理的傾向がその直接の原因をなすのであるが、尙ほその外にもつと深い感情的根底がある。それは先きに述べた青年が自己の心を内省することに興味をもつことと性慾の發現することとである。第一に青年は始めて心を己れの内界に向けることをおぼえ己が心を内省し、心中に生ずる種々雑多な空想を楽しんだりすることに大なる興味を感じる。その爲めに少年時代に強かつた同年輩の友と遊ぶといふ事が稍少くなり集團から離れて單獨に物を考へる事が多くなり、或は一種の英雄的な空想から自我感の満足のためにならざるに脱退したりする。即ち今まで自分が從屬してゐた集團から脱して自己の集團に於ける價値を再批判したり、集團の指導者に反抗して自己の價値を認識せしめようとしたりする。

畢竟此時期の心が外より内に向ひ、多人數と賑かに遊ぶよりは退いて自己の價値を批判するやうな事に向つてゐるためである。斯かる心理の病的に顯著になつたのは、青年期に多い精神乖離症といふ精神病に見られる。此の病氣の患者はその性質が全く非社會的になるのをその特色とする。それにも種々な程度があつて、全く周圍の世界から隔離し、人に會ふことを避け、人の中に出るのを嫌がる一種の恐怖症に近いものや、自分の風采、言動に一向關心を示さず、只一人で何かを考へ込んでゐるものや、或は積極的に進んで社會一般や又は或る個人の不合理や偽瞞に憤慨して之を攻撃し、如何なる説得にも慰撫にも頑として耳を藉さず、遂には誰かが自分を罵つてゐるとか笑つてゐるといふやうな幻覺を抱くに至るものもある。而して斯かる精神乖離症患者の外部的態度がかく反社會的又は非社會的であるに反し、その内面には非常に高い自我感を持ち、自説を固執し、自分の價値を顯示せんとする強い欲求を認めることが出来る。それで患者は他の何事にも興味を示さず、只管自己内に閉ぢ籠り冥想に耽つてゐる。以上は精神病の一種なる精神乖離症に於いて見る症狀であるが、此の病氣は青年に最も多く、又病氣ならざる青年でも一般に反抗的精神の強くなることは大體この病氣に似た所がある。一言にしていへば青年はすべて精神乖離症に

近づくものといひ得るものである。

次ぎに青年期には又性に關して種々な空想を描くことが極めて多い。男女の交際の自由な國や、青年男女が唯歡樂にのみ耽つてゐる樂土や、その他文學繪畫等に描かれてゐる所謂『理想郷』を夢みるやうになる。そして理性によつて斯かる空想を合理化し、斯かる樂土が實在し得ることを信ずるやうになると、現在の社會に無數に存在する風俗習慣などを、悉く人を束縛する不合理なものとして打破すべきものと考へ、かゝる因襲や制度に従つてゐる大人を、無知な保守的な奴隸なりと思ひ、之に反抗し之を破壊することによつてこの偽瞞表裏の多い濁世を清掃し得ると考へる。併し青年は斯く如き現代に對する反抗の動機が自己の慾望の満足のためであるとはいはず又自覺もしてゐない。眞に人類の幸福の爲めとか理想の實現のためとかいふやうな高尚なことをいひ又實際にさう考へて居る。併し青年の心の奥を探つて見ると自分の慾望、殊に性愛の満足を求めべき理想郷を夢みて居るに外ならない。露西亞の小説家アルツイバーセフの描いたサアニンが、如何に哲學的に深い思想をもつものであつても、之が全世界の青年男女の大なる歡迎をうけたのは主として其の中に論じられて居る性慾解放の思想によるのである。『戀愛至上』といふやうな思想が

この上もなく高尚なものに思はれるのは青年自身の性的欲求を意識的又は無意識的に満足せしむる爲めである。

青年の反抗の現象は、人によつて程度の差はあるが、斯くの如き種々なる心理的起因を有し、青年全體に通有なる心理であつて、青年が次第に知識を深め、實社會の経験を積むに従つて緩和されてくるものである。それ故に此の反抗をたゞ威壓や糊塗的手段のみを以て鎮靜せしめようとしても、その効はないのみならず、却つて青年を憤激せしめ、時としては猪突的な亂暴な行動に出でしめ、場合によつては有爲なる青年の一生を、取り返しのつかぬことにしてしまふことも尠くない。

憧憬

斯くの如く青年は社會の現状在來の因襲に對して反抗的破壊的な感情を抱くものであるが、又その半面には世の中の美しいもの優しいもの偉大なるものなどに對して、頗る敏感に之を讚美し、之に對する憧憬の感情を強く有するのである。

幼児や少年にあつてもその感情生活に於いて空想は重要な役割をもつてゐる。お伽の世界に憧れたり天上の國を夢みたりすることは殊に幼稚園時代から小學校の初年級に多いが、併し此等の

子供の空想はいはゞ主に知的なもので、たゞかゝる珍しい不可思議なものを考へることによつて満足し、それによつて深く感情を動かされ又は之を實現せんと努力する様な事は割合に少い。子供の生活に於いては何よりも現實の世界が第一であつて、よく眠りよく食ひよく遊ぶ子供にとつては、空想の世界は只知的な好奇心を満足さす程度のものである。然るに青春期に於いて性愛から生ずる思慕の情は第一にその對象の定まらぬのを特色とする。即ち青年は自分自ら何を求むるかを知らないのに漠然と何物かに對してほかに慕はしく思ひ、誰と相手定めぬ異性に淡い戀情を覺える。何か良い事が何處かで自分を待つてゐるやうな氣がしてじつとして居られなくなる。本を讀んでゐる中に、急に何か大きな聲で叫び度くなり、跳ね上つて走り廻り度くなり、わけの分らぬ嬉しさがこみ上げて來るのである。或は月を見たり海を眺めたりしてゐる中に何故とも知らず溜息が出て何か分らぬに涙ぐまれる。但しそれは決して悲しいのでなくその中に何と無く嬉しい甘い所がある。甘い美しいものを求める嬉しさと急に之を求め得られぬやるせなさとの交つたやうな氣持である。そしてこのやるせなきあこがれの心は、幼児や少年が單に好奇心から空想して見るのとは餘程違ふ状態で、その根底に新しく發生した性慾の強い本能が漠然と働いて居るのである。

この淡い漠然とした戀愛の感情の發生から、それが一人の異性に固定するまでには随分長い期間を経過する。此間が青春の煩悶の時期であり、又藝術、道德、宗教等の高級な感情を涵養し、眞に人間らしい教養を得て豊富なる経験を積むべき時期でもある。従つて斯かる漠然たる戀情に基く憧憬の感情が現はれたからと言つて、之を直ちに性慾の満足に導かうとするのは非常な間違ひである。むしろ此の徐々に盛んに表はれる性慾を意志の力を以て抑制し、之を昇華せしめ、憧憬の情に驅りたてられる精神的エネルギーを以て、知的に又感情的に人間としての教養を高めて行く事が大切なのである。即ち青年の憧憬の心を、學問、藝術、道德、宗教の世界に徘徊せしめ、人類が極めて長い過去に於いて蓄積して來た文化を成可く多量に攝取せしめ、青年自らが教養ある文化人となつて人類の今後の發展に貢献することの出来る様な素養を作らしめねばならぬ。併し乍ら本來青年の憧憬の根源は愛情の對象を求めてゐるのであるから、青年は自己の指導者として、よく青年に同情し青年を理解し青年の抱く疑惑や煩悶を打明ける相手となつてくれるやうな人、又青年が満腹の信頼と尊敬とを捧げ得るやうな人を望むのである。青年が父母や教師に反抗する一面には、青年自身の渴望して居る斯くの如き指導者に對する憧憬が強いのである。

青年がよき指導者とよき文化的環境を得ざることは彼等にとつて極めて危険である。現代の社會殊に都會の生活に於いては、青年の周圍には世俗の低俗なる享樂に迎合し之を挑發する頹廢的文化(?)が充滿し、劣等なる無數の娛樂機關は日に月にその數を増して行く。戀情の對象を求めて何物かに憧憬しつゝ、彷徨する若い魂が、斯くの如き環境に誘惑され易いことは火を見るより明かだ、その結果は感情の廢頹となり、腐敗墮落の淵に陥つてしまふのである。

自己の周圍に自分の文化的憧憬を満足せしめるものを持たざる農村の子女は華かな都會の生活に憧れて故郷を棄てようとする。年々農村から都會に出る青年男女の數は頗る大きく、都市は年々に膨脹して農村は年々に衰微して行くが、それ等の都會に集り來る青年の大部分が都會の惡風に染んで倫落の道を進むことは、實に由々しき問題である。

學問でも藝術でも又は運動競技でもよい。或は手に汗して終日働く勞動ならば尙ほよい。ともかく青年は一心を打込んで何事かを一生懸命にやる必要がある。仄かに心を躍らす憧憬を明日に夢みながらも今日の一日を精魂竭して勵まねばならない。而も青年の心が熱望しかつて居る所のは人の情けである。青年を刻苦勉勵せしめる傍らには之を慰め勵ます暖い人の心が

必要である。青年が生活のよき半分を得るまでは、親も師も兄も姉も之に代つて青年の心を暖めてやらねばならぬ。

第七章 子供の道徳的感情

第一節 道徳と本能

道徳の發生 人は單獨で居るよりも同類のものと群居する方が、食物を得るにも生命の危険を免れるにも遙かに便利である所から、動物の時代から既に集團生活が發達し、人間に於てはその集團が何萬何百萬といふ多人數を含む所の都市や國家を作るに至つた。斯くの如く集團生活が營まれると自らそこに秩序が生じて、自己の我儘勝手を通す爲に他の人々の迷惑になるやうなことをしないやうにしなければならぬやうになり、して良いこととして悪いこととが、不知不識の中に定まつて行く。かくしていはゆる道徳といふものが自然に發生して來るのである。普通には道徳と本能とは相反するものであると思はれ、道徳は昔の君主か聖賢のやうな人が考へ出したもので、之によつて人間の自然の本能の欲求を抑壓する窮屈不便なものであるといふ風に考へられ易いが、實際はこれと正反對で、多數の人々の間の本能的欲求から起り易い衝突争闘を避け、幾

分かの不満足を忍んで大なる欲求の満足を求め、人類をして平和に安穩に生活して益々容易に其の多くの本能を満足せしめんが爲に、人類の悠久なる歴史の中に、人類の生活そのものの中から、何時ともなく自然に發生して來たものである。此の點から見ると本能が人類に自然に存するやうに道德も亦自然に存在して居るものなのである。君主や聖賢はたゞ在來からあつた不文の道德律を、明かな言葉でいひあらはし、或は之を組織立てたといふ位のことには過ぎない。

道德のみならず、藝術でも宗教でも之と同様に、何人が考へて作つたといふことなく、人間本能の要求から自然に生れ發達して來たものなのであるが、此等のものゝ發達には自ら二つの時期を分けて考へることが出来る。即ち一は自然發生的なもので本能的無反省的な時期であり、他は理性的反省的な時期である。道德でいへば、人の集團生活から自然に起る風習の如きものは前者で、制度や成文律等になつて現はれるものは後者である。併し第二のものは第一のものに基いてその上に反省や統制が加へられて出來るもので、本當の道德感情の根源は、人々の生活欲求から自然に生ずるものであることを常に忘れてはならぬ。今日に於て道德の改良や矯正を企てる人々は、多く理性的な考へのみから行はんとするに傾き易いが、人類の發生以來悠久の間に自然に徐々に

發達し來たつた實際生活の秩序に對して、たゞ理性的な考慮のみから之を改めんとすると、動もすると種々な無理が起り易く、却つて以前よりも悪い結果になる事が少くない。かやうな場合には必ずその外に實際の感情を伴ふ本能的な方面に十分留意した後に於いてしなければならぬ。

人間にある多くの本能は皆人類の生存に必要なのであり、又必要であればこそ今日に於いても尙ほ強い勢を有して居るのであるが、併し動もすると多くの本能相互の間に互に矛盾衝突が起り易く、場合によつては或る一つの本能が餘り強すぎた爲めに、他の本能を抑制し或は妨害して生命の他の必要を犠牲にすることも少くない。たとへば餘りに食慾のみが強くはたらくと必要以上に食物をとり或は食へては悪いものを食へて却つて身體を害することがあるが如きである。本來我々の生活は常に多くの本能を基礎として多方面な活動を營むことに存するのであるから、時の状況に應じて或る時には或る本能を制し、或る時には他の本能を抑へ、かくして常に數多の本能を調和して、なるべく多方面の欲求の満足をはかる事が大切である。今反對に或る一つの本能のみが過度に強く働き他の本能を壓迫すると、自己一身を害し更に集團生活にも妨げとなることが多いから、かういふのが反道德的といはれるのである。繰返していへば集團生活は多數の人々の多數の

本能の欲求を出来るだけ満足せしめるために行はれるものであるから、集團生活に於いて自然に出来る道徳的な秩序は、とりも直さず各自の本能的欲求の調和を計るものに他ならない。従つて集團の秩序に従ひ、之を犯さない事が道徳的行動となるのである。併し人によつて欲求の強さも種類も違ひ、文化の發達につれて人間の欲求は時々變つてくる爲に、自然に發生し來たつた集團的秩序も時に應じて種々に改變せられねばならぬやうになる。更に人々の知性の發達すると共に、此等の集團的な秩序や社會的な統制などについて理智的な反省が加へられ、かくして自然發生的な道徳が徐々に反省的な色彩を帯びて來る。時として集團の秩序が少數の人々だけに都合よく、他の大多數に不都合なものであれば、紛糾が起り易く、人々はそれよりもつと公平な秩序即ち新しい道徳を欲するやうになる。これも結局道徳が本能的欲求の満足を根本としてゐるからである。

子供の道徳教育の主眼

子供は其の身に自然に備はる生物學的本能を有しつゝ、一定の集團的秩序を有する社會の中に生れ來るものである。そこで子供の道徳教育の根本は、第一に子供の自然の本能を十分に發達せしめ、生活力を旺盛ならしめること、第二に子供自身その多くの

本能の間の調和をなし得るやうにならしめ、或る少數の本能の我儘を通すことなく、之を抑制する力を得しめること、第三に自分一人の我儘を抑へて其の社會の道徳的秩序に従はしめることの三つとなる。而して子供に於いて最も大切なのは、第一と第二とであつて、此の二つによつて、子供自身の道徳的感情を強めるのでなければ、第三にいふ所の社會の秩序に従つて道徳的な生活をする事が出来難い。然るに在來の人々は屢々此の點に注意せず、第三の點のみを子供に對して強制せんとして、専ら生活の形式ばかりを喧しく言つて、其基礎となる生活力を涵養することに着目することが少なかつた。それ故に子供は社會的秩序を守るべき形式のみを教へられて、子供は『斯くすべし』『斯くすべからず』を知つてゐても、それに従つて實行する力がなく、他からの誘惑に抵抗し得ずして知らず識らず反社會的行動に陥ることが多い。前章に於いて述べた如く、子供にとつては先づ生活感情の教育から始める事が最も大切で、之がとりも直さず子供の道徳教育の基調である。生活力が旺盛でなく、親のいふことをきかないといふ子供は、むしろ道徳的發達の自然の一段階にあるものなのである。或は場合によつては激しい恐れも怒りも喧嘩も子供の道徳的發達に必要なものである。子供の生活力を盛んにすることを考へずして、たゞ外面のおと

なしくなることを求めることは、多くの親たちの陥り易い過ちである。

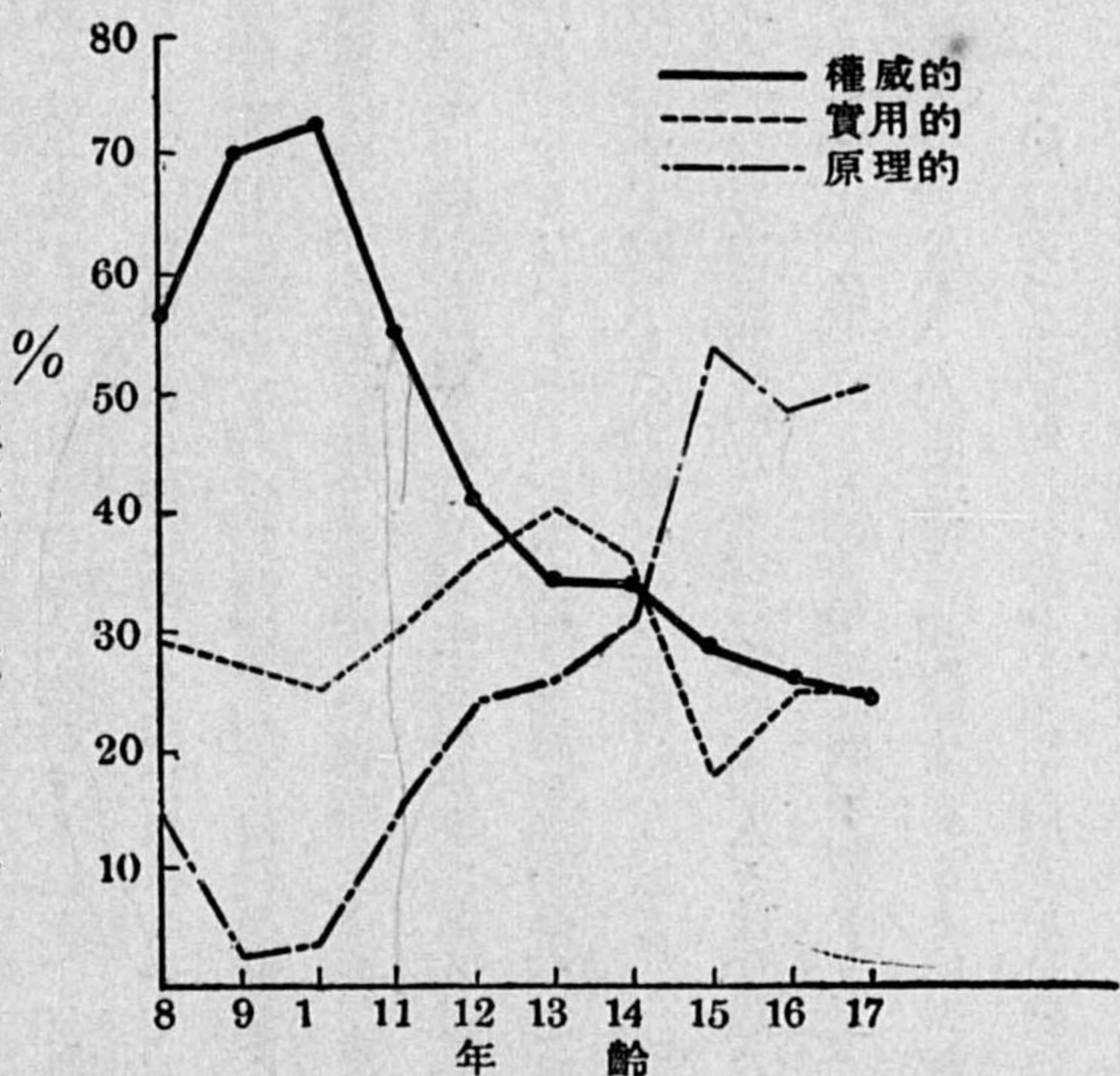
更によく考へて見ると、子供の時に行儀がよいから大きくなつても品行方正だとか、子供の時に従順だから大人になつても温和であるなどといふ豫知は出来るものでない。子供が成長發達するにつれて種々の異つた性質が現はれて來るのみならず、子供と大人とでは生活環境が違ふから、子供の時には温和であつたのが大人になつてそれと正反對な性質になつたり、子供の時には他からの強制力に對して従順であつても、大人になつて他から制馭されぬやうになると、反動的に我儘勝手になつて了ふものも多い。子供の道徳教育に一番大切な事は、よく基礎的な生活訓練をやつて發洩たる生活力を養ひ、この時代に自然に發生し來たる道徳感情を強めるやうにすることである。さうすれば後に大きくなつて種々な難關や誘惑に出會つても之に負けることなく自分の善と信ずる所に向つて邁進し得る強い大きい人物となり得るのである。

第二節 子供の道徳

子供の善惡觀

人類に於ける道徳の發生に自然發生的本能的な時期と反省的理性的な時期

とが區別される如く、個人の道徳的發達の中にも斯くの如き二つの方面を區別することが出来る。第一は子供が一つの社會の中に生活する以上、自分の我儘を自由に通すことは出來ず強制的に他の人々から強ひられる形に於いて現はれるもので、第二は子供が自ら反省し自己の理性に訴へ又自尊心の力によつて自らの我儘を制し自己の理念に従つて行動せんとするものである。幼い間の道徳は殆んど全部前者であつて、子供のしてよい事は他から許され又は賞められる事であり、して悪い事は他から禁ぜられ又は叱られる事である。ドイツの或る學者が多くの子供に『何故従順でなければならぬか』といふ質問を發し、子供が之に對してなした答を集めて三種類に分類した。第一は權威的なもので例へば『先生のいひつづけたから』等の如く外部からの強制や權威によるといふもの、第二は實用的なもので例へば『人々は従順な方が平和でよい』といふ如く、實用や利益の點から合理化し様とするもの、第三は原理的なもので、即ち従順は他からの強制でも日常生活の利便のためでもなく、人間道徳の必然性であるといふ意味の答である。そしてこれ等三種の答が兒童の各年齢に従つて如何に分配せられて居るかを表にすると、大體に於いて第二圖の如く、子供の間は大部分が權威的なものが多いが、十一歳以後は此の種のもものは次第に減少する。これに反して原



第二圖 何故従順でなければならぬか (Rotmannによる) 男兒回答種類別年齢別%

理的なものは九歳十歳頃は甚だ少いが、十四五歳の青年期になつて急に増加し、恰も前者と正反對の方向を取つて居る。此の圖は男兒の結果であるが女兒でも同様であり、年齢の低い頃の權威的な答は更に男兒より多い。この傾向は我國に於ける諸種の調査でも同様に認められる所である。もつと幼い幼兒については斯かる形式による調査は出来ないが、親しく子供一人一人について質問を試みると、彼等の殆んど全部が只『それは良い事だから』とか『お父さんに賞められるから』といふ様な全然無反省な服從的態度を示すのである。してよい事と悪い事との區別は三四歳にも

なれば相當分つて来る。即ちそれまでに幾度となく親から叱られたり或は褒められたりして漸くこの區別が出来るやうになつてゐるが、何故にしてよいのか悪いのかは全く解つては居ない。それ故に子供に自我感が強くなつて意地を通さうとするやうになると、親がしてはいけないといふことをわざと見たり、反對にしないといふことをしないやうになり、即ち親のいひつけを守らないことに誇りや愉快を感じてくる。之が所謂いたづらとかやんちゃとかいふ時代であるが併し此の時代の子どもはしてよいこと、悪いこと、はちやんと心得てゐるのであるから、改まつて説きかかせても眞面目に聞かうとしない。所が同じ事を親でない權威者たとへば先生とか巡査とか醫者などがいひつけると、直ぐに服従し又服従することを喜ぶやうにさへ見える。即ちしてよいこと悪いことそれ自身には少しも變りはないが、子供の感情をゆり動かして行爲を生ぜしむると否とは何人が命令又は禁止をするかといふ點に懸つてゐる。而してこの『何人』は子供にとつて權威をもつもの、即ち偉い人、強い人、大きな人、立派な人であつて、幼少な子供に於いてはそれは親であつたが、生長するに従つて次第に外部の勢力に移つて行くのである。かくして子供は自分が見て權威者なりと思ふ人のすることはすべて善いことと思ひ其の禁することはすべて悪いこ

となりと考へるのである。或る心理學者が「巡査が或る家に忍び込んで金品を盗んで出ようとした時、後から来た泥坊が見つけて其の巡査を警察へ連れて行つた。所が警察では早速泥坊を牢屋に入れ巡査に褒美をやつた」といふ筋の話を子供に聞かせて、それでよいかどうかと尋ねた所、大きな子供は勿論そんな馬鹿な話はないと云つて矛盾を指摘したが、四つになる女の子はそれではないといひ、その上「何故泥坊は逃げなかつたのだらう」と不思議がつた。此等は幼い子供の善悪の感じ方を如實に現はしてゐる實話と思はれる。

子供が最初の強情期(即ち三四歳頃)を過ぎる頃から態度が大分變つて来て、善悪に關しても、規則に従ふことといひつけを守ることがよいことであるわけが分るやうになり、自ら進んでよい事を行はうとする心が強くなり、更に生長すると行爲そのものに善悪の價值のあることを大分はつきり知るやうになる。善い事は人の爲めになることであり、悪い事は人に害となることであると思ふやうになる。之は親や教師から教育された結果でもあり、又子供が集團生活の中から自得した結果でもある。そして青年期になると全く抽象的に善悪の本質を究めようとするやうになる。

このやうに子供の幼少な時にはその善悪観は全く大人の命令や禁止などによつて定められるか

ら、子供の善悪観に對する大人の責任は中々重大である。然るに大人と子供とは精神的水準も違ひ生活環境も異つて居るから、大人の道德をそのまま子供の世界にもつて來ることは出來ない。例へば大人の世界では「嘘も方便」で時には嘘を言はねばならぬこともあるが、子供には決して嘘をいはずいつも正直であれと教へねばならぬやうなものである。又大人が自分でよいと思ふことが必ずしも子供の本質から見てもよいことでない場合も多い。従つて大人が子供の本性を考へずして直ちに自分の考へのみで子供に善悪の指圖をすると誤に陥ることが少くない。前の例でいへば子供が大人の眞似をして時としては嘘も方便であると考へ、巧言令色を以て人の機嫌をとる事をおぼえたり、欲しい物を率直に欲しいといはずに親の機嫌を伺つてから後にする様になるが如きは、親の間違つた態度から由來する所が多い。子供の道德は本來自己本位の所がよいのである。子供は大人と異つて未完成の状態にあるのだから、たゞ自分を完成し生長せしむる事を主たる目的とすればよいので、それが即ち子供の道德なのである。からたを丈夫にし慾望を旺んにし十分に食ひ十分に遊んで心身を生長せしめる事がよいので、あまり過度に他人の感情を顧慮したり世間的の義理を重んじたりしない方がよいのである。かうして心身が健康に發育生長すれば、子供は子供

同志の集團生活の中から自然に種々の道德を體得して行く事は前に述べた通りである。併しその時にも大人の社會生活に於ける道德や儀禮そのまゝのものを習得するのではない。子供の集團は大人の社會と種々な點に於いて異り、組織も十分に出來て居らず反省的な制度も規則もない。子供は皆自己の慾望を満足させやうとする心が強く、自らを抑へる心はまだ弱い。皆で精一杯遊ぶことが面白いから、そのために必要な秩序や指圖に服従し幾分か自分の我儘を抑へるやうになり、それが次第に子供の道德となつて行くのである。大人からは我儘をいはずに他人にも讓歩して中よく遊びなさいと教へられるが、かゝる教へは子供の實際の生活と結びついて初めて子供の道德感情を養つて行くのである。もし集團の事情が不都合であつて自己の慾望が思ふやうに満されない子供があると、かゝる教訓がその子供の實際の生活の満足と結びつかず、その爲めに親から喧嘩するなどはされても意地悪がしたくなり、正直であれといはれても嘘をいつて驚かしたくなる。之は子供として止むを得ないので、根本的な欲求の満足が十分でないと如何に何々の事をせよといはれてもそれが出來ず、却つて大人はいゝ加減な自分勝手なことをいふと思つてしまふ。此點を考へてやらずして徒らに規則や訓戒のみで無理に服従せしめようとしても、それは不可能

であり、随つて眞の道德感情は養はれない。

親に對する絶對感

併しながら前にも述べたやうに大體に於いて子供の善惡の標準は子供が偉いと思つてゐる人の指圖や許可によつて定まるのである。然るに幼少な子供にとつては其の偉いと思ふ人は先づ父と母とであり、生長するにつれて次第に家庭外の種々な大人たとへば學校の先生とか巡査とかいふ人々になり、更に生長して廣い世間の事が分つて來ると、大臣とか大將とか歴史上の偉人とかいふ人になるのである。

幼少な子供は父母をどう思つてゐるか、この點については多くの學者が種々な調べを行つてゐる。その結果子供は親を世界中で一番偉い人だと思つてゐるといふ點では總ての人の意見が一致してゐる。子供が集ると互に自分の親が一番偉い人だといつて自慢し合ふことが多い。それは單に親を自慢して自分を偉く感じるためではなく、眞實に親を一番偉いものと信じてゐるからである。お父さんは何でも出來、何でも知つて居り、お父さんのする事はすべてよい事だといふ風に、子供は親の全知、全能、完全を信じてゐる。或る學者の研究では親の遍在さへも信じて居た子供があつたといふ。即ち親は同時に凡ゆる場所に居ると考へるのである。ともかく子供は、大人が神

に賦與してゐる性質を親に賦與してゐる。即ち親は子供の神であり、絶対にえらいものなのである。

斯様な親に對する絶対感はどこから生ずるか。これは甚だ難しい問題であるが、近頃瑞西の兒童心理學者であるピアジエは、子供は兩親の威壓によつて道徳を知るやうになるといふ旨を述べてゐる。即ち子供は常に兩親の支配下にあり、欲望の満足も抑制も危険からの保護も悉く父母によつてなされ、父母の勢力が子供の生活環境の全背景をなして居る。此の爲めに親に對する子供の絶対感が生ずるのであるらしい。即ちそれは親と子供との生活關係から生じて來ると考へるのである。

併し實際に於いては親は平凡な人間であつて全能でも完全でもない。子供の知力が進み、自我感が強まり、自分自ら世界を知り自分の力を試すことが出来るやうになると、子供の親に對する絶対感に動搖が起る。子供に大人の社會の階級や地位が分りかけて來ると子供は頗る苦しみ幻滅を経験する。父母よりもえらい人々があることが分り、親に隠れて悪いことをしても親は知らずに居ることを経験したりするにつれて、親のえらさが次第に減じて來る。その上子供の知力が進

んで、記憶や判斷が稍正確になつてくると、大人が日常示す一寸した過ちや前後矛盾せる事や、案外物を知らないことなどを子供が見て、次第に親の完全でないことを知るやうになり、親に對する絶対感は減少し、親以外のえらいものを崇拜するやうになるのは當然のことである。然るに親は動もするといつまでも子供に對して絶対權を保持しようとするのは甚だ無理なことである。子供が生長するに従つて其の道徳は親の意志に服従する盲従時代を離れて、次第に自ら考へ自らはなりと信ずることを行ふやうになつて行かねばならぬからである。

子供が更に生長して青春期前後になると次第に知能も發達し自我感も甚しく強くなる爲に、動もすると親に反抗するのみならず、或は親を馬鹿にしたり、親が己れの欲求に従ふのはあたりまへの事だ位にまで考へるやうになる。之は親として悲しむべく又腹立たしい事ではあるが、又止むを得ないことである。併し此の如き場合でも親は親としての相當な知識と道徳とをもち、心から我が子を愛し、隨つて其家庭生活の團圓が行はれてゐるならば、子供の心の底には親に甘える感情がかなり力強く残つて居て、人の子としての感謝敬愛の感情はその一生涯を通して決して失はれるものではない。

然るに之と反對に親が道德又は知識の點に於いて缺ける所があり、餘りに無知であつたり又は道德上好ましからぬ不行跡などがあると、子供が親の絶対權を疑ふ時期が早められ、道德教育上甚だ面白くない結果を生ずる。即ち正常に行けば子供は親よりも更に高い權威を見出して之に服従すべき筈であるが、心身の發達が未だそれまでに至らぬ中に親が子供の絶対感に値しなくなつてしまつたため、子供の行爲は何等の據るべきもなく全く無軌道を走る事になる。このことは他の場合でも同様で、例へば教師の絶対權なども、子供が自ら善惡の判斷に従つて行爲し得るやうになつてから教師の權威が薄らぐならば差支へないが、未だそこまで發達してゐない子供に、外部から教師を誹謗した言葉を聞かせ、或は教師の過失を知られたりして教師の權威が失墜したら、自己の行爲の據り所を失つた子供は全く放埒になつてしまふより外はあるまい。

思慮が足らず誘惑に陥り易く是非善惡の判斷が幼稚なる青少年の時期は、假令子供の絶対感が親や教師から離れても、親や教師やその他社會一般の隠れたる監督はどこ迄も必要である。即ち子供自身は自分勝手に行動してゐるやうに思つて居ても、その背後には常に隠れたる監督の眼がなければならぬ。かゝる監督の眼があまり表面に出過ぎると却つて子供の反抗を起すが、何時何

處でも之を背後に感じるやうな見えざる監督は極めて必要である。

子供の嘘

子供が權威を感じてゐるやうな人の居る所、或は子供がその人の眼が届いて居ると感じるやうな所では、大體に於いて子供はその權威の命するやうな行爲をする。いはゞ一種の豫感的恐怖を伴ふ感動のために衝動的な行動が抑制されるからである。併し子供の生活はまだ十分理性で統制されてゐないから、時によつては強い本能的な欲求に壓倒されてそのまゝ悪いことをしてしまふこともあり、或はその不器用や拙さや不注意のために過失を犯すこともある。子供の生活にはかかる場合が非常に多い。悪いことを敢てしようとしたのではなく、うつかりしたことが悪いことであつたのである。或は多少悪いとは思つたが誘惑が強くてつひしてしまつたといふやうなことも多い。このやうな時に子供はどうするかといふに、彼等の自然に任せるならば殆んどすべてが事實を隠蔽する。即ち嘘をつくののである。嘘については悪いことは知つてゐるけれどもかゝる場合に當つては嘘をつくのが矢張り子供の自然なのである。子供は又案外強情で、一度事實を隠して嘘をついたら、今度は嘘をついたことを隠すためにその嘘を守らうとする。追求すれば追求する程こじれて来る。この點は子供の道德教育上大いに考慮してみなければならぬ

問題である。

子供の嘘の原因又は動機は必ずしも右に述べたやうな場合にのみ限られるものではない。友人に何か誇らうとして法螺を吹く事もあれば、他の子供を助けんがために嘘をいふこともある。空想に任せて出鱈目をいふこともあれば、物が欲しくて嘘をいふ時もある。併し斯くの如き嘘は比較的少なく又やゝ特殊性を帯びるが、子供の嘘で一番多く且最も自然に起り易い嘘は即ち過失や悪事を隠さんが爲めのものである。

この種の嘘は「危機の嘘」ともいはれ、人が或る危機に類した時其の場を逃れる方便として選ぶ手段なのである。大人に於ける言逃れ、口實、ごまかし等も之に屬するもので、大人の社會では「嘘も方便」などといつて之に理窟をつけて居るが、子供にはかゝる嘘は成るべく注意して云はせないやうにさせねばならぬ。

子供が此の種の嘘を云ふ動機は恐れであつて、罰や叱責を免れようとするためである。極めて幼い子供はこんな場合には泣いて率直に恐れを現はしてしまふし、既に生長して感情の人爲化を覺えるに至つた子供は泣いて大人の温情に縋らうとするが、その中間の子供はこの恐れを嘘に逃げ

ようとして『そんなことはしない』とか『自分がしたのではない』などと答へてしまふ。一度さう答へると其の後は取返しがつかなくなつて、問ひつめられるに従つて種々言譯けや口實を案出して悪質の虚言を作り上げてしまふ。

此のやうな場合に子供が咄嗟に『自分ではない』などと答へるその時に其の心中には既に「悪いことをした」といふ感情は起つてゐる。その時に大人が『お前でなければお前でなくてもよい、併し誰がしたにしても之はよくないことだ。今度からは氣をつけてこんな事をしないやうにしなければならぬ。うつかりしたことは仕方がないが併しそれを正直にいふ者は偉いのだ。悪いと思つたらあやまればよい。誰でも一度は恐いから隠すけれどもお前が偉い子ならば正直に言つてごらん』といふ意味を、穩かに言つてやれば、大抵の子供は嘘を押通すやうなことはしないものである。子供の過ちを咎めるのはこの程度であつてほしいと思ふ。最初の嘘の時が非常に大切なのである。誰でも子供をもつ者は一度は斯様な嘘に遭遇しなければならぬが、その最初の處置を誤ると後に悲しむべき結果を生ずることも少くない。父の愛木を伐つて正直に告白した少年ワシントン は確かに偉いが、彼れがああ告白をした時それを歡喜で迎へた父なればこそ其の子にあの告白